
東方桜桐記

SRNEKO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方桜桐記

【Nコード】

N5547J

【作者名】

SRNEKO

【あらすじ】

【祝！ 10万PV突破！ 皆さま本当にありがとうございます！】

中学三年生の夏、俺は妖怪退治を始めた。

三年後、妖怪退治は終わりを迎えた。

たくさん犠牲者が出た。

それから数年後、成人式を迎えた俺は、再び妖怪たちと見えること^{まみ}となってしまった。

俺は、いつまで主人公を続けられればいいのだろう……。

当作品は、横書きで読むことを考慮した書き方をしていないので、PCでお読みの方は縦書きでお読みいただくことを強くお勧めいたします。

誤字脱字・感想・批評などありましたら気軽に書いてみてください。ポイント評価のみでも頂けたら喜びます（事実）。

～現在登場済みキャラ～

霊夢（第二章、第三章、第五章、第九章、番外編、第十六章、第十七章、第二十章）

魔理沙（第三章、第五章、第六章、第九章、番外編、第十二章）

妖夢（第三章、第五章、第六章、第七章、第八章、第九章、番外編）

紫（第一章、第二章、第四章、第七章、第八章、第九章、番外編、第二十章）

藍（第四章、番外編）

幽々子（第六章、第七章、第八章）

文（第八章、第九章、番外編）

優曇華（第九章）

てゐ（第九章）

早苗（第九章、番外編、第十一章）

咲夜（番外編、第十章、第十一章）

レミリア（番外編、第十章、第十一章、第十三章、第十五章）

美鈴（第十章）

慧音（第十二章、第十三章、第十四章）

アリス（第十二章）

幽香（第十五章、第十六章）

萃香（第十六章、第十七章、第十九章）

天子（第十七章、第十八章、第十九章、第二十章）

↓以下今後登場予定作品&キャラ↓

紅魔郷^{チルノ}

妖々夢（橙）

永夜抄（妹紅、永琳、輝夜）

花映塚（映姫、小町）

風神録^{にとり}

地霊殿（勇儀）

緋想天（衣玖）

以上以外は本当に出てくる予定がないので、もしこのキャラクターを出してほしい、という要望があったら気軽に言ってください。
番外編での出演があるかもしれませんので。

それから、なんとなく下に登場させるつもりはないけど、登場させたい方々をば。

紅魔郷（フラン、パチュリー、小悪魔）

妖々夢（プリズムリバー三姉妹）

風神録（諏訪子、神奈子、雛）

地霊殿（パルスイ、さとり、燐、空）

星蓮船（ナズーリン、小傘、一輪、星）

設定資料的なものが紛失したけれど気合いで執筆中。

序章（前書き）

え、何？ 俺死ぬの？

まだ序章だよ？ 俺主人公だよ？

それでも死ぬものは死ぬんだからしょうがない？

……誰か嘘だと言ってくれ。

序章

俺はたぶん、死んだ。

二十歳になってから初めて迎えた成人の日。成人式も、そのあとに行われた中学校の同窓会も終わって、それなりに楽しかったかな。式では小学校から高校までの友人の大半に会えたし、同窓会では酒を交わしながら昔話に花を咲かせることもできたし。まあ、昔話の一部は誰もが意識して避けていたけれど。

でも、それでも皆、当時のことを掘り返すことなく過ごすことが出来たのは、とても良いことだと思う。

たとえば、中学三年生の夏頃から三年間、俺が妖怪共と戦っていたこと。まあ、これ以外避けるべき話題はないのだけれど。

当時、俺の住む神宮町では、小学生の失踪事件が多発していた。小さく大した特色もないこの町で起きたその事件は、県だけでなく全国的に広まっていた。たぶん、当時は町民よりも警官たちのほうが多かったかもしれない。

そしてその事件は四ヶ月もの間、収まることなく続き続け、最終的には二十人が失踪。その内助かったのは僅か六人、だったか。

この事件を起こしたのは、神宮町に巣食う妖怪たちで、それを退治したのがこの俺、宇條桐嗣^{うじょうきりつぐ}なのだ。

町に代々伝わる（らしいが、今もなお詳しいことは知らない）妖刀を偶々、偶然、確実に必然的ではなく手にして、偶々、偶然以下略な感じで子供を攫う妖怪を目撃しそれを斬った。

それからだ。

それから、町の妖怪たちは俺を標的として、ありとあらゆる手段を使って襲いかかってくるようになり、友人、家族、恋人、になればよかった相手、様々な人たちを使ってきたのだ。

俺はすべて護ろうと必死になった。だが、俺一人の力で限界があった。犠牲となった人は、両手の指の数じゃ収まりきらない。足の

指を加えれば、ギリギリ足りるかもしれないけれど。当然、怨まれた。そして俺自身、自分の非力さを怨むばかり。

だからだろうか。他者や俺自身の怨みに反応したのか、刀は新たな力を発現した。確か、高校二年生の春頃か。

新たな力は、妖怪をまったくものともせずに排除していった。

そしてその年の夏。俺が刀を手にしてから三年目のその日、そいつは現れた。

神宮寺三倉。

名前の通り、この町に古くからある家系の一つで、彼女はその四代目当主だった。

彼女は俺の前に現れて、すべては自分が仕掛けたことだと口にした。本来はこの町を消し去るのが目的だったが、俺という存在が現れたために、標的は俺一人となっていた。しかしどんなに強力な妖怪たちを嚇^{けしか}けても、俺を殺すことが出来ない。痺れを切らし、すべての元凶である彼女自ら出てきたのだ。

さて、結論から言って当然俺は勝利した。そうでなければ今まで生き永らえているのは俺じゃなく彼女のほう（すでに死んでいるけれど）だ。

別に彼女が弱かったなどということはない。この町の妖怪たちのすべてを統べる存在だったのだから、当然それ相応の力を持っていたし、彼女は頭もキレる。

しかしそれでも、俺は勝ったのだ。

まあ、最後に呪いが何だとかって口走っていたけれど、負け犬の遠吠えのはずで。ほら、呪いって術者がいなくなれば効力を失うつてのが常識的なものだと思うし。なんとなくだけれど。

で、それからは妖怪たちも大人しくなり、無闇に人を襲うことはなくなった。

ということとで回想終了。後半かなり掛け足だったけど大丈夫？てかこれ、もしかして走馬灯ってやつじゃね？

えー、今俺は目の前に迫っている軽トラのおかげで酔いも醒めて

来て、あれ？　これ避けられるんじゃないやね？　とか思っているのだけれど、正直言つてもうそんな距離じゃないしその上酒が入つてゐる所為か身体が思うように動かないし、そんなことを考えている余裕があるなら避けられるはずだろと思つたり思わなかつたりしたああああああああああああああ俺死ぬうううううううううう！

序章（後書き）

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。

第一章 あ、死んでいませんよ？（前書き）

嘘だったみたいだ。

何がつて序章のこと。良かった良かった。

主人公なのにいきなり死亡とかマジ勘弁。

まだ別にれいがーんとかって出来るようにならなくていいから。

第一章 あ、死んでいませんよ？

気付いたら見知らぬ天井を見つめていた。なんていうありがちな展開を迎えてしまったのだけれど、それはカレイ（決して華麗でも佳麗でも無い）にスルーするとして、まあ、なんて言うか、俺は生きている。区切りの前章で死ぬとか叫んでいたようだけれど、生きているみたい。

あれかな。身体は痛くないから、トラックに轢^ひかれたけれど無傷で生還していた、なんていう展開なのかな。まあ、有り得ないけれど。

あ、いやでも待てよ。俺は避けられると一瞬でも思った。つまり、実は避けていた、という可能性だって無きにしも非ず、じゃないかな。しかしそのときの常人らしからぬ集中力と身体能力を発揮して、疲労のあまり倒れてしまった。そしてそこに通りすがった可愛い、若しくは美しい女性の自宅に運ばれて、只今絶賛看病中、という事実はないらしいね。

そもそも何で女性限定だよ。俺の頭大丈夫ですか！？ と聞きたいくらいである。

とまあ、そんな意味不明な思考をしてしまうのは、頭痛に原因があると見られる。その所為で頭がくるくるぱーなんだきつと。くるぱっぱーでも可。

そんなわけで頭痛が酷いし、その上身体も妙に重たいので、身動きとらずに現状把握に努めようかな。

現状その一、布団に仰向けで寝かされている。

現状その二、畳の匂いがするのでここは和室。襖も見えるしねー。

現状その三、上空で何やら両端にリボンの付いた線が入り、何か開いた。

や、もう何が開いたのかわからないけれど、時空が切り拓かれた！
みたいな。そんな感じ。うん、自分で言ってて意味不明ですす

いません。えと、その中に人間の目みたいなのが大量にあって、それがこつちを見ていて、すごく、気持ち悪いです。

とか思っていたら中から何かが降ってきた。なんか紫のドレスっぽい服を着た、金髪を腰まで伸ばしたびっじよっぷっ！」

「あら、それ新しい挨拶かしら。じよっぷ！」

違うのだが腹に、というか狙ったかのような絶妙な位置、つまり鳩尾辺りに重たい衝撃を受けて超絶賛悶絶中の俺は言い返せない。

とりあえず金髪を腰まで伸ばした美女と言いたかったただけなのに！

「それにしても起きるの早いわね。寝ていると思っていたから、起こすのも兼ねてこっやって真上に開いてみたのだけれど」

「寝てるときに降ってこられたら危ないですけどね！」

言い返せた。良かった。というか寝ている人の上に乗られるのはちよつと勘弁。着ている物とか持っている物の所為もあって若干重いし。まあ、スタイルの良い人なので助かったかな。てか俺を拾ったのが美人さん説大当たりじゃないか！

「で、そんな貴女はこの誰？」

「こんな私は幻想郷の境にある屋敷に住んでいる八雲紫よ。やくもむかり八つの雲に紫で八雲紫。おーけー？」

何かとても可愛らしい仕草をして言ってくる八雲さん。

「おーけー」

とりあえずそれだけ返す。たぶん、次は彼女から質問されるはずとか思っていると、八雲さんは俺の上から退いて、横から俺を見下ろす形で座った。

「さて、本当なら人に名前を聞く前に自分がまず名乗れ、と言うところを名乗ってあげたのだから名乗りなさい」

「ん、ああ、そうか。俺は宇條桐嗣。字は」

「知っているから良いわ。それと私は人じゃないわよ？」

いや、いきなり何もないとこから現れた時点で人だと思っただけですよ、と。

「というわけで次貴方から聞きたいことあったらどうぞ」

ほう、言いながら俺の腹を撫で撫でしてくれてる。子ども扱いか！と思わんでもないが痛いので受け入れる。うむ、何か良い人そうだ。人じゃないけど。

「じゃあ、幻想郷って何なのかっていうところから教えてほしいのですが」

「そうね。それは詳しく説明するのは面倒だから、とりあえず、人間と妖怪がそこそこの平和に暮らしている場所とも思っただけでいいわ。ちなみにその妖怪の筆頭が私。私と同種の妖怪っていないのよ。すごいでしょ？」

なんか自信満々にすごいこと言ってる。ホントすごいと思うけれど、そこで俺にどう返せと。とりあえずすごいと褒めてあげたらいいのかな。そしたら微笑が満面の笑みとなるのだろうか。もしそうだとしたらちよつと見てみたい。すごく綺麗だし、その笑顔を見たら惚れるかもしれん。

「というわけですごくいですね」

あーあれ、なんか間違えた。

「どういうわけかわからないけれど、すごいよね。それでは続いて私からの第二問。貴方にかかっている呪い。それ、いつからなのかしら」

む、呪いとな。呪い。何だっけ。なんか知ってる気がする。具体的に言うとな俺が死にかけるちよつと前に頭の中をちよつと過ぎたようなそんな気がする。うーん、そこまで出てるのに思い出せない。これは末期か。俺の脳味噌。

「えっと、呪いにかかけられているという自覚がないのですが……」

「あら、そうなの。じゃあ終了。というか、本来の目的を思い出したからだけれど」

「して、その目的とは」

「貴方にこの刀を渡すことよ」

と言っただけで差し出されたのは一振りの刀。それも見覚えのあるところじゃないもの。胃液がこみ上げてきそうなほどに気持ち悪い。正

真、もう二度と見たくもなかったのですがね！　ていうか何処から出した！

「……それ、どこから？」

「貴方の家の物置からに決まってるじゃない。こんな物を物置に入れておくなんて、酷いことをするのね」

ねー、とか刀に話しかけている。何やってんのこの人。あ、人じやなかった。もういい加減にしたほうがいいかなこれ。これからはこの妖怪とかにしたほうがいい予感。

「それじゃあ今から人を呼んでくるから、貴方はその刀に謝っておいたほうがいいわよ。その刀のおかげで貴方は今生きているのだから」

と言って姿を消した。落ちていったようだから、またあれを開いたのだろう。俺の適応力高いね。いえーい。

しかしまだ頭が痛い。

「けど身体はもう動きそうだな。よし」

起き上がる。頭痛は気にしない。していたらやってられん。そんなわけで刀を見る。うーん、禍々しさとかそういうのは感じられなけれど。言葉が分かったりするのだろうか。実はほったらかしている間に自我が宿ってどうたらっていう感じ？　そうならちよつと面白い。てなわけで謝ってみようか。

「その、物置なんか置きっぱなしにして悪かった。ごめん」

「気にしなくて良い。というか、呪いをかけたのは私なのでそういう仕打ちを受けるのは仕方のないことと受け止めているから」

どこかで聞いたことのある声が、刀から聞こえた。誰だったろう。何か忘れているとか有り得ないだろうってぐらいの相手な気がする。でも思い出せない。

「えっと、どこかでお会いしました？」

「そうね。数年前に幾度か。貴方に倒される直前にこの刀に憑いたのだけれど、気付かなかったみたいね」

ああ、分かった。昔倒したはずのラスボスだ。で、そいつが俺に

呪いをかけたのだ。内容は……まあ、忘れたけれど。

第一章 あ、死んでいませんよ？（後書き）

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。

第二章 刀と彼女と俺（前書き）

最近物忘れが激しいような気がする。あれかな、トラックに轢かれそうになったことで脳細胞がショック死してたりするのかな。

うーん、ありえないこともなさそうで怖い。

まだ普通に死んでれいがーんやってたほうが良かったかもしれない。

で、120%と闘う展開も悪くない。

まあ、すべからく嘘であるが（どこかの小説のパクリみたいになってしまった）。

第二章 刀と彼女と俺

つまり俺は、神宮寺三倉を殺し切れていなかった。そして彼女は、刀の中で回復を待っていた、というわけだ。しかもいつも俺を見ていたらしい。あれかな。呪いで死ぬのを待っていたとか、そんな感じだろう。俺が死ねばとりあえずの脅威は去るわけだし。

でも不思議なことが一つ。呪いをかけたのが彼女なのはまあ、分かる。で、その呪いが生きているのも、彼女がまだ消えていないという事実からも分かる。そこまでは良い。ただ、そうすると一つ問題があつて、八雲さんの言っていた、その刀のおかげで俺が生きているというのが良く分からない。

普通に考えれば、刀を俺が手にして戦った。そして勝てたのは俺自身の力ではなく、刀の力によるものだから、だから俺が今ここに生きているのは刀のおかげ。という感じに捉えるのだろうけれど、きつと違うんだろうなあ。

恐らくだけど、あの妖怪少女(?)が言っていたのは、刀そのものじゃなくて、その中にいた神宮寺三倉のことだろう。

だから、そう考えると不思議なのだ。呪いをかけた張本人のおかげで俺は今生きているとかどうということだよ。意味がわからん。

まあ、本人が目の前にいる(いるという表現でいいのかしらないけれど)から、直接聞けばいいんだよね。

ということだと思い立ったが吉日、れつつとらい。

「八雲さんは俺が助かったのは、たぶん、お前のおかげだと言っていたけれど、あれは何？」

「……私が、貴方にかけてあつた呪いのことを教えたから、かしら？」

ん？ それはつまりどういうことだ？ 彼女は俺に呪いをかけ、その呪いのことを八雲さんに伝えたから助かった？

「それっておかしいか？ 俺を殺す為にかけた呪いのことを他

人に告げたら助かるってどういうことだ？」

「まず、貴方を助けたのはあの八雲紫。だから貴方が助かったのは実は彼女のおかげなのだけれど」

なんとなくそんな気はしていたけれど、肝心の俺の呪いのことを教えた理由がわからない。と言おうと思ったけれどまだ話は続くようだ。こんなに饒舌な彼女初めて見たぜー。どうでもいいけど。

「それでは何故そのことを伝えたかわからないだろうから言うわ。その、恐らく私の気の迷いだと思うのだけれど、えーと……私が貴方を死なせたくないと思ってしまった。だから、彼女に貴方のことを教えたということでしょうかしら」

どうかしらってなんですかね。

何、この元ラスボスさんは。俺を死なせたくないとかどういう了見でそんな発言しているんだろうね。まっこと勝手すぎる。純粹に助かったとは思っけれど、やっぱりどう考えてもおかしいだろう。そのまま放っておけば、俺はトラックに轢かれて死んでいたはずなのだ。なのになわざわざ助けやがった。

馬鹿も休み休み言え、と言いたいね。言わないけれど。言いたくないから。

冷静になぜそんなふうに思うようになったか考えてみるほうが良い。そのほうが落ち着く。頭痛もまだ治まってないし、怒鳴る気力もないし。

まあ、色々理由は浮かぶのだけれど、とりあえず有り得ないっばいのから消していこう。消去法でいくぜ。

まず一つ。俺に惚れた。これは有り得ない。何せずっと物置に閉じ込めていたのだ。それなら俺を見ることもできないわけで、どうやって惚れるというのか。しかもお互い憎み合っていた敵同士なのだから、なおさらだ。

で、二つ目。呪いという方法以外で俺を殺したくなった。これはまあ、有り得ないでもない。恐らく彼女は刀の中で回復を待っている。刀自体が妖刀だから、その力を自分のものとすれば自然と以前

の力を取り戻すことが可能はずだしね。

最後に三つ目。俺が考えもしないすごい理由がある。これも捨てがたい。が、それをまず俺がまったく予想も出来ないので妄想するだけ無駄無駄無駄。浮かんだ理由の一つになってない気がする。

ということで消去法の結果二つ目を採用。まあ、違う可能性もあるけれど。というかまた本人に聞けばいいんだよね。

なのでまたまたレッツトライアゲイン。

「何故俺を死なせたくなくなったんでしょかねー」

ものすごくいい加減な聞き方になってしまった。おかしい。こんなはずでは……なかったと思いたいなあ。

「だから、気の迷い。私は別に、貴方のことをす」「ただいまー」
肝心なところを言い終える前に何か帰って来た。まあ、八雲さんとこの紫ちゃんしか有り得ないのだけれど。あ、なんか後ろに付いて来てる。

うーん、巫女さん？

なんか多くの人が想像してそうな巫女さんの衣装とは異なる気がするけれど、紅白の色合いとかがやっぱり巫女さんを想像させる。でもやっぱり腋^{わき}を見せているのは気になる。あと可愛い顔立ちなんだけど、仏頂面というのもなかなかあ。巫女さんって結構笑顔ふりまいてそんなイメージ。うん、これはあくまで俺の主観あるのです

が。
「へえ、もう起きたの。これならわざわざここに寝かせる必要なかったかもしれないわね」

特に表情を変えることなく、面倒臭そうに喋る巫女巫女少女。うーん、八雲さんに比べると若々しいというか、たぶん若いだろうなあ。八雲さんよりではなく、俺より。

「で、この人は？」

普通に質問。答えてくれるのは勿論八雲さんである。とても物知りっぽいだから便利である。

「この子は博麗^{はくれいれいむ}霊夢。この博麗神社で巫女をしているのだけれど、

客がないからむしろ妖怪退治屋が職業かしらね。どちらもお金貰えないのが悲しい現実」

む、妖怪退治。まさかのライバル現る？ いや、俺はとつくに廃業しているから、彼女一人に任せていいだろう。年下に任せるのもあれだけど、俺はもう主人公と言う年齢でもないしな。それでもこの物語の語り部を務めているのが理解不能である。この発言の意味が自分でもわからない。不思議だ。

「で、この子に貴方の呪いを解いて貰おうというわけ。感謝しなさい。私に」

「いや、普通に霊夢ちゃんにありがとう」

「別に礼はいいわよ。お金なら受け取るけれど。まあ、そっちのお金貰っても無駄だからやっぱいいわ。……それとちゃん付けはちよつと勘弁。癪に障るわ」

素っ気ないなあ。でも別に、とっつきにくいというほどではないからいいのかな。

「じゃあ、早速始めるから付いて来て」

「ああ、わかった」

まだ頭痛は治まらないが、そんなことを言って後回しにするのは良くない。あの轢かれそうになったのが呪いの所為なら、まだ気は抜けないのだから。

しかし、良く寝ている間も、そして起きてからも何事もなかったな。一応いろいろあって混乱気味ではあるけれど、命には別状ないみたいだしね。

てなわけでもっそりと立ち上がり、既にこちらに背を向けている霊夢に付いていく。そういえばいきなり名前を呼び捨てても特に問題はなかったみたいだ。これなら八雲さんも普通に紫とか呼んでも大丈夫？ うーん、でもなんか紫って呼び捨てするのは合わないさだよなあ。紫さん。うん、これならしっくりくる。次からはこう呼ぶか。きつとすんなり受け入れてくれそうだし。

あ、そういえばあいつを忘れていた。まあ、大丈夫だろう。今は

刀なわけだし、勝手に動くなんてことはないはずだ。

さーて、さつさと呪いを解いて貰って帰ろうかね。

え？ どこにつて？ もちろん元の世界に。さすがにもう妖怪だのなんだのって言うのは勘弁願いたい。どうせだから刀も置いていたらいいなあ、なんてね。

もちろん嘘ではない。

第二章 刀と彼女と俺（後書き）

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。

第三章 今日は何しませんが、あ、違う。(前書き)

呪いも解けてあとは帰るだけ。

そうだな。帰ったら何しよう。こちらに来てからそんなに時間経っていないけれど、そこそこ楽しかった気がする。

神宮寺三倉の変化が結構意外だったけれど、それも含めて見れて良かった。

よし、これで本当に主人公職解任だ！ と思っていた時期が俺にもありました。

第三章 今日は何しませんでした？ あ、違う。

呪いはすんなり解いて貰って、俺は元いた和室に連れ戻されていた。あ、でも外はいつの間にか茜色に染まっている。つまり俺は夜に轢かれそうになって気を失って、昼過ぎまでは寝てたんじゃないだろうか、と思う。

して、部屋に戻ると布団は畳まれて、紫さんの姿がなく、ただ部屋の真ん中にポツンと刀があるだけ。

「……おかえりなさい、でいいのかしら」

神宮寺三倉からそんな言葉を聞くとか、誰が想像したか。ホントびっくりですよ。

そういえば話の途中だった気がするけど、まあ、大したことでもない。今は聞かないでおこう。ほら、帰れるのなら別に言葉を交わす必要もないわけだし。

「まあ、いいんじゃないかな。部屋に帰ってきたわけだし」

呪いを解いてもらった上に、頭痛もいつの間にか治まって、元ラスポスさんとも普通に会話が成り立つ俺。

というよりも、彼女が現在刀の中にいるおかげで、特に危機感とかないわけで。どう考えても自由自在に動くことなど適わないようだし。

あ、これは聞いておこう。

「そういえば、もう以前の姿には戻れないわけ？」

「……戻れないとは言わないけれど、戻ったところでなんの得もないからいいかと思ってるわ」

つまり本当にもう敵意とかないのかな。

僅かでも殺意とか持っていたらこんな発言できないだろうし。もしこれが演技だったら賞あげても良い。しかも俺お手製のオリジナルの物を。うん、俺だったらいいらない。

しかしなあ。それならなおさらあの姿を晒して得すると思うのだ

けれど。あの美しく艶やかな黒髪に、整った顔立ち。幽霊なのに浴衣を着ていて、しかしそれがまったく違和感のないくらいに似合っていたのを思い出す。

正直言つて、かなり客觀的に見て美人だよなあ。当時は靈夢もびっくりな程に表情が酷かったけど。常に何かを憎んでいるような感じ。たまに自嘲するかなのような笑みを浮かべてはいたけれど、あれじゃあなあ。

「というわけだから俺と対峙していたときの姿に戻るなら戻ったほうがいいと思う」

またやってしまった。おかしい。同じ失敗を繰り返すほど俺は愚かだったのか。あれかな。闘いから離れている間にだいぶ劣化したかな。

「……戻ってどうなるというのかわからないのだけれど。私にどんな素晴らしい利益があるのか是非仰ってくれと助かるわ」

む、以前の口調に戻りつつある？ でも棘はそれほどないか。
「たとえば、そうだなあ。俺が優しく接してくれるとかいう特典はどうでございましょうか」

いらねえ、と即答されそう。彼女の口調からしてそんな言葉が出たらびつくりだけど、それぐらいに有り得ないようなことだしね。

「……それ、本当？」

「……………」 あ、時が止まっていたようだ。俺の体内時計的なものだけねど。

ちよつと待て。何この反応。素っ気なくあつさり返されると思つていたのに、発言がなんか期待に満ちている気がするぞ。恐らく人の姿を取っていたら顔を赤らめながら上目遣いでこう、わー可愛い、じゃねええええええ！

何だよ。ほんと何なんだよ。俺が知っている神宮寺三倉は、こんな奴だったか？　いくらなんでもキャラが違いすぎる。もっと冷酷で残酷で凶悪な奴だった気がする。

少なくとも、今みたいに少女チックで乙女な奴じゃない。

「たぶん、な」

なんとか声を振り絞って言った。

「なら、そうね。明日、貴方が目覚めるまでにはあの姿に戻ってみせるわ」

時間がかかるものだろうか？ まあ、その辺はどうでもいいや。どうせ俺は、本日中に元いた世界に帰るのだ。あとで霊夢に言わなくては。何故か先程は忘れていて言えなかったからねえ。

どうしてだろう。本日の俺物忘れ激し過ぎる。死に掛けた所為だろうかね。でも死に掛けたことなんて、今までに何回もあったのだからそれが原因とは考えにくいんだよなあ。たぶん、死に掛けた回数は一桁じゃ済まないだろうし。

特に今近くにいる元EXボスの幽霊さんには、かなり追いつめられたしなあ。というか、俺が勝てたのは一対一で闘えたからなんだよね。当時はまったくそれに疑問を覚えなかったけど、今考えるとかなり手を抜かれていたんじゃないかなあ。だって未だに妖怪たちは町を闊歩しているわけで、その数もかなりのものだ。そいつらも闘いに参加させていたら、俺には勝ち目などなかった。何より、最初からそれをしてくれば、彼女が出るまでもなかったはずだ。

うーむ。彼女はもしかしたら、まったく冷酷とか残酷とかそういう言葉とは縁遠いのもかもしれないね。何か理由があって、そのようなようにしなくてはならなかったというだけであってさ。

あ、だからと言って、近しい人たちを亡き者にされた怨みがなくなるわけではないよ。

当然だけど。

だからこそ、彼女が元に戻るまでに帰ろう。もし彼女があの姿に戻ったりすれば、俺は躊躇いなく刀を抜くだろう。今の彼女がどれだけ俺を慕おうとも、俺が彼女を良く思うことはないのだから。

本当なら今すぐにでも消し去りたいところではあるけれど、今更過ぎる気もする。だから、勝手な猶予を付けた。本当に余計なことだとは思っけれど。

しかしなあ。たぶん今の彼女は、俺に消されたとしても怨まないんだろなあ。分かりやす過ぎるんだよ。何故俺に好意を向けるのかは理解できないけれど、そういう感情を抱いているというのは分かりやす過ぎる。あからさま過ぎる。腹が立つほどに。自意識過剰とか言われそうだけれど、さすがに今までの流れからしたらね。こう考えるのが当然だと思うわけですよ、と。少し前に好きとかいう単語を発しかけた気がするし。しかもツンデレ風味に。

ええ、言っていましたよ。確かに俺は聞きました。それは忘れていません。都合の良い脳味噌だね！ 余計なところに皺が寄っているんじゃないかな！ 腹立たしい（何に対して言っているのか自分でもよくわからないけれど）。

「秋嗣いるかしら？」

おっといきなりお声がかかった。いつの間にやら部屋の外に誰かが立っていた。いや、霊夢以外に他ならないわけだけど。

「いるよー。というか襖開ふすまいている上に君の視界に俺は入っているよね」

「ああ、ごめんなさい。私の目は男を映さないのよ」

「嘘仰いなさんなお嬢さん」

とまあ、そんなやり取りがあつて霊夢が刀を持って現在賽銭箱前。ちらりと中を覗くと何も入ってなかった。これは中身を回収したばかりだと思いたい。思わないではいられない。でなければ可哀想だろう！

という俺の心情をニュータイプしたのか、霊夢は振り向き様に不機嫌そうな顔で口を開いた。

「悪かったわね。ここ一ヶ月ろくに賽銭なんてしていく客いないわよ。というか客がいらないわよ！」

「……それは、ご愁傷さまとでもいうべきか」

「なんの言葉も求めていないわ。それとついでのように言うておくけれど、貴方を当分帰すわけにはいかないみたい」

ついでに言うことですかそれ。衝撃的すぎて言葉も出ないね。嘘

だけ。

「ちよつと待て。ついでにそんなことを言われたこと自体が衝撃的なだけでも、まあここは取り乱すことなく聞こう。何故に？」

「私も良く分からないのだけれどね。紫が帰すなって五月蠅いのよ。ただ、貴方は暫く幻想郷で過ごす必要があるとだけ言っていたぐらいただけれど」

紫さんが、ですか。

「一応、住む場所としては、不本意ではあるけれど先程の部屋を使つていいわ。食事に関しても、不本意ではあるけれど偶には貴方の分も用意してあげる」

不本意な上に偶にですか。つまり基本的に食事は自分で作れと。

まあ、それ自体は良いけど食材とか勝手に使つていいのかな。それに関してはその時になつたら聞こうか。……じゃない！

「意味がわからん。そんな理由で帰せないとか納得できるものか、と言いたい」

「言つてるじゃない。結構ストレートに。とはいえ私も正直言つて、理解し難いのよね。まあ、紫の思考はいつも理解不能だけれど、今回はいつにも増して理解不能ね。ああ、でも一つだけ言えることがあるかも」

あるかもつて。まあ、聞くだけ聞こう。

「貴方の呪いを解くために一肌脱いでやったのだからお前も何か私のために働け、ということで何かしらやらされる羽目になるかもしれないわよ」

なるほど、とは思ふ。けれど、言うなら言うでさつさとしてくれれば良かったのに。俺わざわざ刀の中にいる幽霊さんに余計なこと言っちゃったよ！　　とかさせてしまふのだけれども、そんなことはどうでもいい。

「や、それでも一時的に帰りたいのですが無理なのでしょうか。ほら、お泊まりセット的な物を回収してきたいなあ、と」嘘なんだけれども。

「そう何度も内外を行き来させるのも面倒だから駄目。もつという
いと説明すれば納得してもらうことも可能でしょうけど、まず理
解してもらえるかも怪しいし、だからここは大人しく待ちなさい。
というか、嘘でしょうしね。……にしても遅いわね」でもって即バ
レた。

そういえばここで誰かと落ち合う予定らしい。誰かとはちゃんと
聞いていないが、人と人じゃないのが来るとか。つまり複数である
ことだけしか分かっていない。なんてこったい。

まあ、ここは辺りの風景でも見渡して待つかな。本当は帰れない
ことに憤^{いきどお}つて暴れまわってたぶん霊夢に押さえつけられて軟禁^{なんきん}され
て終了というのが望ましい、とは思わなければいけどまあ、俺が一番無
事に帰れる手段はこれなんだよなあ。これならきつと、まともに神
宮寺三倉とも会わないで済む気がするし。ただ、彼女から俺のここ
ろへ来たら逃げようがないわけで。うーん、若干ハイリスクローリ
ターンのような……。ただの気の所為で済ませたい。

と言ったところでこれから現状整理。というか、周りの地形とか
把握しておこうか。特に変わったところはなさそうだけどね。賽銭
箱の中身以外。まあ、死体とかが入っていないだけマシだよなあ。
神宮町の神社の賽銭箱には、数年前に女性のバラバラ死体が入って
いたけれど。まあ、俺の母親なんだけれど。

あー、これは記憶の奥底に沈めておこう。特にこれに刀の中の奴
が関わっていたという事実を。今にも叩き折ろうとしかねんからな
逆に俺の骨が折れる可能性も否めないが。特別鍛えてないと何があ
るかわかったもんじゃないぜ。あ、ちよつと落ち着いてきた。

しかし周りは森というか林というかそんなので遠くまで見えない
ね。まあ、この神社が高台にあるために、ここまで来るための（こ
こから帰るためにも使える超便利な）石段のところからはそこそこ
遠くまで見渡せる、けれどもやっぱりこつちも木が生い茂つちやつ
てる所為で見えません。というか今更だけど雪が積り過ぎです。実
は一面白一色だという事実は忘れてはいけない。え？ 誰もそんな

こと言つてなかったって？ いやー、普通分かるものじゃないかな。成人式があつた帰りに死に掛けてこちらに来たのだから、時間が異ならない限りは雪とか降つてても不思議じゃないわけだよ。

……はあ、どうでも良すぎて溜め息がだだ漏れだね。

「ん、来たみたいね」

まるで対象の人物特有の気を感じ取つたかのような物言いである。まさか妖怪退治屋と見せかけて実は天下一の武道会に出たりして、「オラわくわくしてきたゾ！」とか言いだすような人なのかな。でも人見知りで俺に対してはこういう態度だったり。

なんていうことは一切なくて、実際には彼女の視線の先に、まだ豆粒サイズの大きさにしか見えないけれど確実にこちらに向かつてきている人影がある。確実に俺の知っている人はいないなあ、となんとなく予想。や、幻想郷の知り合いなんて一人もいないので当然ですがね。さすがに以前神宮町にいた妖怪が幻想郷に出張して来ていてわざわざ俺に会いに来るなんてこともないでしょうしい。

と、考えていたら結構容姿とか見てとれるぐらいの距離まで近付いて来ていた。一人は箒に跨つて、その上白黒の如何にも魔女ですよーとも言いたげな服装の金髪少女。もう一人は……なんだろう。髪は結構短めで、背も小さめで、二本の刀を携えていて（俺とキアラが被つてる！）、そこまではまあ、良いとして、なんか横をふよふよ浮いているんだよなあ。何だろうあれ。霊魂れいこん的ものなの？ 何あれ。実は綿飴みたいなもので、幻想郷だとふよふよ浮いていつでも食べられる仕様なの？ やべえ、食べてみたい。すげえおいしそうに見えるよこの距離からだ。

「食べ物じゃありませんから！」

おお……。この距離で俺の思考を読み取つて言い返してくるとはやるな。あとで褒めて撫でてあげよう。ん、小さいからって子供扱いするとか言われそうだな。ということで今のはなかったことにしよう。

うーん、しかし何だろう。あの子はなんか普通とは違う感じがす

るなあ。いや、あの魔女っ子も霊夢も紫さんも普通には見えないけれど、あの刀娘はなんか、違っかたなむすめんだよなあ。刀が関係するのだろうか。人間とも妖怪とかとも判断が付けづらい。

「あの子は、半人半霊よ。人間と幽霊のハーフ。ちょっと珍しいけれど、面白いのはあの子半分幽霊なのにお化けが怖いらしいのよね」俺が刀娘を見ているのに気付いたのか、そんな聞いてもない情報を与えられた。というか何故分かる。もう結構近くまで来てはいるけれど、一応俺の視界には魔女っ子も入っているというのに。まあでも、俺の感じていた違和みたいなものはこれで解消されたかも知れない。

しかし、半人半霊かあ。面白いなそれは。若干幻想郷にも興味が沸いてきた。というかあの子といろいろ話がしてみたい。人と霊の間に出来た女の子。その立場にあるということがどういことなのかを知りたい。彼女のことが知りたい、なんてところまでは言わなければ。

てか今更かも知れないけれどあの子普通に飛んでいるんだよな。何、半分でも幽霊なら飛べるの？ 神宮寺三倉は……飛んでいなかった気がするなあ。飛ぶ必要がなかったとは思えないし、彼女は飛べないのだろう。

うーん、じゃあとりあえず舞空術でも覚えているのかな。気を自由に操れるのなら出来るはずだ。さて俺は何を言っているのだろうか。自分でも良く分からないな。

「ということでは到着したぜー！」

どういうわけだと突っ込みを入れて欲しいのかなあ、この魔女っ子は。まあ、でもそれは俺の役目じゃないだろう。でも部屋を出てからずっと無言の神宮寺三倉と、魔女っ子に対して面倒臭そうに肩を竦める霊夢が突っ込む可能性はないに等しいだろうし、うーむ、ここは同じく新登場の半人半霊ちゃんに期待。

「もう一度言いますが、これはお菓子じゃないですから！」
ふよふよ浮いている何かを指さしてまた俺に対して叫んでいるし。

駄目だこりゃあ。あれかな。この子は中々に空気の読めない子なのかな。まあ、そういうところは可愛らしいと思える俺は大人な気がする。うえーい嘘である。って、だからパクリになるから止めようか。

それにしても俺の調子もだいぶ戻ってきたな。まるで妖怪退治時代の再来である。じゃなくてただ普通に昨日までの調子に戻ってきただけだ。あの、あれ。妖怪とかとの戦いのこともある程度思い出として消化出来ていたときに。

でもやつぱり、明日には神宮寺三倉のあの姿をまた見ることになるわけだしなあ。ああそれ考えるとげろろんぱしそ。胃液とか。最悪内臓とか。や、内臓は有り得ないけど。

「ああ、分かった分かった。それよりお名前は？ お譲ちゃん。ちなみに俺は宇條桐嗣」

おっとこれは大人というよりも若干怪しい人になっている気がするぞ。次はちゃんとしてよう。次があつたらただけど。

「え、ああ、すいません。私の名前は魂魄妖夢^{こんぱくようめ}。能力は剣術を扱う程度の能力。半人半霊ですが、普段は冥界の白玉楼^{はくぎょくらう}で庭師兼西行寺^{さいぎょうじ}幽々子様の警護をしています。以後お見知りおきを」

懇切丁寧^{こんせつていねい}に自己紹介された。なんか感激である。白玉楼とか西行寺なんちゃらっていうのは意味不明だけど。冥界というところにあるとかなんとかなんのこっちゃ。

「次は私だな！ 私は霧雨魔理沙^{きりさめ まりさ}。魔法使いだが、人間だぜ。能力は魔法を使う程度の能力。パワーには自信があるぜ。試してみるか？」

「遠慮させていただきます」

聞いてもいないのに自己紹介な魔理沙ちゃん。喋り方が若干あれだけれど、まあ許容範囲。というか、帽子の所為で分からなかったけど、妖夢ちゃんと背あまり変わらないのね。

「自己紹介も終わったみたいだし早速始めましょうか」
わー、何を始めるんでしょう霊夢先生。

「そうだな」「そうですね」

二人も息ぴつたりに応えて分かっているみたいだし、もしかして分かってないの俺だけか。なんだよもう。俺だけのけものとか酷いじゃないかよお。

むう、聞くか。

「えっと、何を始めるのでございましょうか」

「ん、そういえば言っていなかったわね。これから貴方と私たちが弾幕ごっこをするのよ。まあ、ある程度の手加減はして上げるわ」

もういきなりそういう展開止めてくれって。というか何だよ弾幕ごっこって。ごっこがついてはいるけれど、結構物騒な単語だよなあ。弾幕だろ？

「とは言っても分からないだろうから、まずは私とやろっぜ。とりあえずは私の弾幕を避けさえすればいいから」

勝手に話を進めるな魔理沙！ もうお前は最初から呼び捨て確定だ！ いや、既にもうちゃん付けで呼んでいるけれど。心の中で。

しかしなあ。まさかこんな歳になってまでバトル展開ですか。いつになったら終わることが出来るのか。

はあ、溜め息が止まらん。

本当主人公辞めさせてマジで。

え？ 次は俺の出番なし？ やったね。騙り役譲渡だぜ。

しかし相手は誰だろうね。知らない人、ということはないだろうけれどー。

第三章 今日は帰しません？ あ、違う。(後書き)

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。

第四章 シリアス展開はもういやですわ（前書き）

ほほほ。ほほほほほ。

うーん、私にはこの笑い方は似合わないわね。まだにへらーとかしてたほうがよさそう。

にへらー。

うふふ、結構楽しいわこれ。

にへらー。

第四章 シリアス展開はもういやですわ

えー、どうも。主人公である宇條桐嗣があまりにもやる気無いよ
うなので、一時的に選交代してお送りいたしますとくほうおうとうき東方桜桐記。

今回の語りは私八雲紫が、誠心誠意真心心血注いで頑張りますわ。
すわっすわ。うーん、駄目ね。これだとまたパクリがどうたらと言
われてしまっわ。さすがに運営側を敵に回すようなことは私も嫌な
のよ。だからここからは一切ネタに走らないわ。本当よ。もし結果
的に嘘になるようだったらこれ以降私の出番無しで良いわ。……ま
あ、皆がこの約束を忘れたところにまた出てくれば良いわけだし（ボ
ソッと呟いているのよ）。

しかし今までのどこにシリアス展開があったというのかしら。私
からしたらどうでもいい話ばかりだった気がするけれど。きっと彼
の中ではシリアスってたのね。そういうことにしておきましょう。
もしかしたら他にもシリアスだろうっていう人いるかもしれないし
ね。うふふ、私ったら寛大だわ。きつとこれを見た人は誰もが私に
惚れてしまうのよ。きゃー興奮しちゃうー。きゃっきゃ。きゅーき
ゅー。あれ、なんかおかしくなってきたわ。似合わないことをやる
のは止めましょうねー。

さて、と。そろそろ話進めないと誰かに叱られかねないわ。ちゃ
んと仕事しましょう。語り役として。ええ、騙りではありませんわ。
私、嘘は嫌いですもの。ほほほ。……そうよどうせ嘘つきまくりよ。
悪かったわね。どうもすみませんでした！

ホントにもう失礼しちゃうわねー。この私のお茶目が理解出来な
いのかしら。

ああ、閑話休題。略して「かんきゅー」よ。どうでもよすぎるわ。
そうね。まず何から話しましょうか。

世界百億人のゆかりんファンのおんなー、何か質問ないかなー！
うーん、そんなにいるわけがないわね。精々十億がやっとでしょ

う。余計なツツコミは所望してないのでスルーしてね。

しかし難しいわね。私が語るのはまだ先のはずだったのに、なん
でこうなったのかしら。あとで桐嗣に問い質す必要がありそうね。

あー、脱線しすぎ。止めましょう脱線とか。大事故になったら大
変よ。というわけでまたもや閑話休題。略して「かんだい」なんか
でもよさそうね。まるで私のよう。

……反論は認めないわ。というか許さない。

さて、これから我が家での日常をお送りするわ。偶に桐嗣のこと
に触れながら、基本は私と私の式である八雲藍らんがメインのお話、に
なる予定よ。

それでは始まり始まりー。ほら、拍手しなさいな。パチパチーっ
て。

「あの、紫さま？ 何をしているのですか？」

一人で虚しく拍手をしているところに襖を開け放ち部屋に入っ
てきたのは、先程言った八雲藍よ。九本のもふもふした尻尾が特徴の
九尾きゅうびの狐が正体だけれど、今はそれ相応の迫力とかないのよねえ。
寧ろかなり可愛いわ。そして尻尾が気持ちいい。

ああ、近寄って来た藍の尻尾に手が伸びるー。

もふもふもふもふもふもーふ、きゃー！ー！！ もふもふさい
っこー！ー！！

……けふんけふん。ふう。私もまだまだ若いわね。

「うー、紫さまー。最近いつものようにそれやっていますけど、そ
ろそろ止めてもらえませんか？」

ふら付きながらも運んできたお茶をテーブルの上に置く藍。動き
が若干緩慢かんまんねえ。まあ、私の所為だけれど。

「あら、私に逆らうというのかしら」

ふふふ、悪役っぽいわねこれ。

「いえ、そういうことではなくて、少なからずそういうのってスト
レスになってしまい、あまりにも続くようだと毛が抜け落ちてしま
う恐れがあるのですよ」

「え、それ、ホント？」

「うーん、どうなのでしょう。私も本で見ただけなので詳しいことは分かりませんが、普通の動物などではそういう結構多いらしいし、妖怪の中にも、あまりの可愛さに人間に可愛がられすぎて、でも本人にはそれがとてもストレスで毛がすべて抜け落ちてしまった、というのもあるみたいです」

それはまずいわね。というか藍、貴女そんな本読んでいたなんて、もしかして結構前からこれストレスに感じていたのではないかしら？

「じゃあ、そうね。週に一回くらいなら大丈夫かしら？」

「そうですね。それくらいだったら問題ないかもしれません。もしそれでも駄目だったらまた言います」

「ええ、そうしてちょうだい」

ちよつと可哀想に思えてきたわ。主に私の所為なのだから猛省。

でも週に一度しかもふもふ出来ないとは、今度は私のストレスが溜まりそう。これは橙ちえんにも頑張ってもらうしかないのかしら。あ、橙というのは、私の式である藍の式のことよ。つまり、式神しきがみの式神ね。しかしそうすると、今度は橙の抜け毛を気にしなくてはならなくなるのよねえ。さすがにそうなるのは御免被りたいわ。

となるとやはり、何かしらペットが必要かしら。ぬいぐるみとかでもいいけれど、私に合うものがあるかどうかよ。私のような大人の女に可愛らしいものが合うとは思えないもの。

うーむ。それでは最終奥義として桐嗣をペットにしましょうかねえ。ここで住めって言えばたぶん拒否されない気がするわ。正確にはさせないのだけれど。

恐らく彼の町の実態を知れば、帰る気も失せるでしょうね。

とりあえずこれを教えるのは明日ね。今日はもう疲れちゃったし。今日というか昨日だけれど。彼を幻想郷に連れて来たり、三倉をまともに話せるようにしたり、本当に疲れたわ。

ああ、そうだ。三倉が実は刀の中では喋ることも出来なかったことを知ったら、彼は驚くかしら。この驚き具合に期待ね。恐らくそ

のときには三倉も元の姿に戻れているでしょうし、色々と楽しみだわ。

それにしても、今更なのだけど何故今回私が語っているのかしら。別に主人公がどてっばらに風穴かざあなを開けられたりしてないわよ。しかも私は主人公のドッペルさんでもないわ。それなのに語りを任せられたのが理解出来ないのよ。

一応ここまででは、私にスポットライトを当てたがっている作者が、急遽私のために出番を与えてくれたと考えていたのだけれど、正直小説としてこれはどうかと思うのよ。自分でもちよつと何言っているのかよくわからないけれど、とにかくおかしいわよこれは。何者かの陰謀かと考えてしまっわ。わんわん。

もしかしたらこの私の語りが終わったら、始まるはずだった戦闘がすでに終わっているという展開が待ち受けているとか、そういうのがあるそうね。そんなことはないことを祈りたいけれど、あ、お茶飲みましょう。折角藍が持って来てくれたのだから。ずずずーと。

「いつもながら美味しいわねえ」

「ありがとうございます」

藍もお茶を飲んで和んでいる様子。このちよつとだらけたところを見るのも私の楽しみの一つよ。何故か堅いイメージがついていそうだけれど、実はそんなことはなく、中々に可愛らしいの。本当にもう抱き付きたいくらいに。

あ、でも駄目よ。これ以上ストレス与えると禿げるわ。尻尾が。そうなったらもう藍は藍でなくなってしまう気がするので抱き付き禁止。週に一回もふもふタイムを満喫するだけに止めるとどのよ。

……脱線しすぎにもほどがあらあね。というかなんの話だったかしら。

ああ、そうね。戦闘がどうたらという。え？　ちよつと違う？　まあいいじゃない。似たようなものよ。

きつと今頃、誰かが闘っているわ。誰がとまでは明言しないけれ

ど。

でもあれよねえ。もし桐嗣が以前の感覚を取り戻してもしたら、恐らくそこの相手じゃ話にならないでしょうね。低く見積もっても、四面ボスくらいの実力がないと。あら、何を言っているのかしら私。四面ボスってなんの四面よ。

うーむ、おかしいな電波を受信してみたらこんな発言してしまうとはね。ゆかりん失敗失敗。てへっ。

ふう。

そろそろ語り役返上していいかしら。

もう飽きてきたのよこれ。それに眠いし。お願いだから寝かして！。

え？ もう良い？ 尺は十分取れた？ 何よ。結局文字数稼ぎに使わされただけじゃない。腹立たしいわね。まあいいわ。丁度いい暇つぶし程度にはなったから。

それじゃあまた明日。

おやすみなさい。

……じゃなかった。まだやることがあったのよ。まあ、その辺はまた今度教えるわ。

第四章 シリアス展開はもういやですわ（後書き）

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。

第五章 魔法と刀と何かと（前書き）

ただいま！。

皆の主人公宇條桐嗣だよ！。

いやー、誰も待ち望んでいないというのが一番望ましいんだけどねー。そういうわけにもいかないのが現実である。

しかもバトルだろ？ もう勘弁してくれっての。

第五章 魔法と刀と何かと

はい、現場の宇條です。現在目の前に星型のキラキラしたものが広がっていて、それが俺に向かって結構な速度で迫ってきております。魔理沙が言うにはこれが弾幕というものだそうです。

最初にもっと密度の薄いのが来ていたのだけれど、途中でなんかカードのようなものを出して、スターダストなんちゃらとか言っていた気がする。とにかくそれで出てきたのが、今目の前に来ているものだ。さて、これをどう避けようか。まだ昔のように動ける気がしないのだよね。さーてどうしようか。

「おいおい、そのまま立ち止まっけていても避けられないぞー」

うつせ。わかってるわい。でもどう避けたいのかわからないんだよ！ 避けるための道筋はなんとなく見えているのですがねえ。身体が動かねえんだよ！

なんかちらつと横見ると妖夢も霊夢もこっちに背を向けて何かひそひそ話しているしさあ！ なんなんだだよもう！

「まあ、悩んでもしょうがないか。動けるようにするために動きましょうねー、と」

左斜め前方に向かって走る。走る。走る走る。これを切り抜けるにはこの角度で走りながら行こうか。

迫り来る星の群れ。正直怖いね。見た目はそれほどでもないけれど、あの魔理沙の性格からしてこれが低威力とは思えない。当たったらそれなりのダメージがあることを想定しておかないとなあ。

「へえ、飛べない割には結構動けるんだな！」

いやあ、それほどでも。とか言っただろうがいいのか？ 俺はこれでかなり必死なんで返答出来ませんがね！ マジもう誰か助けてくれ！

なんて言っている間に抜けているんですがね。

しかしもうまた新たなカードを用意している魔理沙。いい加減に

してくれたまえ。俺はいつ反撃すればいいんだよ！

「お前も弾幕使って反撃してくれば良いのに」

とか宣^{のたま}っている魔法使い。ふざけるな、と言いたい。無理ですよ。もし弾幕使えるならとづくに使っている。というかどうやったら出せるんだよあれ。

「自分の弾幕をイメージして、そうですね、あとは手を前に出すとかすると結構やりやすいんじゃないでしょうか」

おう、なんかアドバイスしてくれる妖夢。マジ良い子だ。俺の子大好き。

「おい、何味方してるんだよ！ このあとお前が闘うんだぜ！」

え？ 何、魔理沙で終わりじゃない？ いやまあ、二人来ているのに闘うのは一人とか意味わからん、とか思っていたけれど本当にそういう展開かよ。おい。

「まあ、いいや。……恋符「マスタースパーク」！」

何やら手に何かを持って、それをこちらに向けて翳してくる。そしてその手をもう片方の手で支えるようにして、何か光の粒子みたいなのが集束していき、って冷静に分析している場合じゃない！ しかもこれじゃあ今から弾幕とやらを出そうにも間に合いそうもねえし！

「さあこれでお終いだぜ！」

ドでかい光線が、飛んでくる。エメリウム光線のような程度のものならちよいと避けすればいいんだろうけれども、これはちよつと規模がなあ。余裕で人一人飲み込めるくらい大きな光線みたいなもの。ちよつとこれどうやって避けるって言うんだよ！ だああああああああああああ！ 全速力で走ってやるう！

霊夢たちのほうに向かつて走る。駆ける。しかしあれだ。こちらを見ているのは妖夢だけ。ってあれ？ いつの間に。しかも刀を、俺の使っていた刀を持っている。そして刀のある右手を振り上げて、え？ 投げた？ 俺に向かつて？ それはつまり、そういうことだよなあ。

「なんだ、そんな刀使ったところで私に勝てると思ってるのか!？」
いや、思っていないです。ただ、例えば負けもしないけどね。こ
んな土壇場で吐き気なんて催している場合でもないし、あのときの
感覚を思い出すには使うしかないだろうし。ただ、中にあいつが入
っているというのが気になるな。

「安心しなさい。もうこの中に彼女はいないわ」

霊夢はこちらを向きながら言ってくる。それは、僥倖きやうじやうと思うべきか。いやあ、しかしあれだね。俺にあのマスタースパークとかいうのが届くまでに色々考えすぎだろ。もう刀を取っても、鞘から抜けるかどうか不安だぞこら。

「とにかくやるだけやるけどな！」

左手を上げ、こちらに飛んで来た刀の鞘を掴み、そして右手で柄を握る。その時点でもう一メートルもないところまで攻撃は届いている。

[illegible]

えー、結果間に合いました。そして負ける気もないとか言っておきながら負けましたよ。

刀の力は相手の攻撃を吸収するもの。しかし一定量を超えると、所持者にダメージとして還ってくる。詰まる話、パンクしたわけだ。まあ、それで刀が壊れるなんてベタな展開はないわけで。寧ろキヤパシティは増加するので、次はマスタースパーク程度ならなんとか凌げるはずである。

まあ、そんなわけで俺は大ダメージを受け、身動きが取れなくなり、そこに問答無用で魔理沙がもう一発マスタースパークをぶっ放して来てくれたおかげで俺はノックアウト。手加減という言葉を知らんのかねあの子は。まあ、思ったほど痛くないから良いけどね。でも立てる気がしない。これではこのあとの妖夢戦なんて出来るはずもないのである。

どうするんだろ。仙豆^{せんず}か、それに準ずるものとかあるのかな。
なら大丈夫だけど。というか俺普通に闘おうとしてるんだろうね
！ まあいいや。どうせ帰れないんだ。帰れないなら帰れないなりに、真剣に色々やってみようじゃないか。はっはっは。人これを、
自暴自棄と言う。はい。

「お疲れ様です」

地面に背中を預けている俺を、上から見下ろして来るのは妖夢。
うーん、良い子だ。ほら、タオルなんか持って来てくれているし。

「ん、ありがとう」

差し出されたタオルを受け取り、そのまま顔の上に被せてみる。

「死んだ人みたいですよ？」

「うむ、それを目指してみたのだ」

「死にたいんですか？」

「うーん、死にたくないわけではないけれど、死にたいわけでもない、と言った感じ。中途半端最高」

「ふふ、面白いですね」

いえいえ、君のほうが可愛いよ、とか言ってみたい。いやあ、噛み合っていないぞ俺の思考と彼女の発言。最後だけ。

「それはそうと、私とはどうします？ 一応こちらはいつでも大丈夫ですけど」

「……俺も大丈夫、と言いたところだけどね。刀がもう一つの力を発揮できていないようだし、どうしたものかな」

タオルを退けて、身体を起こす。正直地面は雪だらけで冷たいんだよ。こんな季節じゃなければいつまでも倒れていたいけどね。まあ、おかげで身体についてに頭も冷えて、たぶん今までで一番まともに思考出来る気がする。とにかく調子は良くなった。これでどこにも痛みとかなければ最高なんだけどね。呪いを解いて貰う前までの頭痛然り、俺には痛みが付き纏うねえ。

それと刀だ。やっぱり怨みなどの負の感情を力にする刀だけあって、吸収する能力しか発揮できていない。これが厄介なのだ。今

の俺は、そこまで負の感情に支配されていない。少なくとも、神宮寺三倉の姿を視認しない限りはなあ。まあ、それに相当する出来事でも起これば話は別だろうけれど、この知り合いもない幻想郷じや無理がある。

あー、沈んでいく夕陽が眩しいぜ。……おつと現実逃避しそうになつてしまった。でもこの現実を受け入れ難いよなあ。

今更だけれど、妖怪と人間がある程度平和に暮らせている世界。正確には俺のいた世界と幻想郷も、同じ世界に存在しているとは思えない。あ、この情報は霊夢が呪いを解いてくれたあとに教えてくれたのだ！

ちよつとだけ感謝である。あとでもつと感謝しておこう。というのは置いて、やっぱり気になるんだよなあ。

さすがに妖怪が人を襲わないなんてことはないのだろう。紫さんのいう平和は、あくまで“ある程度”のものだし、もし人を襲う妖怪がいらないなら、霊夢のような存在は必要とされないわけだ。でも、険悪な雰囲気つてのはないんだよなあ。霊夢と紫。二人は結構打ち解けている、というかどこか友達に近い感じがするのだ。まあ、俺の勘違いかもしれないけれど、でも、俺と神宮寺三倉の関係よりはずっと良いものに見える。

それに、妖夢。彼女は人間と幽霊の子。さつきからずっと考えていることである。見た感じ、人間には普通に接しているようだ。あとは彼女の主、西行寺幽々子。これだな。彼女にも会って、話を聞きたい。

おお、やりたいことがたくさんあるぞ。意外にも。

「なあ妖夢」

「はい、なんでしょう」

俺の隣に屈んで首を傾げているのを見ても和む。ああ、この子何やっても可愛いね。誘拐しちゃいたい。嘘だけど。

「その、だな。君が言っていた白玉楼、だっけか？　そこに連れて行って欲しい。で、そこで君の主に会ったり、君と弾幕ごっこ？」

をしたいと思っっているんだけど、どうかな。あ、あと暫くそこに泊めさせてもらえると助かる」

「……え、え？」

妖夢、明らかに挙動不審になっている。何だ、そんなに俺の発言は予想外か。おかしいか。なら笑え。はははははは。

わあ、しかも横見ると霊夢と魔理沙まで俺を蔑むさげすような目で見てらっしやる。ちょっと誰かなんか言え。そしてこの空気をぶち壊してくれ。そんな俺の願いが届いたのか知らんが、とにかく何か言葉を発しようとしているのは、まさかの魔理沙。

「まさか、出会って間もないというのにいきなり口説くなんてな。さすが外の男は違うぜ」

え？ いや、意味がわからん。何、こつちの世界では弾幕ごっこしたいというのが、「ねえ、その姉ちゃん一緒にお茶しない？」と言つのと同等だというのか？ そんな馬鹿な。ああ、いやわかっていますよ？ 恐らく三人が反応したのは、泊めさせてもらいたいという発言にだろうということくらい。

でもまさかこんなことになるとはね。お兄さん吃驚びっくりだよ。あ、とりあえず弁解しないと。こういうときって何もしないとんでもないことになるっていうのがお決まりだしね。

「いや、違うから。ただ気になることがあったりして、妖夢と、あと西行寺幽々子だっけ？ その人と話したいことがたくさんあるから、出来ればそっちのほうで泊めてもらえると嬉しいというだけであつて、特に疾やましいことはなにもないぞ」

「え？ さっきと言ってること変わってない気がするんだが」

「あ？ ああ、マジか。そんなはずはないと言いたいけれど、駄目だ。俺もそう思う」

「だろ？ どんなに捻ひねったって、まだ会ったこともない幽々子に興味津々の変態っぽいやつ、という風な認識しか出来ないぞ」

その通りである。いや、西行寺さんに興味があるのはホント事実だけれど、でもなあ。なんか違うんだよ。表現が難しいけれどさ。

俺の興味は、魔理沙が言っているようなものとは違うはず、である。
「まあ、どっちにしたって幽々子への興味は、会えば自然と湧くだろうけどな。背もそこそこ高いし、胸もあるし、下心のある男どもなら普通群がるはずだ」

へえ、そんな良いことを聞いた。でもまあ、そういう対象にはならないよ、俺は。

「ん、安心しろ。俺は下心などない」

「いや、それはそれでおかしいから」

おお、霊夢に突っ込まれた。でもまあ、実際下心はないのだよ。そういうのはもう興味もないようなものだしね。霊夢たちのことは可愛いと思うし、その中でも妖夢はかなり好きな部類であるけれど、それでもだ。まあ、その辺はおいおい話すとして、今は白玉楼に行けるかどうかだ。

「そんなわけで妖夢、どうなんだい？」

「えっと、どうでしょう。幽々子様に聞いてみないとその辺は分からないので、暫く待っていて貰えますか？」

うーん、どうしよう。待っていると、さっき俺がここで待っていた時間の倍以上は確実にかかる。それなら俺も付いて行ってしまったほうが良い気がするんだよなあ。でも俺は妖夢のように飛べないので明らかに時間がかかる。

そのことを伝えると、最初に答えたのは魔理沙だった。

「それならば私が一緒に行つてやるぜ。私は箒で飛んでるわけだし、後ろに乗れば行けるだろ？」

「頼んでいいのか？」

「おう、任せろ。というかもう私の役目も終わったから、この後の暇をどう潰そうかと考えていたところだから丁度いいぜ」

「そう言ってもらえると助かる。じゃあ、頼むよ」

こんな感じで俺の白玉楼行きが決定したのだ。殆んど霊夢の介入はなかったけれど、反対していないわけだし良いんだよな。泊めてくれるとか言っていたけれど、それに関しては後で謝っておこう。

と思っっていたら誰かが俺の肩をポンポンと叩いてきた。振り向くと、そこにはかなり不機嫌顔の霊夢。何、俺なんかした？

「桐嗣、あんたはあの幽霊のこと忘れてない？」

あの幽霊？ ああ、神宮寺三倉か。

「えっと、あれはこっちで預かっていて貰うというのはいけないのか？」

「駄目とは言わないけれど、お勧めしないわ。というか、ここに置いて行っても、あとで紫が送り込むわよ」

「うわー、それは勘弁願いたい。しかしそれだと面倒だぞ。刀から出たということは元の姿に戻っているんだろーし、俺はその姿を見たくないのだ。」

「でも、どうやって連れていくんだ？ 箒はどう考えても二人までしか乗れないだろう」

「え？ 何を言っているのよ。彼女はここにいるのだから、特に問題はないでしょう」

そう言って右手を掲げて、あるものを俺に見せてきた。丸い、球体。何だろうこれ。勾玉模様みたいなのが組み合わさったやつ。

「これは陰陽玉おんみょうたまの模造品。これの中に入れてもらっているから、持ち運びは苦労しないはずよ。あ、ちなみに今彼女は眠っているはずだから、丁寧に扱うように」

そして俺の右手には刀が、左手には陰陽玉が収まった。いや、両手塞がっているとかどう考えても移動のとき不便だろ。まあ、刀は紐ひもで括くくって背負えばいいのだろうけどね。陰陽玉は、そうだな。胸ポケットにでも入れとくか。あー、成人式の帰りでスーツ姿って言うのが痛いね。これであれだけ動いていた俺もすごいけど。うむ、自画自賛である。

「おう、わかった。えーと、世話になったな。まだ会って間もないけれど、中々濃い一日になったのは、君のおかげだと思うので多謝だ。また会えるときを楽しみにしている」

手を差し出す。霊夢も、面倒臭そうに応えてくれる。

こういう感覚は良いものだね。

あー、あと、何故かまたすぐに会うような気もする。というか、会えるだろう。俺が帰るために、再びここへ戻ってくるまでに。

「じゃあ、行くか。ああ、それとどうせあの幽々子のことだから、泊らせてくれるだろうし、連れて行ったら私はすぐ帰るからな！」

うわー、何その発言。軽くフラグ臭いぞ。まあ大丈夫だろうけど。俺も結構樂觀視しているのだ。

それではいざ行かん、とか言ってみたりしてー。

第五章 魔法と刀と何かと（後書き）

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。

第六章 白玉楼に死す（前書き）

ああ、今度こそ死ぬのか俺。

さすがに二度目の奇跡は起こるまい。

というか、呪い解いたはずなのになんで死ぬんでしょうかね？
さっぱり意味不明だよ。

まあいいけどね。

なんとかなるさ。死んだら死んだだこの野郎。

第六章 白玉楼に死す

「白玉楼に着くまでに死ぬ」

ただいま絶好調空の旅をお送りしております。いやあ、なんか魔理沙が全速力でかつ飛ばすぜ！ とか宣いやがりましてですね、いきなり速度を上げるものだから彼女の腰にしがみ付いてしまったわけですよ。そうしたら彼女、俺をぶん殴って引き剥し、そして今、箒にしがみ付いているという状況にあるわけです。足も絡ませてこっ、ぎゅっと。

そりやあ女の子にいきなり抱き付いたわけだから、殴られるのはまあわからないでもないけれど、悪いのは急加速した魔理沙のほうだと俺は言い張るぞ。誰が何と言おうとも俺は悪くない。俺は、やっていない！ やってないんだー！ いや、やるかやってないだと言っていいことになるんだろうね。ふう。

しかしこの空の旅、いつまで続くんだろう。正直空気に圧迫されて目も開けていられないんだけど。魔理沙は何故大丈夫なんだろう。魔法か何かかな。もしそうなら俺にもかけてくれ。

くそお、幻想郷の風景を楽しもうという俺の魂胆が、まんまと打ち砕かれてしまったではないか。いや、どうせ殆んど雪に覆われて大したものは見えないのだろうけどね。でもやつぱり観たいものは観たい。次篇に乗せてもらうときにはその旨を伝えたほうが良さそうだな。あー、でももう乗りたくねえ。降りたらげろりんぱしたい。そういえば、まだ何も食ってないから、吐けるものって言ったら胃液しかないんだよね。

え？ 前からずっと胃液吐くって言ってた？ そうだったかな。

全然覚えとらん。悪いか！

うーむ、これを逆ギレというのだったかな。よし、一つ学習した
ぞ。はっはっは、二十歳になってもまだ成長しまくるこの俺、さす

がである。大学にも通ってないというのにね！ 自画自賛ですよ！
ちなみに俺は自分が心底嫌いですがね。

それにしたってまだですか白玉楼は。なんか地味にこの飛行にも慣れて来てしまってるんだけど。ははは、適応力の高さは一流品ですよ。嘘であるが。

早くうー。早くうー。

「そろそろ着くぜ」

だそうだ。俺の祈りが通じたんだな！ スピードも落ちて、目も開けられるようになってきたし。うーん、これはかなり後方に置いてきぼり喰らってる妖夢を待つためでもあるのかな。でもこれ、まだ妖夢の全力より早い気がするなあ。気のせいかな。

「というか、もう着いてるけどな」

え？ あ、え？ ちょっと待て。前方を見た瞬間俺は啞然としたぞ。というか、これを初めて見たやつは、誰であろうと驚くと思う。

「ええっと、これすべてが白玉楼？」

「ああ、二百由旬ゆじゅんくらいの広さはあるらしいぜ」

由旬？ ああ、どこかで聞いたことある。たしか、一由旬で七キロメートルはあった気がするなあ。っておい。二百？ つまり、だ。千四百キロメートルはあるということか？ おいおい、冗談もほどにしてくれ。冥界の殆どほとんはこの白玉楼で埋め尽くされているんじゃないのか？ それとも冥界と言うのは無限に広がる大宇宙状態なのか？ いや、さすがにそれはないだろう。というかないと願いたい。だってほら、厄介事に巻き込まれたとき、逃げるのも大変じゃない？ まあ、千四百とかふざけた数字の時点で逃げれる気もしいけどな。寧ろ迷って餓死ですよ。はっはっは。

「しかしいつにも増して静かななあ」

「普段は素晴らしいおもてなしが待っていたりするのか？」

「まあ、素晴らしいかどうかはおいといて、とりあえずおもてなしはあるはずなんだがな。ここには数え切れないほどの幽霊が働いていて、その内の幾つかは侵入者を迎撃するために動くはずなんだ。

幽々子のところまでもう少しだし、ここまで来て迎撃態勢を取らないというのが不思議でしようがない」

あ、やっぱり侵入者扱いなのね。だってほら、門とか通ったところを見てないし。普通通るときって、止まって挨拶するなりなんなりとかあるんじゃない？ 特にこういうところだと、門番とかいそうだ。

「俺たちが来ることが事前に伝わっていた、というのはどうだ？」

「なし、とは言わないが、普段幽々子は私や霊夢なら問答無用で迎撃しようと試みるから、なんとも言えないのが実状だぜ。まあ、全然私たちを墜おとすつもりはないみたいだけだな」

墜とすですってよ奥さん。どこかの戦闘機乗りかっつての。まあでも、魔理沙が言うように様になってるので口に出せない。く、口惜くちあしや！

「まあいいや。つまらないけれど、やることはやるぜ」

「おう、頼む」

しかし今の態勢だと、色々と儘ままならないなあ。どうにかならないだろうかね。たぶんならなくもないのだろうけれど、危ないしねえ。屋根ぎりぎりの高さを飛んでいるとは言え、これはなあ。落ちたら危険なのですよ。骨折ぐらいはしかねん。

うーん、どうしようかねー。ここは無難に諦めますか。どうせもうすぐ到着なのだから、今の姿勢を維持していればいいさ。ほら、このあまりにも酷い状態を知っているのは魔理沙だけなわけだしさ。だから着いたら即算から降りてしまえば、恐らく問題ないはずである。というか、西行寺さんに初対面でこんなあられもない姿を見せたくない。

これから暫しばくお世話になる人に、こんな姿を見られたら俺もうお嫁さんに行けないわ！ ええ、最初から行けませんかね。正確にはお嬢さんに行けないというのが正しいのだろうけれど、まあ、婿に迎えてもらうような相手もないわけだし、別に行けなくても問題はないかとー。別に生涯独身だろうと困らないしー。

ていうかそんな話はどうでもいいのだ。閑話休題なのだ！。閑古^{かんこ}鳥^{どり}が鳴いているのだ！。どんな鳴き声かは知らないのだ。でもどういいう鳥かは知っているのだ。

ふう。どうでもいいとかいう次元を遥かに超越し始めているぜ。俺もそろそろ限界突破とかし始めたかな。ありとあらゆる限界を超え、今新たなヒーローが！ 生まれませんけどね。何だこの話。自分で言っておいてさっぱりわからないぞ。

「おーいゆーゆー！」

おい、叫ぶな。そして手を振るな。俺のこの痴態が見られてしまうだろうが！ しかも初見の相手に！ いくらなんでもこれは恥ずかしいわ！ 恋愛とかに興味がないとか、そういう問題じゃない。これは、人としてかなり駄目なほうに見られる気がするんだよ！ 何故かなんて理由はない！ 直感だ！ 感で何が悪い。でもやつぱりこれは駄目だろ。箒に足と手でしがみ付いているんだぞ！ あまりにも惨めなこの姿は、出来れば誰にも見せたくない。「なあ、その西行寺さんはこっちに気付いているのか？」

残念ながら俺の今の態勢では、姿が見えない。というか、屋根しか見えない。

「ん？ いや、縁側で寝ているからな。まあ寝たふりという可能性もあるが」

「なら早くしてくれ！ 彼女が起きる前に俺は地に足を着けたい！」

「何だそりゃ。まあ、いいけど。起きないという保証はないぜ？」

「そのときはそのときだと諦めるさ」

「オーケー、それなら任せろ！」

言って、再び加速した。一瞬で屋根は視界から失せ、池も一瞬で消え、雪の積もった地面が、地面が？ あたるうううううううううううううううう！

「とうちゃーく」

「のわああああああ！」

急ブレーキをかけるな！ いや、かけるにしたって一声掛けてく

れたっていいだろ！ 別に韻を踏もうなんて思ってたねえぞ！

ちなみに俺は今、宙を舞ってそのまま地面に叩きつけられそうになっっている最中です。一応下は雪が積っているから安心ですがね！ん？ 何か誰かと目が合った。とりあえず知らない人だ。あ、角度が頭から下に落ちる方向に落ち着いて、相手の姿が良く見える。桃色の髪、淡い水色の着物の女性。あ、あと頭に珍しい帽子を被っている。おっとりとした感じに微笑んでいるのだが、その表情がとても似合っていて、見惚れてしまいそうになる。

あれ？ もしかしてこの人が西行寺幽々子さん？ 寝ているんじゃないかったの？

「お、桐嗣の叫び声で起きたのか？ あれくらいで起きるなんて珍しいな」

「うーん、なんかそろそろ妖夢も帰ってくる気がしたら、起きてしまったのよー」

なんて会話が聞こえてくる。やっぱりこの人が西行寺さんなんだぶらっちゃー！

痛い。頭から積った雪の中に突き刺さったようだ。その上おかしな奇声を上げたわけで、あれ？ もしかしてあの痴態よりもさらに酷いものを見せているのでは？

うーん、微妙なところだね！ もう気にしないほうがいい。そのほうが平和だ。いろいろと。

「あら、新しい人？」

「そうだぜ。宇條桐嗣と言って、外で妖怪退治をしていたらしいぞ。まあ、今はてんで弱っちいけどな！」

「だまらっしゃい！」

すぐに抜け出し、魔理沙の頭を叩いてやる。思い切り。当然帽子越しだ。なんか尖った部分が凹んで、醜いのう。まあ、これも制裁である。逆ギレとも言うが。

「いってえ！ 何すんだよ！」

「いや、あまりにも失礼な発言をするものだったからついね。それ

はそうと、貴女が西行寺幽々子さん？」

「ええ、そうよ。幽々子で良いわ」

のんびりとした口調で微笑みかけてくれる。さっきの俺の無様な着地には一切触れない。さすが妖夢の主なだけあって、出来た人である。

だがしかし、この白玉楼に来て気になることが増えてしまった。たとえば、どうしてこの冥界に、こんな美しい人が住んでいるのかいやまあ、これだけなんだけれど。

「それにしても、先程の着地は面白かったわ。またやってくれる？」

ああ、やっぱり触れるんですね。当然ですよ。ははは。

……はあ。

「さすがにもう勘弁です。それで、一つ聞きたいんですが、良いですか？」

「どうぞ」

「えっと、幽々子さんはこの冥界で何をしている人なんですか？妖夢の主で、この広い白玉楼に住んでいるという時点で、ただものではないと思うんですが」

ストレートに質問。これがスマートに会話を進めるコツだぜ！。

本当かは定かじゃないけれど。

「私は、ある方にこの冥界にいる幽霊の管理を任せられているのよ。それはまあ、千年以上も亡霊をやっている、幽霊を使役できる所為ねえ」

「え？ あ、亡霊？」

「ええ、そうよあ」

間延びした台詞で肯定される。亡霊、ですか。しかも千年以上やっていると。はあ、人は見かけによらないというが、これはちよつとすごいな。しかもこの外見、喋り方から、この冥界の管理をしているようには見えない。あ、あと、俺は幽々子さんが人間じゃないことに気付けなかったんだが、何故だろう。不思議である。

気付けなかった理由として一番考えられるのは、この冥界の独特

に空気の所為、かな。幽霊が溢れ返っているような場所にいるおかげで、俺の感覚が鈍っているのかもしれない。うん、たぶんそうだ。というか他の理由が思い浮かばないのでこれで確定ってことで。

うむ、相変わらずいい加減である。

「あ、そうだ。とりあえず初めまして」

「こちらこそ」

にこにこ笑顔が眩しい幽々子さん。俺の遅い挨拶にもにっこりだ（意味がわからん）。

それにしても、幽々子さんが人じゃないというのなら、妖夢に関する質問も微妙に変わってくるんだよなあ。どうしたものか。

まあ、それを考えるのは後にして、今は目の前の問題を解決しよう。

「魔理沙、お前何をしているんだ？」

「ん？ 帰る準備だけど？」

「いや、それは分かるんだけど、何を持っているんだ？」

「お前の刀だけど？」

あれ？ 普通に泥棒っぽいことを……いや、別に構わないのだけどね。でもこのまま盗まれると、妖夢と闘うのも無理だろうし、あとで霊夢に叱られそうだしなあ。いやあ、年下に叱られることを恐れているわけではないのだけれど、彼女を怒らせたくないということかなんというかー。

まあともかくここはとりあえず返して欲しいわけだ。

「ちよつと待て。その刀、最終的にはお前に譲ってもいいから今は返せ」

俺の発言に、今までこちらに背を向けていた魔理沙が振り向く。なんか目が爛々（らんらん）と輝いているぞ。らんらん（以下略）。危ない。ついやつちゃわれかねんところだった。

「本当か！？」

ずいっと、いや、ずいっと俺のほうに詰め寄ってくる魔理沙。おい、そんな期待に満ちた笑顔で俺を見るな。

「ああ、約束する。具体的に言うと、俺が外に帰るまでにはお前に譲るつもりだ」

「……っ！ よし、約束だからな！ 絶対だぞ！」

そしてやつぷー！ とかまるで赤い帽子の髭親父見たいな叫び声をあげながら箒に跨り、飛び去って行った。

早すぎだろお前。

しかしさっきの間は何だったんだろうなあ。笑顔も一瞬消えていたような気がするし。

まあ、もう見えないところまで行ってしまったあいつに、この疑問を投げかけることなど出来るはずもなく、それならば次に会ったときにでも聞けばいいのだよ、と。

ははは、俺ってば聞きたいことが多すぎて処理しきれんのか不安だよ。しかもこちらに来てからの俺はどうも物忘れが激しいみたいだしね。実は自分の母親が惨殺されたことだって、博麗神社の賽銭箱を見るまで忘れていたくらいだ。

きっと俺の身体に異常があるのだろうけれど（主に頭に）、あまり危機感が生まれなかったりする。それはたぶん、あの過去を忘れ去りたいからかな。

うーん、いつその事、誰かにあの頃の記憶のみ消し去って貰いたいなあ。そうすれば、神宮寺三倉のことで悩むこともないわけだし、きっと、単純に綺麗な女性として見られるはずである。そのほうが幸せだよ。

好きに恋して、好きに遊んで、好きに幸せになれるような人生を送りたいよ。まあ、さすがにそこまでの人生を送れる人なんてのは、そうそういないだろうけれど。でも、望んではいるのだよ。そういう人生を。

え、一生かかっても出来るはずがない？ わーってるってそんなこと。俺は来世でそういった人生を送りたいんだ。ふふふ、贅沢過ぎて吃驚しただろう。

「ねえ、えーと、桐嗣だったかしら？」

「はい、なんですか？」

いきなり声を掛けられ、一瞬ビクってしちゃったじゃないか。というかずつと俺の後ろで座っていたはずなのに、気配が感じられないのがいけないんじゃないかな、とか思う。関係ないのだらうけれどー。

「妖夢はまだかしら？」

「え？ ああ、そろそろ来るんじゃないですか？ 途中までは魔理沙が合わせて飛んでいたから、そこまで距離は開いていないと思います」

「そう。じゃあ、妖夢が来るまで一緒に待ちましょうか。ほら、こっちこっち」

自分の隣に來いということなのか、床をぺちぺち叩いている。ちよつと、その動作が可愛いかつていうレベルじゃないのですが。貴女本当に、千年以上亡霊やっている方ですか？ と問いたくなる。当然問わないけれど。

「ああ、じゃあお言葉に甘えて」

ゆっくりと彼女の側に寄り、隣に腰を下ろす。少し身動きみじろすると、お互いの腕が触れ合いそうな程近くに座ってしまった。

どう考えても失敗である。

そう思っていたら、俺の左肩に若干の重量感。なんでございましょう？ と目をやると、幽々子さんが頭を乗せてらっしゃる。

何これ。

俺はこれからどうしろと？

「柱より、こちらのほうが暖かくて気持ちいいわねえ」

それは枕代わりとして、ということでしょうか？ というか、何これから妖夢がすぐ来るというのに寝る気満々ですか。そうですか。あー、もうこんな歳にもなつて何緊張してんだよ俺。いい加減にしろよ、と自分を落ち着かせようと必死になつてみる。

うーむ、これでは妖夢に変な誤解をされてしまふ。それは避けたいなあ。彼女とは仲良くしたいわけだし。

あ、でも、幽々子さんがこういう性格だということも妖夢は知っているかもしれないな。何せ自分の主のことだ。だから咎めるのは俺じゃなく幽々子さんのほうかもしれない。

よし、何か間違っている気がしないでもないけれど、そう思うことで俺は前向きに生きられそうなのでこれで良しとする。異論などは一切受け付けませんよーだ。

「あの、幽々子さん？　もしかしてまだ眠いんですか？」

とりあえず当たり障りのない質問をば。

「うーん、それほど眠くもないのだけれど、お腹空いたのを我慢するためにも眠ろうかと思っているの」

「あれ？　妖夢は炊事とかはやってないですよね？」

「そうだけど、基本的に私と妖夢は、一緒に食事を摂るようにしているから、帰りを待っていなきやいけないのよ」

そうなんですかー、と適当に返しつつ考える。

幽々子さんは、妖夢のこと好きなんだろうなあ。

仕事のパートナーとしてだけ見ているのであれば、一緒に食事をするために空腹を耐えるなんてこと、普通の主はしないものだ、と少なからず俺はそう思う。

つまり妖夢は、人間から、人間ではない存在からも、慕われている。

今、幻想郷で一番気になっていたことが解決して嬉しいが、その半面羨ましいとも思ってしまう。

これが嫉妬、かねえ。

俺も妖夢のようにになりたいぜ。いや、容姿云々の話ではなくてね。俺は力を持つてはいるけれど、それ以外は普通の人間で、それなのに俺は、人間からも、そして妖怪からも忌み嫌われている存在だ。上っ面だけは、親しく振舞われてはいたけれど。

まあ、そんなことは置いといて、すっかり忘れかけていたことを聞こうか。

「そういえば、あの方に冥界の管理を任せられている、と言っていま

したけど、そのあの方とは一体何方ですか？」

問いかけられた瞬間、幽々子さんは頭を肩から離れた。ああ、折角いい匂い堪能していたのに。嘘だけだー。

そして俺に後頭部を向けて話し出す。

あれ、俺は反対ですよ？

「あの方は、そうね。中々素晴らしい方よ？」
何故疑問形。

「お名前とか、聞いても？」

「え、ええ。あの方の名前は、やま、じゃなかった。四季映姫・ヤマザナドゥ。四季が苗字で、映姫が名前。それからヤマザナドゥは役職よ」

「役職？」

「ええ、彼女はこの幻想郷の、閻魔様なのよ」
「閻魔……」

と言えば、地獄で死者を裁く裁判長的な存在か。それが実在するなら、やはりそれ相応の実力を持っているんだろうなあ。

「彼女に興味でも沸いた？」

いつの間にかこちらを向き直し、そんなことを聞いてくる。

「そりゃまあ、閻魔様という存在は一度見てみたいとは思いますが……」

「なら、ここにいれば何れ会えるかもしれないわ」

「え、それ本当ですか？」

「勿論。あの方がこの管理を、私に任せただのよ？ その冥界を見回しするの、彼女の仕事のひとつなのよ」

ああ、そうか。そう言われれば納得である。

しかし閻魔様とは、楽しみ過ぎる。

「あの方も、黙っていれば可愛い女の子にしか見えないのだけだね」
つい無意識に漏らしてしまったようで、言っですぐに口を噤む幽々子さん。

ふむふむ。良いことを聞いた。閻魔様は可愛い、と。俺の脳内に

メモしておかなくては。

俺の予想では若干幼さの残る女の子。そんな可愛らしい子だけれど、部下たちには厳しい上司みたいな存在。

うむ、こういうのをギャップ燃えというのだよ。え？ 燃え違う？ 萌え？ ああ、そうですね。失礼いたしました！。

まあしかし、俺のそんな予想が当たるわけもないがな。

もし当たりでもしたら、その閻魔様に告白してやる。もう精一杯の演技で。そして了承を得た場合、俺は彼女と幸せに暮らしてやる。そう、そしてこの物語はハッピーエンドで終わるのさ！ 何の異変も起こらずに！

うーん、詰まらない話にしかないから止めて欲しい。というか、万が一にも告白を了承されるなんてことは有り得ないからね。閻魔様が、見ず知らずの人からの告白を受け入れでもしたら、俺は彼女の頭の中身を疑うよ。

とまあ、ふざけた戯言は置いて、なんとなく陰陽玉を手のひらに乗せてみる。

この中に俺の憎むべき相手がいるわけで、これを潰してしまえば何もかもお終いなはずなんだよね。

「あら、その陰陽玉どうしたの？ って霊夢しかないわよね！。もしかしてそういう関係なのかしら？」

「え？ そういう関係って？」

つい聞き返してしまった。そういう関係の意味も分かっているのに。

「そういう関係っていうのはつまり、あれよ。こういう関係」

そう言っただけ俺の右頬に左手を添えて、そのまま顔を近づけて来て、幽々子さんは少し目を細めてお互いの唇がくっついててててててててててててて？ あれ？ 俺、今何をしているのかな。

結構寒いこの場所で、何だか口元だけは暖かくて。

俺はたぶん、目を見開いて、驚きをまったく隠せていない。

幽々子さんは、妖艶な表情で微笑みを浮かべ、しかし唇を離そう

としない。

ちよつと、何これ。

初対面だよな、俺たち。少なくとも、俺は今日初めて会ったと思っている。もしかして違うのか？　ずつと前から知り合いだったりするのか？　そして再び会ったときはぶちゅーする約束でもしていたのか？　今日の俺は記憶力に自信がないからもしそうだと言われたら信じてしまうかもしれないぞ。ていうかまだちゅっちゅしているんですか幽々子さん。もう結構な時間しているような気がしないでもないのですががががが。

やばい、思考が上手く出来ない。

何だよ。何なんだよこれは。

頼む。誰かこの状況をどうにかしてくれ。いや、俺が幽々子さんを払い除ければいいのだけれど、何故かそれをしてはいけない気がするんだよ。

「幽々子様―ただいま帰りま、し、た？」

そしてここで、空気を読んだのか読んでいないのか良く分からない形で、妖夢がやってきた。寧ろ帰って来たと言ったほうがいいのか。

「あら、お帰り妖夢。それじゃあ早速だけれど、お夕飯にしましよ
う」

妖夢が戻ってくるなり幽々子さんは離れ、立ち上がり、そして俺の存在を無視するかのようにして去っていった。

いやいやいやいやいやいや。意味がわからないから。

妖夢も驚いた表情で俺を見ている。って俺？　俺なの？

「や、やあ、妖夢」

とりあえず挨拶。恐らく最後に言葉を交わしてから、三十分も経っていないのだろうけれど。

「あ、え、と、ど、どう、も？」

ああ、余計に混乱させてしまった気がする。ちよつと待て、確実に俺のほうで混乱しているのだから、俺より混乱しているような拳

動は止めたまへ。

「あ、っと、お、落ち着け妖夢。と、ととと、とりあえず、こつち座れ」

先程の幽々子さんのように、隣をぺちぺち叩く。まあ、叩いたのは幽々子さんが元いたところなので、使う手は逆なのだが、そんなことはどうでもよすぎて腸が煮えくりかえるわー！ 意味がわからん。

よし、とにかく今は、とてとてと歩いて来て隣に座った妖夢とお喋りして、落ち着くよう努力しよう。

「妖夢、遅かったな？」

「そ、そりゃあ、あの人のスピードに付いて行くのは無理ですし。これでも結構急いだんですよ？」

「そうかあ。やっぱりあいつがいけないんだよな」
「そうですそうです」

ああ、会話は普通に行っているように見えるが、実はお互い顔も見えない。というか、二人してそっぽを向いているはずである。

「そ、そんなことより、一ついいですか？」

え？ いきなり確信ですか？ きつとこのタイミングでこういう切り出し方と言えば、これしかないだろうし。

「さっきのあれ、幽々子様から、でしたよね？」

やっぱり。まあ、ちゃんと見ていてくれたようなので助かった。誤解されていたら一苦勞である。というか、誤解していたらすでにここにいないかもね。

「うん。彼女からいきなりだった。かなり、驚いた」

「そ、そうですか。ふっふふ、深くは聞きませんが、これから気を付けたほうがいいですよ」

きつと、お互い顔は真っ赤だ。見ていないからわからないけれど、お前らそんなに熱いなら雪の上に横たわれ！ うつ伏せで横たわれ！ とかわれそうな程に赤いはずだ。まあ、言う人がいないので大丈夫だけれど。

「おっけー、これからは気を付けるよ。というか、さすがにもう二度とあんなことさせないし。今回はちょっと不意打ち過ぎたからあれだけど、もう同じ轍は踏まない」

「はい。そうしてください」

会話終了。

どうしよう。あ、でもそういえば夕飯がどうたらと言っていた。そして俺は超空腹である。ということでは飯に逃げる、か。

「そうだ！ そろそろ夕飯だろ？ 食いに行こうぜ」

「あ、そうですね。行きましよう行きましよう」

二人同時に立ちあがり、さすがに頭をこつつんこなんていうベタな展開は待ち受けていることもなく、一人はすたすたと、もう一人はぺたぺたと歩き始めた。

どっちが誰の足音かは、ご想像にお任せいたします。

第六章 白玉楼に死す（後書き）

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。

第七章は日曜日から月曜日頃公開の予定です。

第七章 対妖夢戦、そして更なる闘いへ 前編（前書き）

いよいよ本格的な闘いである。

やばい。

これでは本当に主人公職に再就職ではないか。

魔理沙に敗れた、はい終わり。これでいいじゃないか！

まあ、妖夢と闘いたいという気持ちはないこともないけれどー。

第七章 対妖夢戦、そして更なる闘いへ 前編

夕飯を食べ、俺のために宛がわれた部屋に案内され、風呂、廁の場所も教えて貰い、暫くしてから風呂に入り、部屋に戻ったら髪を乾かすこともせず、すぐ眠りに就いてしまった。

そしてそのまま夜も明け、それまで一切目を覚ますことも、夢も見ることもないほど深い眠りに就いていたらしい。

昨日の流れから、起きたら隣に幽々子さんが寝ていて、これが朝ちゅんというやつか、という経験をすることもなく、ただいま部屋を出て縁側に座り、地面すれすれの位置に足を下ろして、背中がゾクゾクつと来て良い感じに目が覚める。「おおうつ」とかつて変な声を出しそうになる。

いや、出してしまっていたが、まあ、気にしない。周りを見ても誰もいない。あのふよふよ浮いている幽霊も、今はどこにもいないはずである。さすがにどこかの影からこっそり見ているなんてことはないだろう。

しかし俺、いつの間に着替えたのだ。まったく覚えていない。いや、たぶん風呂から出てからだろうとは想像出来るのだけど、着る、という動作をまったく覚えていない。

なんとということだ。また記憶が！

って今重要なことを思い出した。陰陽玉はどこだ？

そう思っ、て部屋に戻ってみる。どーこーだーどーこーだあーた！

あつた！

「起きてるか？」

「貴方が寝る頃からずっと」

ということは寝顔をずっと見られていたのかな。まあ、恥ずかしくもなんともないし、いいんだけどね。見たければ見るよ、的な。

「そうか。じゃあ、俺が寝ている間に、何か変わったこととかは？
ていうかお前翌朝には元に戻っているって言っていたよな？ あ

れはどうなった？」

まあ、戻っていないことに越したことはないのだけれど、とりあえず疑問に思ったので聞いておこう。

「え、あの、貴方、それわざとじゃなかったの？」

「はえ？」

あれ、なんか後ろのほうから声が聞こえる。てつきり俺の耳がかしくなったのかと思っていたがそうではないのか？　なんて思いながら、まったく危機感なく声のするほうに振り返ってみる。

俺は正直思ったよ。何故このとき、危機感を覚えなかったのか、ってね。いくら寝起きだからって、もう眠気などまったく感じていないはずなのに。

何故、直視するような真似をしてしまったのかなあ。

長い艶やかな黒髪。整った顔立ち。季節などまったく気にもしていないのか、冬だというのに浴衣姿を晒している女性。

相変わらず浴衣が似合っている。今は明るい色だけれど、昔は紺色とかそんなのだった気がする。まあ、かなり記憶が曖昧なので、真偽は分からないが。

「……………」

おい、俺。息が止まっているぞ。呼吸をしろ呼吸を！　いくら目の前に、俺を苦しめた元凶がいるからって、緊張しすぎだろ！　もっと気楽に行こうぜ。相手は俺に惚れているんだ！　殺そうと思えば、いつでも殺せるんだから！

「つか、は、はああああ」

「だ、大丈夫？」

部屋の隅っこに座っていた彼女は、心配そうな顔で腰を上げる。しかしそれを、手で制してやる。これ以上近くに來られたら、俺は俺じゃなくなりそうだ。

「近付くな。そこから、一歩たりとも近付くんじゃない！」

「う、あ、で、でも貴方、苦しそう」

それはお前の所為だ、なんて言ってやろうか。そうしたらこいつ

は、絶対に苦しむ。そうしてやればいいと思う。なのに出来ない。

こいつは既に、もう何年も苦しんでいるはずなんだ。自分はいけないうことをしたということを、悔いている。それは分かるんだ。分かるけれど、だからといってそう簡単に許せるかと言えば、そんなはずがない。

正直今すぐにでも、撲殺絞殺刺殺圧殺爆殺銃殺屠殺呪殺してやりたい。屠殺は人には使われない単語だった気がするけれど、相手は人ではないのでありだと思ふ。うん。

「……苦し、そう」

消え入りそうな声で、同じ言葉を繰り返す。たぶん、俺が何も言わないから。

「大丈夫、だから。だから安心しろ。お前はそんな顔するようなやつじゃないだろ？」

それは本心である。というか、敵であったときから（今も俺は敵だと思っているけれど）、何かを恐れているような、そんな顔はしなかった。

「う、うん」

俺の言葉を、どう捉えたのかな。まあ、たぶん好意的に捉えているんだろうなあ。別にそれでも構わないけれど！。

「とりあえず俺は、妖夢のところに行つてくるけど、お前はどうするんだ？」

「……一緒に行つていいなら、行く」

何だか子どもっぽくなったか？ 外見は変わっていないはずだけど、内面は既に変わり果てているから、それで更に子供っぽいという特徴まで追加されても、大して驚きはしないんだが。

あー、でも前から子どもっぽいと言えは子どもっぽいのかな。敢えてどこら辺が子どもっぽかったとは言わないけれど。

「この距離を保てるなら、付いて来てもいいよ」

とりあえず優しく接してあげる。俺は、彼女にはもう悪意など一切ないことを、認めなくてはならないはずなんだ。だから、少しず

つでいいから、認めていく努力をしよう。

それにたぶん、いつまでも辛く当っていると、紫さんとかからお仕置きされかねないしな。

「じゃあ、付いて行くわ」

ですよねー。

ということ歩き出す俺。ちゃんと距離を保っているかなんて気にはしない。後ろを見ず、ただ軽い足音だけを聞いて、付いて来ていることだけはちゃんと把握しておく。

迷子になんてなられたら困るからね。

どこかの曲がり角で鉢合わせでもしたら、俺はもうどうにかなってしまふよ。ほら、心の準備もなく、彼女の姿を見る前に会話もなく、いきなりなんて、確実に俺、斬りかかる自信があるぞ。

さーて、妖夢の部屋は何処だったかなあ。てか腹が減って妙にやる気が起きない。昨日あれだけ食っても、結構な時間寝れば腹も減るわけですて。

「そつえば、妖夢のこと知ってるのか？」

「幻想郷に来たとき、博麗神社にいたのよ。だから一応面識はあるわ」

「そうか」

そつえば、俺が最初に神社で目覚めるまでの間、何かあったかどうかというのを、まったく知らないわけだ。うわー、その間に僅かでも陰陽玉から出て、俺にぺたぺた触れたりされていたらどうしよう。いや、別に寝ている間にされたところでなんとも思わないけどね。なんとなく言ってみただけだよ。悪いが。

それはともかく、妖夢ー、よーむうー、よーむーはどこですかー、と。

いや、実は一直線に向かっているんですよ？ でも妖夢の部屋まで行く道順を描写していると、かなりの長文になるのでこうやって割愛しているのですよ。

ほらその証拠に、もう目の前に妖夢その人が、って丁度部屋から

出てきたようである。

「おお、おっはよう妖夢―」

「あ、おはようございます」

時計は部屋に忘れてきたから、時間も分らないけど、とりあえずおはようなのだ。ほら、一応朝のはずだしね。あと、妖夢もおはよう、と返してくれたからもう間違いないだろう。

あ、それから昨日のギクシャクはなんとかあった。今では普通に接しているのである。

「これから幽々子様を起こして朝食を食べるんですけど、一緒に行きます?」

「おう、もちろん」

と、そこで妖夢は俺の後ろの人物に気付いたようだ。やはりそれなりに距離があるから、気付きにくいようなあ。

「えっと、何方さまでですか?」

そうか。神社で会っていると言っても、妖夢が知っているのは刀と陰陽玉のときだけなんだ。

「私よ」

それで分かったら苦労はしな「あ、三倉さんですか。外に出たんですね」分かるんですね!。

「ええ、昨日桐嗣と約束していたから。でも、思っていた反応は得られなかったわ」

「そうなんですか。それは残念ですね」

そういえば、優しく接してやるとか言ってたかもしれない。誰かとは言わないけれど。まあ、俺なんだけど。

ほら、目の前の妖夢は、若干白い目で俺を見ているし。

「だ、大丈夫だって。ちゃんと後でフォローする」

と、一応妖夢に耳打ち。

「ならいいですけど」

とか言っただけで俺に背を向けて歩き出す。勿論俺を嫌ったわけではなく、単に幽々子さんのところに向かっているだけ。のはずである。

あれかな。既に妖夢たちは、俺とあいつが恋人同士みたいに映っているのかな。あ、でも幽々子さんは違うかも。あんなことしてくるぐらいだし、彼女は俺と霊夢がそういう関係かと聞いてきたわけだし。

ああ、あのときちゃんと答えてれば、あんなことされずに済んだよなあ。いや、嬉しいけどね。いくら、年齢にしたら相当のものとはいえ、見た目は本当に若いわけで。そうだな、紫さんよりちよっと上くらいに見えるぐらいだ。

ちなみに、俺視点での紫さんの年齢は、多く見積もっても二十代前半から真ん中くらい。ということで、幽々子さんの場合、盛つても二十代後半くらい。とは言っても、これは雰囲気からそう感じる、と言っただけであって、見た目だけなら二人とも十代後半から二十代前半に収まる。

というわけで、本当は千年以上も歳を重ねていても、見た目はとても若い相手に口づけされて、まったく舞い上がらない男は男じゃないと思うんだ。いくらそういうのにまったく興味ないとはいえ、されたらされたで喜ぶのである。

何か文句のある奴は、一度幽々子さんとかにキスされても平常心でいられるかを考えた末で言いたまえ。絶対に無理だから。

しかも俺の場合不意打ちですからね。余計戸惑いますよ、と。ふう。

久々に癖の溜め息が出たかと思っただけれど、最後に溜め息吐いてから二十四時間も経っていないんだよね。

いやー、一日が濃いねー。まるで妖怪退治時代みたいだね。思い出したくもないけれどー。

とかって考えていたら、妖夢がある部屋の前で止まった。ここが幽々子さんの部屋か。昨日は妖夢以外の人の部屋まで見る余裕なかったからな。眠くて。

「幽々子様ー、朝ですよー」

ふむ。これで起きられるのなら、幽々子さんは見た目のおっとり

とした雰囲気を払拭できるかもしれない。いや、嘘だけど。

「まあ、いつも通りならこれで起きるはずがないんですけどね」

俺に向かつてそんなことを言う。いや、なら最初からやるなよ。

妖夢は遠慮なく襖を開け放ち、ずかずかと部屋に入る。まあ、そこまで堂々として感じではないけれどね。

しかし部屋のド真ん中に布団が一枚。何やら膨らみがあるので、そこに幽々子さんがいるのは間違いないのだけれど。うーん、完全に布団の中に隠れていらっしやる。頭すら見えないよ。

何、そんなに寒い？ いや確かに寒いけどさ。

「幽々子様、起きてくださーい！」

妖夢は幽々子さんに近付きながら、また声をかける。だからそれで起きるのか、と言いたい。言わないけれど。

しかも幽々子さん、身動き一つしないぞ。

もし次も声をかけるだけだったら、俺も参戦しよう。

とか思っていたら、普通に幽々子さんの身体を揺さぶって声をかけ始めた。そうそう、それでいいんだ。まあ、起きるかどうかは別として、だけど。一応手段としては正しいはずである。

「幽々子、とは何者なの？」

おっと、声をかけるな的なことを言っていなかったか。まあ、最初からそこまでする必要は感じなかったし、するつもりもないのだけれど。

「ん、この主にして、冥界の管理者だつてさ」

「……こうやって見ていると、そんなすごい人には見えないわ」

「まあ、ね」

いやあ、しかし君もなかなかだと思うよ？ 君を見た妖夢たちが、昔はラスボスだったなんて思うはずがない。ええ、本心ですともー。それにしても起きないね。もう布団も剥いで、冷気に晒されているというのに、それを気にも留めていないようだ。というか、気付いていないのかな？

うーむ、とんだ眠り姫である。

これは本当に、俺も参戦するべきかな。

「俺も、手伝おうか？」

「え？ ああ、お願いできますか？」

「おう、任せろ」

よっしゃ、ここは気合入れていくか。あ、もちろん昨日のあの不意打ちが頭を過ぎるけど、さすがにそんなベタな展開はないはずだ。ほら、昨日も何かベタベタな展開がありそうだったけど、何もなかった気がするし。

というわけで、両肩を掴み、思い切り揺さぶってみる。え？ いきなり強引過ぎ？ いいんだよ、昨日のあの腹癒せみたいなもんだから。

「起きろ！ 起きないと妖夢が変な男に食われるぞ！！」

「それはちよつと無理があるんじゃない……」

俺もそう思うけれどね。一応です。念のためです。よく分からんけどね。

そう思いながらも、幽々子さんからちよつと目を離している隙に、事態は急変していたのである。

何かが俺の首に絡みつき、思い切り引き寄せられる。

「え？」

それが幽々子さんの腕だと気付いたときには、もう俺の唇は、再度奪われ「やめろおおおおおおお！」そうになったけれど、誰かの声で遮られ、やはり結局ベタな展開にはならないで済んだのだった。ていうか一瞬本当に誰かと思っただよ、神宮寺さん。

とりあえず彼女のおかげで、俺は最悪の事態を迎えずに済んだ。

うむ、後できちんとお礼を言おう。これを切欠に俺も彼女を受け入れられるようになればいいんだけどなあ。いや、無理ですけどね？

「桐嗣とは私がするんだ！」

っておい。暴走し過ぎだろお前。

「あら、そうだったわね。じゃあそろそろ悪ふざけは止めて、起きましようか」

いや、幽々子さん、何がそうだったわね、だよ。ていうかずっと起きていたんですねー。

「それじゃあ、まず、貴女のお名前聞かせて？」

「え？ あ、ええと、神宮寺、三倉」

「良い名前ね。私は、西行寺幽々子。この白玉楼で冥界の管理をしているわ」

という感じにいきなり自己紹介合戦が開始された。まあ、もう終わりですが。

しかし何ですかねこれは。俺はとりあえず、私がするんだ発言に突っ込んだほうがいいのか？ しかも幽々子さんの所為で彼女自身、その発言を忘れているようである。

まあ、忘れてるならそれでいい。面倒にならないで済むしね。ただここで懸念されるのは、妖夢である。俺の中では中々空気の読めない子なのですよ。

「ええっと、桐嗣とは私がするって、どういう？」

ほらこれである。後ろを見ると、彼女は顔を真っ赤にしているしー。うわー、こんなの初めて見たよ。くうあうわういいね。うむ、素直にちゃんと言うつもりはない。

「妖夢、そういうのは聞かないでやれ。つい言ってしまったことだらうから」

誰もフォローしないから俺がしている。うーん、ホント何とかしてくれ。

「そそそそそそ、そうよ！ つい言ってしまったただだから、気にしないで！」

動揺し過ぎである。

「お前も落ち着け。そして飯を食おう。すべてはそれからだぜ」

俺が仕切る形になっているけれど、いいのかな？ まあ、誰も文句言わないからいいや。ただ、食事を何処で摂るのかいまいち把握しきれていない。というか、覚えていないんですが。

「ということで、妖夢、行こうぜ」

「えーと、はい。わかりました」

一応承諾してくれたけれど、釈然としていないみたいだねー。まあ、そりゃあそうでしょうけれど。

「それじゃあ、妖夢とお前は先頭歩いてくれ。俺はちよつと幽々子さんと話があるから、後ろ歩かせてもらう」

妖夢も神宮寺三倉も、何か言いたそうにしていたが、俺が目で制した。ちよつとね。俺は幽々子さんに文句が言いたくてしょうがないのですよ。本当は食事の後でとか思っていたけれど、先程のあれですでに我慢の限界です。

ということ以下俺と幽々子さんの会話。

「で、昨日は何故あんなことをしたんですか？」

「あんなこと？」

「しらばつくれるなですよ。さつきもしようとしたでしょアンタ」

「あらごめんなさい。でも、理由を言うのもねえ」

「そうですか。それは残念です。でも教えて貰えるまで食い下がりますよ」

「それは困るわ。お風呂とかにまで付いて来られたら、私の貞操がピンチ」

「あ、それは安心してください。そこまでするほど俺は愚かではありません。というか、確実に食われるのは俺だと思いますが？」

「あらあら、自意識過剰なのね。そういうところも好きよ？」

「いやー、残念ながらその好意を素直に受け取れないんですよ。他にも俺にらぶらぶ光線出している女性がいるのでね」

「でも貴方は、彼女のこと好きじゃないのでしょうか？」

「あれ、よく分かりましたね」

「ふふふ、常に距離を取って歩いているのが分からないほど、私の目は節穴ではないのよ」

「おやおや、この距離感は、俺と彼女との親愛度であるというのに、何という勘違い」

「あら、先程よく分かりましたね、と仰っていたではありませんか

「」

「いえ、記憶にございませんです。実は超が百個付くほどラブラブ、というのが真なんだよ、マジアイチテル」

「片言でしてよ？　もしかして外ではそういう愛情表現が流行りなのかしら？　嘘塗れの桐嗣さん」

「ハッハッハ、もう嫌だなあ。俺は嘔吐くだけは苦手なんですよ？　ええ、本当に」

「でしょうねえ。だから私は貴方の嘘が分かっているのよ」

「いえ、だから嘘は苦手なので、先程から嘘は吐いていないのですよ」

「……キリがないわね。ちなみに、先程は距離感が親愛度と仰ってたけれど、もっとラブったらどうなるのかしら？　具体的に言うところの十倍」

「そうだったら、もう二度と会うことはないでしょう。具体的に言うところ一兆万年くらいの距離が開いちゃう」

「そう。敢えて一兆万という数字に対しては突っ込まないでおいであげる」

いや、突っ込んでください。

と言ったところで目的地に到着。正直大して変化はないのだけれど、まあ収穫がゼロというわけではないのでよしとしよう。

しかし先に入っている二人が中々前に進もうとしない。何だ。何かあったのか？

そういうえば飯の準備とかがあってどうなっているんだろう。もう出ていたりするのか。それならそれで嬉しいけれど。

ほらー、早く二人とも進め。特に神宮寺三倉！　お前がそこにいたら俺は部屋にも入れんわ！

ぶんぶん怒っちゃうぞ……そこ！　似合わない上に気持ち悪いか言うな！　本気で傷つくぞ！　そして立ち直れなくなって終了しかねない。いや、何がかって言われると困るけれど。っと、話がずれた。

「あら、紫じゃない」

いつの間にか先行していた幽々子さんの、驚いているような発言はい。驚いているようではあるけれど、顔とかが全然驚いていないです。来ることが分かってたんじゃないのか？

しかし紫さんか。いろいろ用があつたけど、正直もうどうでもよくなつて来ているぜ。もう結構帰ること諦め始めているのかな、俺は。いや、帰りたいことは帰りたいけれど、幻想郷も中々面白いところだから、もうちょっとここで過ごしてみたい、という気持ちもあるのですよ。

「あらあら、皆お揃いで。ぐつもーにん」

語尾に音符マークでも付きそうな喋り方の紫さん。くそ、不覚にも似合うと思つてしまった！ 本当に不覚である。

とか思つていたら俺以外の三人は挨拶済ませているし。

まあ、紫さんからは俺が見えていないはずだし、後でいいか。

「桐嗣はー？」

「あー、はいはい、おはようございます」

見えていなくてもいるのは分かつたらしい。まあ、神宮寺三倉（今更だが、字数稼ぎにフルネームで使っているわけではないよ）がいる時点で、分かるかもしれないね。紫さんは前から面識あるみたいだし。

さて、妖夢たちも漸く動き出して、既に用意されている食事の前に座つた。しかしこの配置は、故意にやっているのか？

いや、さ。俺の分の食事と思しき場所から見ると、左右斜め前に二人ずつ並んでいる、という配置である。左側が、手前から妖夢、神宮寺。右側が手前から紫さん、幽々子さん。今更だが、何このハレム。

つてあれ？ 紫さんが自分の分の大半を幽々子さんに分け与えている。元々幽々子さんの分は多かったというのに。大丈夫なのか？ 昨日の夜はそんなに食べていなかったような気もするけれど。

「幽々子さん、そんなに食べて大丈夫なんですか？」

「んー？ まだまだ余裕よ。桐嗣も残すようだったら頂戴ね？」

「いやいやいや、アンタ食い過ぎだから。何、いつもこんなに食ってるの？ それでこんなスリムなのだからすごい。あれかな。栄養が全部上半身の一部分にしか行っていないのかな。若しくは、亡霊だから太ったりしないとか？」

「てか、亡霊って食事必要あるの？」

「じゃあ今度は紫さん。そんな少なくて大丈夫なんですか？」

「大丈夫よー。藍たちと少し食べてきたから」

「藍って誰だよ。紫さんの家族かな。」

「それじゃあ、頂きましようか」

「何故か紫さんの言葉で、皆一斉にいったきまーす。」

「それにしても朝から濃い食事である。だし巻き卵、焼き鮭、煮物、茶碗蒸し。これは多いなあ。でも皆文句なく食っているし、まあいいや。」

「食べよう食つべよう。」

「それでは以下、五人での会話。食べ物旨さなど描写しても、この料理漫画だよ、ってなるので、食事している描写は割愛。」

「相変わらず美味しいわねー」↑紫さん。

「そうですね」↑妖夢。

「あ、そうだ紫さん」↑俺。

「なーに？」↑ゆっかりん。

「その、彼女とはいつから知り合いなんですか？」↑主人公。

「うーん、まだ半年も経っていないと思うわよ。ね？」↑妖怪少女。

「うん、丁度五力月くらい前だと思うわ」↑神宮寺三倉。

「へえ。紫さんが外に出てきた形なんですか？」↑主人公辞めたい。

「そうね。丁度神宮町に出て、そこで不思議な波長みたいなものを感じたから、見に行ってみたら、物置の中に彼女がいたのよ」↑年齢不詳八雲さん。

「……………」↑黙々と食べる幽々子さん。

「あれ？ でもいつ人型の彼女を見たんです？」↑桐。

「あ、あれは紫が私の姿を見たいというから、一時的に刀から出たのよ」↑元ラスボス。

「ほお、それなのに俺は二つの人外の存在に気付かなかったわけか」↑うじょー。

「あら、気付いていなかったの？ あの時置のすぐ近くよね、貴方の部屋」↑スキマ。

「え、なんで知ってるんですか」↑元妖怪退治屋。

「それは貴方が寝ている間に、寝顔を拝見していたからよ。ちなみにその寝顔を一緒に見た彼女は、思い切り一目惚れ」↑ヤクモユカリ。

「ちょ、と、待って！ それ言っちゃだめって言ったのに！」↑恋する乙女。

「そういえばそうだったわね。ごめんなさい」↑紫。むらさき

いやあ、俺のことを好きだっていうのはとくに分かっていますから。しかし、昨夜以前に既に寝顔を見られていたとは。宇條桐嗣、一生の不覚である。うーん、既に不覚取られまくっている気がするからどうでもいいかなあ。

しかし妖夢は序盤で一言「そうですね」と言っただけ、黙っているなあ。ていうかもう食べ終わっているし。早いよ君。

ちなみに最初から一言も発していない幽々子さんは、現在ご飯三杯目のおかわりを頼んで、それを待っている途中である。

幽々子さん、貴女の胃袋は宇宙ですか？ フードファイトしてらっしゃいな。

本当にもうこの人、一言も喋らない。何、食事のときは性格が豹変する人なの？ ねえ、そうなの？ 誰か何とか言って。

幻想郷にいるのは楽しいんだけどなあ。こういう謎が大量にあって適応出来るか不安である。まあ、永住するつもりはないからいいけどさ。

あ、話は変わるけど、俺ってもう白玉楼にいる理由がないんだよね。うーん、どんなに長くても数日中に出ようかな。幽々子さんは

ちょっと苦手だし、霊夢のところで炊事とか手伝っているほうが俺には合っている気がする。

「桐嗣さん」

「ん？ 何、妖夢」

「食べ終わって少ししたら、始めます？」

何を、とはさすがに聞き返しませんよ。ええ。そういえばそれがあつた。これが終わらないと、博麗神社に戻るわけにはいかないのだ。

「うーん、そうだな。それでいいよ。というか食い終わって刀を取りに行ったらすぐ始めたいんだけど」

「そちらがそれでいいのなら」

決まりである。俺は残りの煮物を胃袋に収め、立ち上がる。

「食器とかってこのままでいいんだっけ？」

「はい。後で取りに来てくれるので」

「了解。それじゃあ、一旦部屋に戻るわ」

立ち上がり、神宮寺三倉に視線を遣る。当然のように視線は交差し、まるで見つめ合う恋人同士みたいな状態になってしまった。

「お前も一緒に行くか？」

まだ食べている途中なのに、俺は何を言っているのだろう。どうせ俺はここに戻ってくるのだから、待っていてもらえばそれでいいのに。

「食べてからなら、行くわ」

「だよな。じゃあ、食べ終わってもここにいてくれ。刀取りに行くだけだから、すぐ戻る」

「……うん」

何だよその不安そうな目は。そんなに俺とこれ以上離れるのが嫌か。今まで散々離れて生活してきただろうが。

ああ、違うか。だからこそ、なんだろうなあ。俺を好きになっからまだ間もないとは言っても、恐らくそれから一度も俺に近寄っていないのだろう。というか、たぶんだけれど、俺を好きになった

のは紫さんと一緒に俺を見たときより前だと思う。

一度だけ、物置の掃除をしに行ったことがあった。あのとき、俺のやったことが切欠なんだろうなあ。あ、これに関してはまだ語らないけどね。

で、まあ自分の気持ちに気付いたのが、俺の寝顔を見たとき、と推測してみる。

というか、ね。そうでもない和有り得ない気がしてならないのですよ。ラスボスをしていた奴が、俺に呪いまでかけて生き永らえていたというのに、俺の寝顔を見ただけで惚れますか、っての。

もし、寝顔だけで本気で惚れたというのなら、俺は絶対に、永遠に彼女を受け入れることは出来ないだろうね。ああ、違う。彼女の気持ちを、ね。彼女の存在を認め、受け入れ、仲良くするくらいのことなら、まあ、一生のうちに出来るようになるかもしれないから。

って、ん？ 何か前から人魂ひとたまが。しかも何か見覚えのあるものを背負っている？ いや、見覚えがあるなんてもんじゃない。あれは、刀だ。俺の、物じゃなくて、俺の使っていた刀。

何？ まさかわざわざ持って来てくれたのか？

そう思いながら、俺も彼（若しくは彼女？）に歩み寄る。おおう、間近で見ると、何か愛らしい姿ですね。まあ、妖夢のを既に見ているから、そんなに感動もないけれど。

とりあえず人魂が背負っている刀を、俺が外してやる。うーん、自分で下ろせないようだったから俺が外したのだけれど、それなら一体どうやって背負ったんだ？

どちらか一方が出来れば、もう一方も必然的に出来ると思うのだけれど。謎だ。

ま、気にしてもしようがない。

本当は部屋で着替えも済ませようと思っていたけれど、闘うにはスーツよりこっちのほうが動きやすいだろうし。

しかしこの男物の浴衣、どこにあったのだろう。箆笥とか何もな

かったよな？ 持って来て貰ったのかな。この刀みたいに。うあー、記憶がないー。

閑話休題。

とにかく今は闘いである。

「妖夢ー！ 準備出来たぞー！」

「……え、は、はい！」

若干の間があつて、驚く妖夢の声が届く。まあ、そりゃあこんな短時間で取って来たとなると、驚かざるを得ないだろう。

さて、そんなわけで妖夢が襖を開けて登場。いやはや、思った以上に早い再会である。ページにすると二ページにも満たない気がする。いや、自分でも何言っているのか分からないけれども。

「早いですね」

「……まあな」

おっと、嘘を吐いてしまった。まあ、特に問題はない。はず。である。

「じゃあ、早速始めようぜ」

言いながら、庭のほうに目を遣る。

「はい。そうですね」

妖夢は幽々子さんの警護役だけあつて、刀を所持している。それも二本。

「そういえば、弾幕の出す練習とかはしました？」

「ああ、そっか。忘れてた。普通に刀で斬り合うつもりでした」

「……まあ、殺し合うわけでもないですし、それでもいいですけど、どうします？ 本来なら、この先弾幕ごっこを誰としても困らない為に、というのが目的ですけど」

「うーん、本当なら弾幕ごっこをするべきなんだろうけど、二回も続けて負けるのも癪だしなあ。とりあえず勝てる可能性のあるほうでやりたいかもしれない」

「じゃあ、そういうことでもいいですね」

首肯し、庭に先に降りる。って、草履か。まあいいけどさ。下駄

なんかより遥かにマシである。しかしこれ、誰が用意したのかね。これまた人魂？　ただけ用意周到だよ。ああ、いや、たぶん幽々子さんが指示しているのかな、と予想。というかそれ以外ないでしょう。

そういえば下駄で思い出したけど、昔闘った天狗、今何してんのかなあ。あいつは人間の味方でいてくれたから、放置していたのだけれど。

この数年間ずっと会ってないし、もうあの町にはいないのかな。もしそうなら、少し残念だ。あいつは結構強いし、俺の代わりにあの町を護ってもらえるといいなー、とか思っていたのだが。ん、まあ、つい先ほどまで存在を忘れてましたがね。

ってそんなことはどうでもよくて、ここは闘いに集中である。

俺と妖夢は向かい合い、それぞれ柄を握り、引き抜く。かと思ったら彼女は添えるだけ。居合か？　それなら一撃の速さでは、俺のほうが劣るだろうなあ。

それならば、俺は彼女の一撃を受け止め、そのまま斬り返す。

とても単純な作戦である。もう作戦と言うのもおこがましいくらいだよ。まあでも、これでいい。これくらい単純なほうが、やりやすい。

「俺から、行くぜ？」

「どうぞ」

彼女が言い終わるか否かというタイミングで、俺は左手に持った鞘を、思い切り力を込めて投擲した。ん？　一撃を受け止めてからの反撃じゃなかったのだった？　嘘だばーか。

どんなに切れ味の鋭い刀だとしても、あの鞘は砕けやしない。今までどんな敵の攻撃も受け切った鞘だ。言わば最強の盾。これが壊されでもしたら、俺は結構ショック受けるよ？

まあ、そんなわけで俺は走る。妖夢の動きを注視しながら。

妖夢が鞘を弾くか、それとも避けるか。それ次第で次の出方が変わってくる。

さあ、どうする？

ん、若干右に動いた。避けるか？

とか思っていたら、妖夢の姿が消えた。いや、消えたわけじゃない。動き出す瞬間は見えたんだから、彼女は俺の目に留まらないほどの速さで動いた、ということだ。

「それなら」

呟いて、右を向いて刀で身を護るように構える。直後、重い衝撃が刀にぶつかり、腕が痺れて危うく刀を落としそうになる。

「っちい！」

くそ、一撃が重すぎるだろ。これがあの華奢な少女の力？ ふざけんな、と言いたい。しかも目の前の彼女は、そのまま追撃してくる。片手持ちだったのを両手に変え、左から一閃が走る。

当然、受ける。受ける以外にない。まったく、斬り返す余裕がありませんよ。

そしてそのまま、何度も斬り付けられる。僅かに避けるための動きも取らせてくれない、容赦ない攻撃。

やばすぎる。

しかもこの、真剣に俺を睨みつける妖夢の表情。俺、殺されるんじゃない？ っていうくらい怖いです。一瞬でも気を抜いたら、そこで終了だろこれは。

とにかく今は、受けながら少しずつ動くことである。その間にどうにかして隙を見つけられれば。

「あらあら、もう始めているのね」

「そうねえ。そうだ三倉、貴女の大切な桐嗣を応援してみたら？」

「うえ？ お、応援？ い、いいのかな。私なんかが応援して」

いやいやいや、何この女同士の会話。三人して部屋の外に出て観戦してるのか？ そうなら正直邪魔である。

「いいのよ。桐嗣も貴女の応援を期待しているわ。間違いない」

いえいえ、していませんから！ っと危ねえ！ 妖夢、お前もあいつらに一言きつく言ってやれよ！

「そうなの？ でも、桐嗣本気で闘ってないし、応援するまでもない気がするのだけだ」

神宮寺三倉の言葉に、妖夢が反応する。ピクッと揺れ、動きを止める。そして、

「やっぱり、本気じゃないんですか？」

「いや、本気ではあるよ。負けないように。そして、妖夢のことも傷付けたくないわけで、どうしようかと考えることに。」

「本気さ」

「じゃあ、どうして防戦一方なんです？」

「それは君が強い」「ふざけないでください！」

俺の言葉を遮り、妖夢が吠える。

「貴方は、何を考えているんですか？ もしも私に怪我を負わせたくないとか考えているようであれば、怒りますよ」

「じゃあ俺は、怒られるわけだ。いやまあ、傷付けたくないというのは本当だけど、俺が自分の思い通りに動かせないのも事実なんですよ。だから大目に見てくれると嬉しい。」

「いやあ、ちよっとまだ身体が言うことを聞いてくれないだけだから。もうちよっとしたら、動けるはず」

「そう、ですか。なら、私は次の一撃で決めます」

「やれるもんなら、やってみろ」

こんな安い挑発には乗らないだろうけれど、まあ言うだけ言うてやる。

どうせ彼女の一撃は、俺の目で捉えられない動きの中から放たれるものだし、深く考えるまでもない。

しかし、何この俺に好都合の展開。

妖夢が動き出し、俺は一切身動きを取らない。

「いやあ、来るのが一撃だと分かっていると、気が楽だね。きつと彼女のことから、宣言通り本当に一撃しか放ってこないはずだ。」

それにねえ。昨日のあれである程度勘は取り戻しつつあるし、わざわざ妖夢の動きを追う必要はない。というか、こういう闘いは以

前にもあつたしね。

あ、それで思い出した。あの天狗、自分で崇徳上皇すくてんこうという大天狗の子孫とか言っていたなあ。最初あいつを敵だと思っていた頃、本当にやばい強敵が現れたと思ったものである。いやあ、ホント味方でよかったね。

ちなみに当時は崇徳上皇という名前は、歴史の授業でしか知らなかったんだけど、後々調べてみたらなんと、日本三大悪妖怪の一つに数えられている存在だった。

そりゃ強いわけですよー！。

というわけで、そんな奴と一時的に戦闘をしている俺は、その経験を生かし、妖夢に打ち勝ってやろう、という魂胆なのである。

さあ、来いや。俺は、負けるつもりなど更々無いからな。

まあ、そんなこと言って、前回の二の舞とかになったら笑い物だけど。

ほおら、手の力を少し抜いてみたぜー。さあ、来い来い来い来い来い来い。

「来たあああああああああああああああああああ！」
なんかがきいーんとかって効果音が入りそうなぐらいに、大きな音が出た。刀と刀が、交叉していた。

だが、そこで鏢迫り合いをしてどうこう、なんて所で終わりはない。俺はそのまま刀を手放し、バランスを崩した妖夢の腕を取って捻じり上げた。

「つくう！」

妖夢が、苦悶の声を上げる。これで、勝敗は決したようなものかな。まあ、念のため刀を取り上げておくけどね。

「いやあ、さすがに連敗はしたくないと思っていたけれど、意外といけるものだね。ま、あれだ。弾幕ごっこだったら、たぶん俺に勝ち目はなかったか。あとは、何か技でも出されたら、それでも俺の勝つ確率はゼロだっただろうな」

や、ホントだよ。妖夢が本気で大技を出して来るようだったら、

俺は太刀打ちできなかっただろうよ。

やっぱり俺は、普通の人間だからね。少なくとも、負の感情に支配されでもない限りは。

「うー、なんで分かったんですか？」

「ん、勘、かな」

「……そんなあ」

本当に残念そうにしているけれど、俺はそう答えるしかないんだよ。納得できるような回答を出すことは、無理。見えてはいなかったけれど、分かってはいた。でもそれは、未来予知とかそういう類^{たぐい}のものではない。

なんだろうなあ、これは。

まあ、今はそんなことは置いといて。

「じゃあ次は、弾幕ごっこ、しようか」

……。

あれ？ 俺何かおかしいこといったか？ 妖夢が完全にフリーズしてるんですけどー。

おーい、まだ闘いは始まったばかりだぞー。

第七章 対妖夢戦、そして更なる闘いへ 前編（後書き）

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。
誤字脱字などのご指摘もあつたらお願いいたします。

第八章 対妖夢戦、そして更なる闘いへ 後編（前書き）

俺もそろそろ主人公が板についてきたかもしれない。

ちなみに好戦的に見えるのは気のせいだよ。

本来弾幕ごっこをする予定だったのだから、これは当然のことなのだ。

ふっふっふー。

しかし、妖夢以外とも闘うことになるとはねー。

第八章 対妖夢戦、そして更なる闘いへ 後編

弾幕ごつこの結果は、まあ、誰もが予想できるであろう。うむ。

でもあれ、結構善戦したほうだと思つよ。

獄界剣「二百由旬の一閃」、畜趣剣「無為無策の冥罰」、六道剣「一念無量劫」などのスペルカードはすべて防ぎきつたしね。

ただ、最後に使われたものはちよつと、俺には無理だった。いや、本当に最後かも怪しいけれど、とりあえず俺に使ってきたのは、これで最後だ。

餓王剣「餓鬼十王の報い」。これがなあ。絶対ここでもかなり本気を出したんだろうな。ここまでのものとは比べ物にならなかったし。まあ、弾幕を放てるようになったので、収穫はありだ。あとはスペルカード。一応俺も所持することにした。どんなものは秘密である。一応俺の持つ技をカードにしたわけだけど、これで本当に殺傷能力は失われるのかな？

もしそうなら、結構嬉しい。これで誰も殺さずに闘うことも出来るわけだからな。

本当に喜ばしい限りである。うむうむ。

ちなみに弾幕ごつこ後、妖夢は汗かいたのでお風呂に行ってきた、とか言つて去つてしまった。神宮寺三倉は、負けた俺を心配そうにしていたが、約束を破つてはいけないと思つたのか一切近寄つてこない。最後に紫さんと幽々子さんは「まあ当然の結果ね」と言わんばかりの涼しい顔で、にこにこにこにこ。

うーん、やっぱり勝てないよなあ。当然って言えば当然だけど。やばい。負けて悔しいと思つてしまった。なんか、とても新鮮である。

ほら、昔は俺が打ちのめされて負ける、っていうことはなかったからさ。

身近な人が殺されて、俺はその度に負の感情を抱え、それを力に

して闘っていた。あの頃の自分からしたら、今こうしていること自体信じられないだろうな。

あー、くそ。背中の雪が冷たいぜ。

あ、はい。また倒れています。しかも前回同様仰向けで、大の字になって。別に癖になったとかってわけじゃないんだけどね。正直もう、座るのもきついっていうくらいに疲れました。

まあでも、熱くなりすぎた身体を冷やすには丁度いいかな。わー心地いいー。

……はいはい嘘ですよ！ 思いっきり寒いわ！

「桐嗣ー、寒くないの？」

「え？ 紫さん、これが寒くないように見えます？」

「どうかしらね。貴方は結構表情に出さないから分からないわ」

うつわー、笑顔でそんなことを言いますか。どうしよう。

ここは下手に出たほうがいいのかな。自力で起きるのも辛いので起こしてください、とか言っちゃえばいいのかな。俺の中にいる悪魔が、「ユー起こして貰っちゃいなヨー」とか囁いていらっしやる気がしないでもない。なんで悪魔なんだ？ 天使でもいいじゃないかというか、どちらでもなくていい。

「出来たら起こして貰いたいんですけど、やっぱり女性の手を煩わせるのはよろしくないんですかね？」

「そうねえ、よろしくはないかもね」

「じゃあ、いいです。暫くしたら自分で起きるんで」

「え？ よかったのかしら？ 折角、よろしくはないけれど、それでも起きたければ起こしてあげようと思っていたのに」

嘔吐きやがれとかって叫びたい。君が好きだと叫びたい。いや、嘘だけど。ほらこれで俺も紫さんも嘔吐き合って、相殺。万事解決である。と言っても俺の中だけでなので、あまり意味がない気がする。たぶん、気の所為ではない。

「ああ、だるい」

お、これ新たな口癖としていいんじゃないかな。溜め息よりはず

つとマシだと思う。まあ、実際に使うかどうかは別として。

とりあえず、動かすだけで悲鳴を上げそうな程に疲れ果てた腕を使って、「ふっ！」とかつて気合を入れて起き上がる。こうでもしないと、起き上がるのも一苦労なくらいに痛めつけてくれた妖夢を怨むべきかどうかは、今は考えないでおこう。

というか今そんなこと考えたら、確実に怨むに決まっている。まあ、一時的にはあるけれど。

いやしかし、本当に悔しい。ごっこであっても、闘いは闘いだ。それに負けて、悔しくて。戦績としては、一勝一敗で引き分けだけど、本来の実力を持ってすれば、俺はどちらでも勝つことが出来なかったんじゃないのか？ 少なくとも、相手を斬ることに躊躇いがあつた今の俺では、ね。

つまり、俺の一勝も大して喜ばしいものじゃないんだよなあ。勝ちちは勝ち、と手放して喜べない。負けは負け、と潔く諦め切れるのにねえ。悔しさはあれど、自分の実力不足だから、とちゃんと割り切れるというのに。

「はあ」

結局は溜め息が漏れる。

ああ、今は遠くから聞こえる飛行機のエンジン音みたいな音とか、どうでもいい。本当に、どうでもいい？ あれ？ 何この音。幻想郷にそんなものあるの？

いやいやいや、常識的に考えてないだろう。この二日で色々見てきて、一切最先端の技術とかそういうものはこちらにはなく、その上昨日魔理沙と飛んでいたときにだって、鳥以外は見掛けなかった。というかそもそも、幻想郷には空を飛べる連中がいるというのに、飛行機なんて必要ないだろう。

では一体何？

って、音はどんどん近付いて来ているようだし、見ればわか「るぶるおあ！」このところやけに変な奇声を上げてしまっなあ。と、いうか思いつきり突撃されたんですけど。何これ？ 寧ろ抱きつか

れてるのかな、これ。とにかく、突っ込んできた何かと一緒に吹っ飛んで今どうなっているのかいまいち把握できない。

「桐ちゃん久しぶりー!!」

俺に抱きついていて何がそんなことを宣いやがった。俺には出会い頭に口ケツト頭突き食らわして来るような知り合い、いるなあ。いるわ。しかも今ここに。名前は……何だっけ？ いや嘘ですよ天狗の人。覚えていますとも。

「……ああ、久しぶり。崇徳^{かえで}楓」

前章で少し話題に出たからって、こんなにも早く登場するとはなあ。いや、何言っているのかさっぱり分からないけれど。あ、ちなみにフルネームで呼んだのは、読者たちに名前を覚えて貰うためだったりする。あれ、また何言ってるのか分からないぞ俺。やばい、頭がおかしくなったか？

「むっ！ 四年近く会ってなかったのに、何その顔！ 嬉しくなさそう！ それと何でフルネームかな。前みたいに楓、とか楓ちゃん、とか楓ちゃん、とかかつちんって呼んでくれればいいのに！」
いやあ、今ここで君のそのテンションを目の当たりにするとさ、色々やる気が、ね。

「って桐ちゃんボロボロじゃん！ どしたの！？ 誰にやられたのか言ってみて！ あたしが死なすから！」

「ああ、そんな物騒なこと言わんでいいから。これは俺から喧嘩を吹っ掛けて返り討ちにされた。ただそれだけだから。あと楓、俺そんなにいるんな呼び方した覚えないから」

「え、そうだったけ？ まあいいや。でも桐ちゃんから喧嘩なんて、何かあったの？」

「や、無いけどさ。厳密に言う喧嘩でも何でもないし。ただ弾幕ごっこする約束してて、手加減するなって言ったらこの様」

「ふーん、そっか」

おい、自分から聞いたいてなんだ、そのどうでも良さそうな返事は！ しかしこいつ、まったく変わってないな。

焦げ茶色の長い髪を後ろで束ねたポニーテール。どこまでも澄み切った黒い瞳。子どもっぽさの残る人懐っこそうな顔。細身の身体に、丰满な胸。って、あれ。またでかくなっただんじやないかこいつ。てか楓、君は何故あの学校の制服を着ているのかね？ 似合っているけどさ。二年の終わりに転校することになったはずだよ。そうで無くても、卒業して何年経つと思ってるんだ。あれかな。この子ずっと留年してる感じ？ まあ、頭は若干弱い子だからなあ。体育の時間とか、偶に羽出してたし。

あといつまで俺の膝上に座ってるの？ しかも座り方に問題がある。なんで跨ってるのかな。太腿がやばい上に、俺は折角起き上がったのに倒されて、下着が見えそうです。スカート短けえよ！

本当に変わってないぞこいつ。無意識に俺を悩殺して来ようとしてくる。

くそ、人間相手にはもてないのに、それ以外には好かれる体質なのか俺は。

「で、楓は何でここにいるわけ？」

「え？ ああ、文ちゃんあやの取材を手伝ってたら、桐ちゃんの気配を感じてね。文ちゃん置いてすっ飛んで来たの」

「いや、その文ちゃんが何方か存じ上げませんが、置いてきちゃあかんよ」

「ん、大丈夫。ちゃんと私に気付いて追って来てるはずだと思うから」

はずだと思っつてアンタ。もし来なかったらど「楓さーん！」うするんだと言っ前に来たのかな？ しゅばば！ とかって音立てながら着地してきた少女は、黒の短い髪、冬だというのに薄い白のシャツと黒のミニスカートを履いて、更に足には高下駄という格好をしている。

あ、あと手に葉団扇はうちわを持っていて、首にカメラをぶら下げている。「楓さん、仕事手伝ってくれるって言っていたのに、何してるんですかあ！」

頬を膨らませてぶんぶん怒っている文さん。おっと可愛いぞ。

「ああ、ごめんね文ちゃん。でも安心して。文ちゃんの探してた新しい外来人、見つけたから」

「……へ？」「……は？」

俺と文さんは、同時に間の抜けたような声を上げてしまった。どちらがどちらの声かは、ご想像にお任せいたします。

じゃなくて、外来人？ 何それ。ああ、でもたぶん俺のことだろう。と言うとあれかな。幻想郷の外から来た人間とか、そういう意味かな。

なんて思いながら文さんのほうに視線を向ける。するとお互いの視線が絡み合い——ちよつと、目輝かせてるんですけど？

「っどうも初めまして！ 私、新聞記者の射命丸文、と言います！ あの、是非取材をさせてください！ あ、それとこちら、私が発行している文々。^{ぶんぶんまるしんぶん}新聞です。どぞ」

と一気に早口で捲し立てられ、どこから出したのか分からない新聞を渡される。ホントどこから出したの？ その薄着のどこに持ってたの？ ねえ、教えて。

まあ、それは置いといて、名乗ってもらっておいで、自分は何もしないのもあれなのでとりあえず。

「宇條桐嗣です。新聞記者、ですか。うーん、ちよつと待ってもらっていいですか？」

「はい、ちよつとなら」

ということで一ど離れる。楓も膝上から退かして、さつさと立ち上がる。もう疲れてるからどうとかって言ってる場合じゃない。

たぶん、今神宮寺三倉の顔を見ると、鬼の様な形相になっているはず。まずこれを宥め、^{なだ}幽々子さんと紫さんに頼んで、どこかに連れて行ってもらおう。

「しんぐ、いや、ああ、あ、つと三倉！」

おお、俺よく言った。名前で呼ぶことが出来たよ俺。すごくね？
「あ、え？ 何かしら」

「ちょっと長くなりそうだから、先に部屋に戻っててくれ。もしそれが嫌なら、幽々子さんたちと奥行ってる」

と、とりあえず言ってみる。

「もし、どっちも嫌って言ったら？」

「二度とお前とは口を利かない」

これはたぶん効果抜群だろう。

「……分かった。じゃあ、紫たちと部屋で待ってる」

あれ、そうなるの？ まあいいけど。二人も特に異論はないみたいだし。

「しょうがないわね。それじゃあ行きましようか三倉」

先に紫さんが立ちあがり、幽々子さんもそれに倣って腰を上げる。うーん、ほぼ終始無言だなこの人。なんかずっと舟漕いでた気がするけど。

「あ、そうそう」

歩き始めようとしたところで、紫さんがこちらに振り返る。

「もしここでの用が済んだのなら、永遠亭えいえんていか紅魔館こうまかんに行ってみなさい。きつと面白い体験が出来るわ。特に紅魔館には、多くの妖怪たちが住んでいるのだけど、一人だけ人間もいるのよ」

「はあ。まあ、用が済んだらどっちか行きますよ」

とか言っておきながら、用は済んだも同然なので、いつでも行ける。

しかし紅魔館、ねえ。たくさんの妖怪に囲まれた中で生活する人間。一体どんな人だろう。

それを聞いてみようにも、紫さんはあの不気味な空間を通って行ってしまったし。しかもそれに幽々子さんたちも続いている。って何。そこ通るのに抵抗ないの？ 特に神宮寺三倉。あ、また元に戻ってるよ。駄目だな。名前だけで呼ぶのとか、抵抗があり過ぎる。

「ちよつと経ちましたよー」

いやいや、ちよつとっていう時間が分からないから。

「ああ、はいはい。で、何を取材するんです？」

「えーと、ではまず、どうして幻想郷に来たのでしょうか？」

「死に掛けた俺を、紫さんが助けてくれた、らしい」

「らしい？」

文さんが首を傾げる。あ、ちなみに俺が彼女を「文さん」と呼ぶのは、なんとなくである。さっきの言動とかから、いい加減な人っていう印象もあるのだけれど、隙がまったく感じられない。

というか、そこらの奴らより強いだろ彼女。たぶん俺や妖夢じゃ太刀打ちできないぐらいの実力はあるだろうな。

まあ、そういう闘わずして分かるほどの実力を持っているであろう相手を、呼び捨てにするのは気が引けるわけだ。あ、でも楓は別ね。友だちだし。

「俺もよく分からないんですけどね。だって俺、なんとなくですけど死んだ気がしたんですよ。ぶっ飛ぶ感覚もあった気がするし、それで地面に思い切り叩きつけられたような気がする。だから、そのあと紫さんが俺をこっちに連れて来たのであれば、俺は既に霊体なのかもしれないですね」

「うーん、でもそんな感じはしないですよ？」

「うん、あたしも桐ちゃんは生きてると思う」

二人して、俺の死亡説を否定。うーん、でもなあ。實際轢かれた気もするんだよね。あれは何なんだろうねえ。

まあいいや。生きてるならそれでいい、ということにしよう。

「それにしても楓、お前いつからこっちにいたんだ？」

「んー？ 結構最近だよ。まだこっちに來てから半年経ってない気がする」

「へえ、じゃあそれまでどこにいたんだよ。行き倒れたりしてないのかとか、結構心配したんだぞ？」

「……心配？」

ん？ 何故か笑顔が消えて、真顔になりましたよ。どうしたんだろう。

「う、うん、心配した」

「そつか。えへへ、桐ちゃんに心配してもらえようになったかあ。嬉しいなあ」

おっと、にやにやとした笑顔になったぞ。

そういえば、俺がちゃんと楓のことを心配してやったことなんてなかったかもなあ。一応言葉に出さずに、何かしら手伝った記憶はあるけど。主に食事とか。料理下手だもんなあ。

でもさっきの顔は気になるのである。そういえば、魔理沙も似たような顔していた気がするなあ。

なんだろうあれは。

って、気にしてもしょうがないか。

「で、取材の途中いちゃつかないでくれませんか？」

おっと、あまりにも楓が可愛かったので存在を忘れてしまっていたぜ御免なさい、文さん。嘘でい。

「あー、すいません。じゃあ、次何かあります？」

「そうですねー。じゃあ、貴方の持つ能力なんか教えてください」

「……能力ねえ。特にないですよ」

「……は？」

お、意外そうな顔ですな。そんなに俺が能力持ちじゃないのがおかしいのかい？

「それ、本当ですか？」

「ん、たぶんだけど。とりあえず、俺は特殊な能力があると自覚したことがないんで。特殊でも何でもない能力としては、家事全般出来るとか、そんなもんですかね」

「あー、いや。そういうのはいいです」

ですよねー。と思っていたら楓が目を輝かせている。あー、そうか。思い出したなこいつ。

「桐ちゃん！ ご飯作ってよ！」

ほーら、なんの前振りもなく来たよ。これでこそ楓ちゃん。まあ、俺は彼女のこういうところは好きだけどね。いやほら、可愛いじゃん？

どうにかして本作品のヒロインを楓に変更できないものか。楓とらぶらぶな関係を築くための物語なんて、歓迎する他ない。うーん、何を言っているのかさっぱりだね。

「いいけど、どこで？」

「ここで」

はいはい。わかってますよ。これはあれかな。幽々子さんあたりに許可得てやるしかないのかな。まあ、料理自体は好きなので良しとしよう。これでもし妖夢とかが対抗して来て、勝負だ！とか言ってきたらどうしようかな。

いやまあ、受けること自体に問題はないけれど。

「ふっふっふ、聞かせて貰ったわよ今の話」

うわー、どこかの悪役みたいな台詞ですねー。「誰だ！」とか叫びませんよ俺は。まあ、どこから湧いて出てきたのかは分からないから、そこは聞いてもいいかもしれないけれど。

「何ですか紫さん」

「あら、つれないのね。まあいいわ。折角だから、料理対決でもしようか思っただけど、どうかしら？」

あれ、おかしいな。妖夢との料理対決なんかは若干予想していたけれど。

「えーと、誰と誰が？」

「それは秘密。今日の夕飯時までには参加者を揃えるわ」

「は？」

「ふふふ、そんな馬鹿面してないで、誰にも負けないような素晴らしい料理を作るための準備でもしてなさい。じゃあねー」

とか言って、手を振りながら消えやがった。おいおいおい、これはちょっと想定外の展開だぞ。

「むふー、面白そうですねー」

なんて宣っているブン屋は放っておいて、さてどうするか。もう取材どうこう言っている場合じゃないぞ。というか、これですでに新聞のネタになる気がする。

「桐たんなら余裕だよね」

「そーだーねー」

たんっておい。つい適当な返事してしまったじゃないか。あー、
どうしよう。

本当に困ったぞ。

ていうか、これがあの、更なる闘いと言っやつなのかなあ。うむ、
意味わからん。

第八章 対妖夢戦、そして更なる闘いへ 後編（後書き）

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。
誤字脱字などのご指摘もあつたらお願いいたします。

第九章 幻想郷の炎の料理人（前書き）

料理、それは男の浪漫！

いや、まあ嘘だけどね。

第九章 幻想郷の炎の料理人

えー、いきなりですが、紫さんが集めてきたメンバーを簡単にご紹介いたします。

まずは東風谷早苗ちゃん。霊夢みたいな袖なし巫女装束（色が青と白バージョン）を着ている緑髪少女。あ、あと蛙と蛇の髪飾りが印象的。なんと彼女も、外から来た人だそうで。後でいろいろお話してみたい限りである。

続いて鈴仙・優曇華院・イナバちゃん。本名はレイセン。ブレザーを着たウサ耳少女である。なんと彼女、元月の住人だそうで。つまり宇宙人だ！ いやあ、これは吃驚である。ちなみに今は永遠亭というところに住んでいるらしい。どこかで聞いた場所だなあ、と想着ていたら、紫さんが「行ってみたらどう？」とか言ってた場所の一つだった。あとでどんな場所なのか聞いてみたい。あ、あと彼女には様々な呼称があるらしいのだけど、俺は敢えて少数派の鈴仙を採用した。

三人目は因幡てゐちゃん。本当はちゃんを付けるなど言語道断とも言われそうな程年上らしい。しかも彼女は、鈴仙同様ウサ耳があるが月産（今造った造語）ではなく地球産らしい（これも造語）。鈴仙のサポートらしいが、耳を引っ張ったりスカート捲ったりと、悪戯ばかりしているのが目立つ。これはあれかな。他の相手を油断させるのと、俺に鈴仙の下着を見せて動揺させる作戦だろうか。

だがしかし！ 俺はそんなことでは動揺しないのさ！

……動揺はしないけれどさあ。すごい、目のやり場に困るというか何というか。まあ、いいや。それは置いて次の人紹介するよ。とは言っても、新規はこれぐらいなんだよね。

あとは霊夢（ほら、もう会ったよ。別れた翌日とかどういうことちゃ）、魔理沙の二人。が来ているくらい。

ちなみに料理対決の参加者は、今言った五人と俺、妖夢、文さん

（彼女は参加する気なかったみたいだけれど）の合計八人。ただ、八人だとさすがに多いので、二人一組のペアを組んで対決するらしい。

まあ、鈴仙とてゐのペアは勿論分かり切っているけど、残りはどうするのかな。

これはやっぱり各自好きな相手と組んでいいのか？ もしそうなら、妖夢辺りがベストか。って、何本気で勝ちに行こうとしてるんだ、という突っ込みが入りそうな所申し訳ない。

この勝負、どうしても負けるわけにはいかないのだ。

何せ、この対決の主催者である紫さんは、敗者には二度とここにいるメンバーに会いたくなくなるような罰ゲームを与えとか宣いやがりましてね。具体的にはどんなものなのか一切不明だけど、この発言のときの顔が、あまりにも素敵な笑顔だったからなあ。

絶対恐ろしいことを考えていらっしやるはずだ。

あとで早苗ちゃんや鈴仙とお喋りする暇なんて与えて貰えないかもしれない。それは困る。なんとなくだけど。

だから俺は本気で勝ちに行くんだ！ まあ、自分で言ってるわけわからんけどね。なんとなくのためだぜ？ 負けてもいいじゃないか。会いたくなくなるだけで、会えなくなるわけでもないし。

ほら、俺に羞恥心とかないから。嘘だけど。

やっぱり嫌なので全力で行きますよ。当然です。初心を貫き通しましょう。

ということで妖夢にお誘いをば。

妖夢はどこかなー、と思いながらキョロキョロしてたらすぐに見つかった。というか広い部屋に全員集まっているのだから、見つかって当然である。

「おーい妖夢ー」

霊夢や魔理沙と話をしていた妖夢は、俺のほうを見て笑顔で手を振ってくれた。やばい可愛い。

「何ですかー？」

言いながらこっちに寄って来てくれるし。最高である。

「いやな、もし良かったら今回の対決、一緒に組まないかとお誘いに」

「それは嫌です」

すっぱりですか。即答ですか。

「折角なので、ここでも私たちは敵同士で行こうと思っんですよ」

「……さいですか」

そんな笑顔で言われたらなあ。誰だって頷くしかないだろ。

「じゃあ霊夢、は魔理沙とだもんな」

「ええ、ごめんね。もう決めちゃったから」

となると、俺と妖夢は、早苗ちゃんか文さんと組むことになるわけだ。これはあれだな。早苗ちゃんと一緒になったほうが有利そうだな。

そうと決まれば善は急げだ！

「早苗ちゃん！ 一緒にやろ——」「早苗さん一緒に組みましょう」
ああああああああああああああああああああああああああああ！
妖夢に先越された！

「はい、いいですよ」

しかもにつこり笑顔で了承。

もう嫌だ。

「あやや、これは私と桐嗣さんのペアになりますね」

「……ええ、そうですね」

「？ 何でそんなに残念そうなんですか？」

「何でもありません。えっと、文さんは料理出来ます？」

「失敬な！ これでも一人暮らし歴長いんですよ！ 自炊ぐらいお茶の子さいさいです！」

「ああ、それはよかった」

これで足手纏いと言うことはないだろう。

とか思っているところに、紫さんがやって来た。しかもマイク持つて。え？ あれ使えるの？

「ちよつと皆、勝手にペア作らないように」

うわあ、室内に声が響いてるよ。てか何今の発言。

「ペアはこちらでもう作つてあるから、それに従うこと。ちなみにこれは、私と幽々子が厳正な審査を行ったうえで決めたから、そんなに大差が出ないような組み合わせになっているわ」

本当かよ。あんた達が一番信用ならんわ。

とか思つても口には出しませんけどねー。周りも文句を言いたげな顔はしているけれど、それを口にすることはない。寧ろ、やつぱりそうなるか、みたいに呟いている方が多い。霊夢とか。

「それじゃあ早速発表するわね。Aチーム「霊夢・優曇華ペア」！」

「はあ!？」

いきなり二人がハモつたよ。そんなに予想外だったのかな？

「はい文句は受け付けないわよー。じゃあ次。Bチーム「妖夢・魔理沙ペア」！」

「お、これは案外普通だな」

「そうですね」

今度のペアは何の問題もない様子。てかおい、これじゃあ一回戦敗退なんてしたら、妖夢は俺に不戦勝することになるぞ。あ、いや、違つか。妖夢も負けたら引き分け？ うわー、戦わずして引き分けは嫌だね。

「続いてCチーム「桐嗣・早苗ペア」！」

一瞬、場が静まり返つた。というか、俺もいきなりの出来事に吃驚だ。何それ。早苗ちゃんは、なんとなく料理が出来る印象だったのだけど、これはどういうことだ？

まさか、苦手とか？

「え!？ ちよつと紫！ これは何!？ 桐嗣つて料理上手いんでしょ？ それが早苗と組んだら!」

「はいはい文句は言わないのー。まあ、そんなわけでDチームは「文・てゐペア」よー」

うわー、面倒臭そう。まあいいや。とりあえず早苗ちゃんのこと

行こう。

まあ、皆近くに集まってるからそんな距離ないけど。

「えっと、よろしくね」

「あ、はい。こちらこそよろしく願います」

ぺこりとお辞儀された。そんなに畏まらなくていいのにな。幻想郷ではそういうのってあまりなさそうだし。君は希少種きしょうしゅか！ と叫びたい。

しかしこれは、本当に厳正な審査とやらをしているのか？ 何か作威的なものを感じるんだよなあ。あからさまに、どこか一つのチームを優位に立たせているような。いや、たぶん俺と早苗ちゃんペアだけだね。

「次にルール説明をするわよ。本当はトーナメント制にでもしようかと思っただけで、面倒なので一発勝負にするわ。というか、幽々子と楓以外、そんなに食べれないから」

最後に本音が出やがりましたよボス。誰だよボスって。ボスはボスでありますってか？ そうだよ。ボスはボスなんだよ。ですよねボス！

「審査員は私、幽々子、楓、三倉の四人よ。全部の試食が終了後、一人一組に投票。一位が二組以上出た場合は引き分け。おーけー？」

あ、出た。この仕草が俺的にドストライク。本当にもう可愛い。球根したい。間違えた。なんだ球根って。求婚だろ。まあ、嘘だけだ。

「じゃあ最後に、今回の料理対決のテーマを発表するわね。……今回のテーマはズバリ！ 「シチュー」よ！」

うわあ、極力腹の膨れないものを選んで来たな。

「ってシチューって私作ったことないわよ？」

と霊夢。

「私ですよ」

と鈴仙。

「私もだぜ」「私も」

と魔理沙、妖夢。

「私もないですよー」「てゐもー」

と文さんとてゐ。

あれ？

と、とりあえず、隣の早苗ちゃんにも聞いてみよう。

「早苗ちゃん、シチューを作った経験は？」

「ありますよ？ 諏訪子様がシチュー好きなので良く作りますし」

諏訪子様が誰なのかは置いて、これは本当に酷いな。何なんだこの出来レース。

「うふふ、そんなこともあるとかと、ちゃんとレシピは持って来てるわ。シチューと一口に言っても色んなものがあるから、好きな物を作るといいんじゃないかしら」

紫さん、それでも作ったことのない組VS作ったことのある組じゃあ分が悪すぎますって。

「桐嗣、その顔からして、自分は作ったことあるんだろ？」

「え？ ああ、まあな」

魔理沙が急に話しかけてくるから驚いて素直に答えてしまったじゃないか！

「言っておくけど、私たちは今まで数多くの敵に打ち勝ってきたんだぜ？ それも如何なる逆境も覆してだ。だから今回だって負けはしないぜ！」

いや、ただの料理対決でその発言はどうかと。まあ、やる気があるのはいいけどさ。それに、魔理沙の言いたいことはそうじゃない。「つまり、手は抜くなってことだろ？」

「その通り！」

「はは、大丈夫。元よりそんな気はないさ。紫さんの罰ゲームが怖いしね」

「ん？ ああ、そういえばそんなのあったな」

ふむ。この状況、あまり色々気にする必要はないのかな。霊夢たちも全然困っていないようだし。

本気で彼女たちを叩き潰す方向でいいだろう。

「あ、それから一つ言い忘れたけど、食材は各自適当に調達して来てね。それじゃあスタート！」

……へ？

って固まってる場合じゃない。各自もう動きだしてる。早苗ちゃんだって俺を置いてきぼりにして動いているし。

くっそ！ ふざけんな！

ここまでちゃんとした勝利を収めていない俺は、いい加減勝ちにいくぞ！

それでは、後半に続く！

ということの後半開始です。

もう料理も出来て、試食も終わってます。

前にも言ったけど、これは料理漫画でも何でもないんだよ。だからここで調理の描写とか必要ないと思うんだ。読者も望んでいないだろ？

フライパン捌きとか、調理の工夫とか、そういうのいらないだろう？だから俺は意図的にそういうところを省いたんだよ。作者も書くの面倒だろうしさ。一石二鳥じゃないか。

って作者ってなんだよ。意味わからん。何の作者だ？ 料理漫画？ いやいやないない。

「それじゃあ、投票結果が出たので、発表するわね」

紫さんのその言葉に、皆固唾を飲んで発表を待つ。

「Aチーム0票、Bチーム1票」

その時点で、霊夢たちは項垂れる。霊夢組は勿論、魔理沙組も負けは確定したのだ。

ただ、妖夢はまだ真剣に紫さんのほうを見ている。俺と早苗ちゃんの得票数次第で、俺と妖夢の個人的な闘いに決着が付くかも知れないから。

「この時点で霊夢たちは負け決定ね。それじゃあ勝者を発表するわ。」

得票数2で、Cチームの勝利！」

うお、勝った！ 勝った勝った！

「勝ったぞおおおおおおおおおおおおおお！」

つい叫んでしまったが、本当に嬉しいのだからしょうがない。ただ、やっぱり出来レースっぽいからなあ。その分控えめに叫びました。そういえば、三倉と楓がいる時点で俺に投票するのは目に見えてるんだよな。やばい、今更ながら叫んだこと後悔。というか、二人以外投票してくれてないんじゃないか？

「では勝者の二人には、それぞれプレゼントを与えるわ」

そう言っただけで、俺と早苗ちゃんにそれぞれ、一枚の封筒を手渡してきた。

「開けていいんですか？」

「ええ、どうぞ」

紫さんが笑みを浮かべてそう仰るので、素直に開けることにした。しかし今の笑顔、背筋が凍るほどに怖かったんですが。なんだろうね。

まあ、いいや。とりあえず封筒開けて、中から一枚の紙を取り出して、と。何々、何か文字が書いてある。俺には解読不能の文字ではなく、しっかりと漢字にはルビまで振られている。

「紅魔館七泊八日ペアチケット？」

あ、しかも下のほうに、相手は三倉限定と書いてある。ん？ これは何？

「私のほうも同じものが入ってました」

と早苗ちゃん。とりあえずお互いのを交換して、たぶんこちらにも限定されている相手が書いてあるだろうから、見てみる。

「優曇華限定」

「ふえ！？」

いきなり名前を呼ばれて驚いているねウサギちゃん！ 「冗談はさておき、何これ。」

「もしかして、この四人で紅魔館に行け、ということですか？」

もしかしなくてもそうだろうけれど、敢えて聞いてみる。

「その通りよ。言っておくけど、各方面に許可は得ているから、今更拒否権はないわよ」

「いやいやいや、各方面って行く側には許可得てないでしょ。ってそれは必要ないのか。そうですよねー」

「ちょちょ、ちょっと待ってくださって！」

と食い下がるのは鈴仙。

「私はお師匠様の手伝いを！」

「偶には休暇を与えるのもいいかしら、と言っていたわ」

「私も、信仰を！」

今度は早苗ちゃん。

「早苗はいつも頑張ってるし、一週間くらいいいわよ、と二人から何それ。完全包囲網じゃないか。そして俺は、特に抗う理由がない。元々行ってみたらと言われていたし、その人間にも興味があったし。」

ただ問題が一つあって。

「これ、何時からですか？」

その質問に、鈴仙と早苗ちゃんもこっちを見た。二人ともそれを聞くの忘れてたね。結構重要なことなのに。まあ、俺は大体予想付いてるけどね。紫さんは、満面の笑みでこっちを見ているし、その通りなんだろうなあ。

「勿論、今日からよ」

ほーらね。もう日も暮れているというのにねえ。時間で言つと、午後七時を回ったくらいだろう。

「じゃあ、ちなみに、断ったら？」

「大丈夫、強制送還するから」

と紫さんが宣った瞬間、俺は落ちた。

いや、何の比喻とかでも何でもなく。いつも紫さんが使ってるあれかな。しかしいきなりこれはないだろう。まだ妖夢や幽々子さんたちにお別れ言っていない。楓だって、久しぶりに会ったのにまだ全

然話出来てない。霊夢と魔理沙も然り。てゐは……まあいいや。

とりあえず俺は、穴が閉じる前に叫んでおこう。

「またあいましょおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお！」

第九章 幻想郷の炎の料理人（後書き）

ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。
誤字脱字などのご指摘もあつたらお願いいたします。

番外編〈バレンタイン・i・fストーリー〉（前書き）

この物語は、本編とは一切関係のない、もしもの話。
もしも皆が、桐嗣のことを好きだったら、バレンタインはどんな
日になるのか。

そんなことを考えながら、書いてみました。
結構急ピッチだったので、それほど良い出来ではないですが、読
んで頂けると嬉しいです。

ちなみに、公開期間は二週間を予定していましたが、どうやら削
除せずに進みそうです。

番外編くバレンタインifストーリーく

序章

これから起こる出来事は、俺が幻想郷^{げんそうきょう}に来て一月余りが経過して、曆上^{こよみじょう}で言うところと二月十四日の出来事だ。

当然、この日がバレンタインだということは承知の上だし、俺が幻想郷で出会った相手はほぼ全員女性だということも考慮しているつもりだ。

だけど、こちらにまでそんな習慣があるとは思ってもみなかった。いや、こちら側のバレンタインは、少し異なるか。って、そんなことはどうでもいい。

ホント、今日は人生でも一位二位を争うほどの厄日だよ。ある意味、ね。

これも全部、きっとあの人の仕業なんだろうなあ。

あ、ちなみに今回、俺の語りは殆ど^{ほと}ないよ。たぶん。

第一章 博麗霊夢の場合

一昨日、紫^{むかし}がこんなことを言っていた。

「そういえば明後日はバレンタインデーね」

「は？ 何よそれ」

バレンタインって何？ 外の有名人の名前から。で、その人の誕生日とか。強^{あなが}ち間違っってはなさそうだけど。

「日本では、この日に意中の男性にチョコレートを贈るという習慣があるのよ」

「チョコレートって、あの茶色くて甘いやつよね」

「あら、知ってるの？」

「流石にそれくらいは。というか、アンタが前に持って来たじゃない

い」

そうだったかしら？ とかわざとらしく言う紫には腹が立つわ。

まあ、それは良いとして、

「で、何でそれを私に言うわけ？」

「勿論、桐嗣きりつぐにあげる為よ」

……桐嗣に？

え、だって意中の人って、好きな人ってことでしょ？ でも私は別に好きでも何でもない。筈。いや、どちらかというと好きなほうかもしれないけれど、だからと言ってそれは友達として、であって！
「ほら、取り乱さないの。貴女、自分では気付いてないみたいだけど、桐嗣がいると良く彼のことはかり見ているわよ？ それと、彼がいないと彼のことがばかり話すしね」

「う、嘘」

まったくそんな自覚はない。というか、そんなにたくさん彼のことを見ていた覚えがない。たぶん。

でも、彼のことを思い浮かべると、色んな表情が出てくる。そんなに彼と一緒に過ごした時間は、長くないはずなのに。なんでこんなにものはつきりと、彼のことを思い返せるのかしら。

あれ？ もしかして私……。

「ふふ、そろそろ自覚したかしら？」

私は、頷くしかなかった。

そんなことがあつて、私は一昨日の夜からチョコレート作りに没頭していた。

本当に遺憾ではあるけれど、たぶん好きなのだからしょうがない。彼には三倉さくらがいるし、本当はこんなことするべきじゃないのは分かっているけど。

紫が全部いけないのよ。自覚させるから。その上、奪っちゃえばいいとか抜かすから。

ああ、もう！ お金もないというのに、たくさん材料買い漁って、

意外と簡単に出来たからって調子に乗って色んな工夫をしてしまった自分が愚かしいわ。

最初は大きなハート型のチョコを作るだけにしていた。けれど、それだけじゃあどこか物足りない気がして、今度は中身が空洞くうどうになっている物を作って、中に小さなハート型のチョコを沢山詰め込んでやった。

当然そこまでの後、何でここまでやってるのかと、本気で思ってたわ。そのおかげで材料は一切残っていないし。

あ、あと、紫が「I love you」ってホワイトチョコで書く効果大よ」なんて言うから、外殻のチョコにでかかと書いてしまったわ。

なんて言う意味なのかは知らないけれど。でも英語なのは分かるわ。レミリアに少し教えて貰ったことがあるし。“I”が私で、“You”が貴方。だったかしら。でも文法云々はまだ全然分かってないし、“Love”という単語の意味も分からないから、結局どう頑張っても分からないわ。

まあでも、好きな人にあげて効果大というのだから、恐らくそういう意味なのよね。書いた後に気付いたわ。

ここで激しく後悔。きつと桐嗣は、見た瞬間分かるはず。というか、あげた時点で私から告白しているようなものなのよね。これって公開処刑？ 彼が今いるのは、紅魔館のはず。

つまり、彼と二人きりになって渡すなんて、難しいわ。

どうしよう。あげるの止めようかな。どうせ、あいつは私のことをそういう対象として見てないだろうし。あげるだけ無駄な気がする。

寧ろ自分で食べたほうが良いんじゃないかしら。

とか思いながら、例の文字を見てしまった。

「これを自分で食べるなんて、それこそ愚の骨頂じゃないの」
もう良いわ。

持って行ってやる。そしてちゃんと返事を聞こう。

それで、また明日から友達よ。それで良いじゃない。何の不都合もないわ。

そうと決まったら、あとは包装して出発よ！

第二章 霧雨魔理沙の場合

そういえば明日はバレンタインデーとかいう日だったな。なんてことを、パチュリーから本を借りた帰りに思った。

何故私が知っているかと言うと、以前早苗さなえから外のことを教えてもらったときに、バレンタインデーのことも教わったのだ。

本来は好きな異性にチョコレートあげるものらしいが、今は特別好きな相手ではなくても、友達の証としてという意味であげるのもありだそうだ。その場合、義理チョコなんて言われていて、人によつては知り合いの殆んどに配る者もいるらしい。

ちなみにそのとき、早苗には好きな人はいたのか聞いてみた。すると「いたらこっちに来てないですよ」と笑って返された。まあ、当然と言えば当然だよな。

それにしても、何故そんなことを思っただろうなあ。

あげる相手なんて、大していないのに。

うーん、どんなに考えても香霖こうりんと桐嗣こうしぐらいなんだよなあ。

でも香霖にあげるのはどこか抵抗があるし、桐嗣は三倉かえでと楓からは確実に貰えるだろうからあげてもしょうがない気もする。

ってそうか。桐嗣から分けて貰えたら良いわけだ。何か桐嗣はたくさん貰える気がする。紫が霊夢や妖夢ようむたちを嫉けしかけて、作らせる。有り得るな。

ああ、でも、これだと本命ばかりなんだよな。流石にそれを奪うのは、気が引ける。さて、どうしたものか。

折角だから作ってみようかな。今後私も好きな相手が出来たら、作ってあげたくなるかも知れないからな。まあ、たぶんそれはないだろうけどな！ 念のためってやつだ。

しかし材料がないのが問題だ。
さてどうしたものか。

やっぱり面倒だから食べる側に回ろうかな。一つ重要なことを思い出したし。

よし、明日は鰻腹食^{たのぶく}うぜ！

第三章 魂魄妖夢の場合

幽々子様^{ゆい}から聞かされた、バレンタインデー。

この日のために、少しずつチョコレート作りの練習を重ねてきたけれど、果たして桐嗣さんは受け取ってくれるだろうか。

というか、幽々子様も幽々子様です。私の気持ちを知りながら、この日の存在を教えるだなんて。

その上「何もせずに諦めるなんて、許さないんだから」なんて言うから、頑張るしかないじゃないですか。

前に桐嗣さんが、人魂を見て美味しそうって言っていたから、それを模^もした形の物を作ってしまったけれど、本当はハートのほうが良かったかな？

でも、それだと普通過ぎる。周りに比べて私は若干地味だと見られていたみたいだし、ここでインパクトのある物を作ったほうが、良い気がする。たぶんですけど。

ということで人魂。

気に入ってくれるかな？ それより、私の気持ちに気付いてくれるだろうか。

もし、何のリアクションもなかったら、なんて思うと怖くてしょうがない。桐嗣さんのことだから、そんなことはないと分かっているのに。

ああ、彼を好きだと自覚してからと言うものの、胸が苦しくて仕方ない。

返事を聞けば、少しはすっきりするんでしょうか？

第四章 東風谷早苗の場合

私の手には今、一つのチョコレートがある。

当然、ちゃんとラッピングも施してあって、見栄えも抜群だと自分でも思う。

加奈子様たちが味見してくれたけど、味の方も申し分ないと言われた。当然私だって食べたけど、本当に自分でも吃驚するぐらい美味しく出来ていた。

でもこれ、誰に渡せばいいのかな。

いや、渡す候補として挙げられるのは一人しかいないのだから、その人に渡せば良いんだけどね。

でもなあ。こんなに思い切って作っちゃって、本命と思われたらどうしよう。ううん、実際本命だから、思われて良いはず。良い、はず。

「……でも、ライバル多過ぎだつてば」

そりゃあ、彼は本当に良い人だと思うけど、なんでここまでもてちゃうかな。

一応幻想郷の人間としては、一番長い付き合いだけど、そんなの関係ないから。

というか、良く考えてみたら紅魔館のメイド長が一番長い。同じ感じで、人外だじんがいとあの吸血鬼きゅうけつきと、門番。図書館のほうは、利用したことがないって言ってたはずだし、そんなに接していないかな？

もし接してたら、ライバルが増えているかもしれない。

ああ、もしこれでメイド長も吸血鬼も彼に惚れてたらどうしよう。本当に困る。

そう思ったところで、自分がかかなりマイナス思考に陥っているんじゃないか、という疑念を抱き始めた。

うん、遅すぎる。

「しっかりしろ、早苗。お前はやれば出来る子だ！」

こんな自己暗示でも、しないよりはマシだ。本当に。

「良し！ 当たって砕けるで行きましょう！」

若干まだ後ろ向きではあるけれど、何とかなるだろう。私だって、異変を解決できるぐらいの能力はあるのだから、大丈夫。のはず。

第五章 崇徳楓の場合

「ちよっこれーと、ちよっこれーと、ちよこれーとーはふんふんふん」

「期限良いですね、楓さん」

文ちゃん、そりや当り前だよ。待ちに待ったバレンタイン。この日のために、チョコレート作りだけは一生懸命頑張ったんだから！「ふっふっふー。桐ちゃんのためのチョコレート作り。これが楽しくないわけがないのよ！」

「うわー、本当に好きなんですネ。彼のこと」

当たり前よ。幻想郷に来る前からずっと好きだったんだから。

そつえば、あの時の返事まだ聞いてないな。

まあ、これを渡せばどちらにせよ返事はもらえるものね。気にしない気にしない。

でもやつぱり、神宮寺三倉の存在は大きいよね。彼女の真実を知ったら、彼はきつと彼女を誰よりも大事にしてしまうから。

「ふう。恋する乙女は大変ぜよ」

「あやー、何言っているのかさっぱりです」

大丈夫、あたしもだから。

第六章 八雲紫の場合

おはろー。皆のゆかりんよ。

え？ 私の出番はないはずだろ？ いいえ、あります。

だって私も桐嗣にチョコあげたいもん！

誰よりも美味しいチョコ作って、桐嗣を虜にして見せるわ。ふふふ、楽しそう。

「ねー、藍ー」

「え？ 何がですか？」

こういうちよつと空気読めてない感じが良いのよ。藍可愛いわー。もふもふしたい。でも昨日やったから一週間禁止よ。あー、もういやー。

「チョコ作るの面倒臭くなってきた」

「早すぎやしません？」

うーん、たぶん気のせいよ。たぶん。

まだ材料を並べただけだけど。

でも今考えてみたら、彼を虜にしてその後どうするのよ。別には私は、彼をそういう対象として見ていないわよ？

ええ、本当に。

というか、もしそういうふうに見てるなら、紅魔館に行かせぬわ！ ってなるわ。

だから私は彼をなんとも思っていないのよ。

「よし、やっぱり止めましょう！」

そう宣言すると、隣の藍は返事をすることなく、ただ項垂れるだけだった。

嘘よ。ちゃんと作るだけ作るわよ。

ただ、私からの贈り物にするかどうかは別として。

うふふ、桐嗣、楽しみにしてなさい。

第七章 神宮寺三倉の場合

これからは咲夜のことを、先生と呼ぼう。

咲夜先生でも可。

彼女にチョコレート作りを教わってすぐ、自分でも簡単に作れてしまったわ。私は今まで一度も料理とかしたことないのに。

最初から彼女に聞いておけばよかった。

昨日、一人で散々材料を無駄遣いしてしまったのだから。でも塩と砂糖を間違えるのって良くあることよね？ それと同じようなミスしかしてないわ。たぶん。

うーん、早く食べさせてあげたい。折角近くにいっても良くなったのだから、私自ら。

いや、流石にそれは嫌われるかしら。そういうの好きそうには見えないもの。本当なら「はい、あーん」みたいなほしい。したい！好きな相手にそういうこととしてあげたくなるのは、自然的なものよ！人なら誰もが！って私はもう人じゃないのよ。落ち着きなさい。落ち着け！

そもそも、私からのチョコを受け取ってくれるかすら怪しいわ。彼はまだ、私のことを完全に赦したわけじゃないみたいだし。はあ。

出来ることなら過去に戻って、すべてをやり直したい。彼の傍で、ずっと彼の味方であり続けたい。そうすることを、彼が認めてくれる存在でありたい。

「……まあ、無理か」

「また、諦めてるんですか？」

はっと顔を上げると、咲夜がいた。いや、咲夜先生だったわ。というかいつの間にか私、俯いていたみたいね。両手でチョコの入った包みを持って。

咲夜先生は、私を見て凄く呆れているみたいね。

「貴女は、彼のことが好きなんでしょう？　なら諦めずに、思い続ければ良いじゃない。というのは、既に何回も言っているのだけど、忘れたのかしら？」

「……ううん、覚えているわ」

「なら、どうすればいいか分かるでしょう」

でも私は、彼に愛される資格も無いのよ。今更だけど。彼の優しさに触れて、彼を好きになつて。

「辛いときは、私に言ってくださいな。話し相手くらいには、なれるから」

この子は、本当に良い子だ。私なんかのために、時間を割いてくれる。彼より年下だというのに、本当にしつかりとしている。

「ありがとう」

「そう、その顔よ。その顔で彼に近付けば、少しは気も許してくれるはず」

どんな、顔なのかな。分からないけど、マイナスに考えていては駄目だ。いつかは想いが伝わると信じて。いつかは報われると信じて。

私は、彼のために出来ることをすれば良い。

認めてもらうために。

愛してもらうために。

まだまだ時間はあるのだから。この幻想郷で、彼と共に、いるために。

第八章 宇條桐嗣の場合

「ちょっと！ 私が先に来たんだから私が先でしょ！」↑霊夢。

「あら、来ていた、という意味では私が先よ」↑紫さん。

「順番なんて関係ないです！ 私が先に渡します！ 早い者勝ちなので！」↑妖夢。

「じゃあ私が行きますよ！」↑早苗ちゃん。

「違う！ これは桐たんへの想いが強い人から渡せるの！ つまり

ここは私の」↑楓。

「お、想いなら私だつて負けてないわ！」↑三倉。

「もーめんどくさいから全部私が貰うぜ？」↑魔理沙。

「あんたは引っ込んでろ！」的な突っ込みを全員からされる魔理沙。いや、ホント君は何故ここにいるのか。俺がこんなにチヨコを貰えると確信して、集り^{たか}に来たのか？

そうだとしたら、中々勘の鋭い子である。末恐ろしい子！ 勿論嘘であるが。

てかそんなことはどうでも良いんだよ。何だよこの状況。俺いつからこんなにもててたの？ 楓と三倉以外は無いと思ってたぞ俺。そして一番驚いたのが紫さん。アンタは絶対楽しんでるだけだろう。

あ、紫さんと目が合った。ほら、めっちゃ笑顔やん。俺争奪戦に参加してそんなに楽しいか。

しかし霊夢も本当に意外だな。そんな素振り一回も見せてないぞ。たぶん。俺が気付いていないだけかもしれないけど。

まあ、そんなことは置いて、今はこの場を收拾しうじすることが先決だな。

「おい、その女ども落ち着け」

と、俺のキャラに合わない発言を試してみる。当然皆、驚いて止まってくれる。ほーら、これで良いんだ。まあ、魔理沙まで俺に注目してるのはどうかと思うが。しかもすぐに気付いたのか「お前も大変だな」みたいな視線を送ってくる。止めてくれ。悲しくなってきた。

「とりあえず、全員受け取る。返事は受け取り終えた後、この場でしてやる。以上！」

そのあと若干ざわめきがあったものの、滞りなくチョコの受け渡しは終了した。

さて。あとは返事をするだけ、か。

あー、何でこんなことになったかなあ。

終章

二月十五日。

バレンタインデーから一夜が明けた。

俺は紅魔館で与えられた自室から出て、レミリアの部屋に向かう。

何故かって？ それは勿論、説教をしてやるためだ。すべての元凶は彼女だということ。そして昨日、更に駄目押しとしてふざけた発言をしていた。

その発言は、昨日俺が皆に返事をしている最中に発せられた。もういつの間に来てたんだよ。とか思ってる間もなかった。

俺はまだ、誰かを特別な相手と想えない。それが、俺のあの場に
いる皆への返事だった。

当然、紫さんと魔理沙は除外だけど。

そこに、レミリアがやってきて。

「なら、誰にでもチャンスがあるということね。これからは各自、
猛アタックすれば良いんじゃないかしら？ 題して、桐嗣陥落大作
戦！」

何だよそれ。ふざけてんのか。という突っ込みを入れようと思っ
た矢先、紫さんがそれに乗って、

「それ面白そうね。桐嗣は、私が遊んでいると思っているようだけ
ど、私はいたって本気だし」

笑いながら言うな。嘘だってバレバレだ。

なのに、霊夢たちは皆、紫さんの言葉を本気にしたのだ。

まあ、その場はそこで解散になったけどさ。

ああ面倒なことになった。

これから俺は、紅魔館から出るの止めようかな。

なんてことがあったから。俺はレミリアに説教するわけだ。

あ、ちなみにチョコはその日のうちに全部頂きました。美味かつ
たです。

楓のはちょっと心配だったけど、文さんが一緒にいたらしく、そ
のおかげで大丈夫だったのかな？ それとも愛の力？ うーん、流
石にそれはないか。

まあそれはともかく、今はレミリアだ。ちょっと今回のは度が過
ぎる。今までも結構酷いのがあったけど、今回は他人を巻き込み過

ぎだ。

さて、部屋の前に到着したし、後は扉をノックして、って待てよ。そろそろあいつ寝る時間じゃないのか？

うーん、まあ良いか。まだ日は昇ってないし。

てなわけでレッツノック。

「誰？」

「俺だ俺」

「俺俺詐欺？」

何で知ってるんだよ。

「違う。桐嗣だ」

「ふふ、分かってるわよ。鍵なら開いてるから、どうぞ」

なら最初から言えってんだ。これも含めて説教してやろうかな。なんて思いながら、大きな扉を開く。毎度思うが重い。

ギリギリ入れるくらいの隙間を開けて、そこから入ってやる。いやー、力がないのだよ俺ってば。嘘であるけど。

「で、何の用？」

「ふおお！」

うあ、変な声が出てしまった。でもしょうがない。部屋に入ったら目の前にレミリアがいたのだから。

「驚き過ぎよ？ 傷付いちゃうわ、くすん」

「いやいやいや。まあそんなことはどうでもよくて、今回は話があったて来たんだ」

「話？ それなら私もあるけど」

「ん？ そうなのか？ ああ、ならお前からでいいぞ」

そう言えばまだ、寝間着に着替えてないんだなんて思いながら、彼女の見た目相応の幼い容貌を見る。改めて見てみると、可愛いな。これで俺より年上とは思えない。

まあ、だからいつも、妹のように接してしまうのだけだ。かなりの実力者だと分かっているにしても、この見た目とか、普段の行動とか見ていると、どうもねえ。

「じゃあ、遠慮なく。……えい！」

とか言って、後ろで組んでいた手を、俺に向かって突き出してきた。っておい！ 何々？ 俺を殺す気？ 殺気など感じられなかったけど！？

「うー、何ビビってんのよ。そんなに私から貰えるのが、嬉しいの？ それとも、逆かしら？」

ええ、いやあ、どちらでもありません。本当にごめんなさい。ただ単純に殺されるんじゃないかとビビってました。

良く見てみれば、両手で赤い包みを持っていた。平べったい、ハートの形をした包み。金色のリボンも付いている。

ああ、なんとなく分かった。レミリアが何を考えて、今回の事件（と呼べるかは分からないけど）を引き起こした理由が。

でもたぶん、これには色んな人の協力もあっただろうな。恐らく紫さんもその一人だ。あとは幽々子さん、文さんもしかしたらその一人かもしれない。

しかしそれで考えてみると、魔理沙。あいつだけがまったくもって無関係だったなあ。一体何のためにいたのか。さっぱりだ。

「で、受け取ってくれるの？ くないの？」

不安そうに、俺を見上げる少女が、そこにいた。

「……たく、いつからお前は、この物語のヒロインになったんだよ」

「い、いいでしょ！？ 私だって、……なんだから」

聞こえねえって。まあ、なんて言ってるのかぐらいは、分かるけどさ。

「まあ、そうだな。一ヶ月近くここで暮らして来て分かったけど、俺は結構、お前のこと気に入ってる」

これは、紛れもない事実。恋愛の対象として見れるかは別として「ただ、ごめんな。やっぱり妹とか、そういうふうにはしか見れないんだわ」

「……うん」

「でも、本当にレミリアの気持ちは、嬉しいから。受け取るよ」

そつと、差し出されたままの包みを、受け取った。

「それでだな」

「ん？」

「もし良かったら何だが、これから俺を想ってくれるなら、想っててもらいたい」

「……え？」

「そう思えるくらいには、俺もお前のことが好きなんだよ」
今はこれくらいにしか思えない。

でも俺は、彼女に惹かれている部分があるんだ。だから、俺を想っててもらいたい。

本当に身勝手な話ではあるけど、本気でそう思っている。

「駄目、かな？」

「……駄目なわけ、ないじゃない」

目の前の小さな女の子は、そう言って微笑んでいた。

番外編「バレンタインifストーリー」(後書き)

まあ、なんだかんだでレミリアと一緒にしてみたかった、というのがこのSSを書いた切っ掛けですね。

桜桐記とは別の作品として書いても良かったんですけど、面倒だった、なんてことはなく。

ええ敢えて理由は言いませんけどね。

てなわけで、ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいです。

誤字脱字などのご指摘もあつたらお願いいたします。

第十章 紅魔館、到着（前書き）

くれないまやかた？
何それ。

ええ、勿論冗談でさあ。

第十章 紅魔館、到着

俺が紅魔館の門前に落とされてから、十分弱が経過した。
たぶん。

既に俺の手元にはスーツと刀も落とされているから、荷物の心配はなくなった。あ、あと何故か陰陽玉もある。これってもう必要なさそうなんだけどなー、とか思いつつスーツの内ポケットに突っ込んでおいた。

あとは早苗ちゃんたちだが、彼女たちはまだ一向に姿を見せていない。もしかしたら別の場所に落とされているのかもしれない。例えば、紅魔館の中、とか。

もしそうなら、これは俺に対する苛めだ。

俺をこの寒空の下、たった一人にするなんて酷いじゃないか。俺はまだ、幻想郷がどんなところなのか全然理解できてはいないんだぞ。

何だ。このまま凍死でもしろと？ いやそれはないか。普通に入ればいい。だがしかし、俺は世間一般で言う人見知りの激しい男だからな。結構こういうところに入るのには、勇気がいるんだよ。あ？ 嘘だけど文句あんのから。

しかし本当にこの場所に落とした理由は何だ？ 各方面に許可を得ている、ということだから俺たちが来ることは既に了承済み。なら場所はバラバラでも、中に落としてくれればいいと思う。

あとさっきから落とす落とす言ってるけど、別に落とさなくてもいい。まずあれに破いる時点で歩いて入れるようにしてくれればよかったのだ。今回のように急に落とされるなんて、正直もう二度と体験したくない。

いやあ、学校の屋上から飛び降りるとかはやったことあるけど、それより怖いからね。覚悟が出来てるかどうかで、大分変わってくるから。本当に。今回のそれを実感いたしました。はい。

まあ、怪我もなかったからそのことはもういいとして。

さてこれからどうしよう。俺は未だ門の前だ。つまり、引き返すことも可能なわけである。まあ、道に迷う確率百パーセントですけどね。そもそも道を一切知らないので迷うとかいう以前の問題だけだ。

やっぱりここは中に入るしかないのかなあ。でもなあ。

「あの一、さつきから何してるんですか？ そんな寒そうな格好で」
こう、あからさまに真っ赤な館を見るとさ。入っていいものかと、本気で思うわけよ。絶対にここで何か起きるぞ。断言出来る。

俺の異変センサー的な物が、ビンビン作動している。嘘じゃないよ。

だから、十分以上も悩んでいるわけだ。早苗ちゃんたちには悪いけど、俺は何かに巻き込まれるのは出来るだけ避けたい。

最初の方からずつと言ってるけど、俺は主人公辞めたいんだからさ。ここは早苗ちゃんか鈴仙あたりに任せていいでしょ？

ここにいる人間にも興味はあるけど、俺は好奇心なんかより恐怖心とかそういう物の方が上回っているんだよ。常に。あー、常には言い過ぎだけど、とにかく今はそうなんだよ。

そんなわけだから、ここから離れるのもありかな、と。

「あれ？ 無視されてます？」

ってちよつと待てよ。俺はここから離れたら離れたで、何かしらに巻き込まれるんじゃないか？ というか、命の危険に晒されるんじゃないか？

主に餓死という危険性がある。そうだそうだ、迷っちゃうんだってば。さっき自分で言っていて忘れていたよ。うっかりさんだな、もう。

じゃあしょうがない。仲間がいないのといるとじゃ、いるほうがいいに決まっている。

結局こうなるんだな。結構時間の無駄遣いをした気もするけど、気にしない。

「それじゃあレッツゴー！」

「ひゅわやあ！」うお！ 俺食われる！？ 冗談です。

俺が勢い付けて言ってみたところ、それに誰かが驚いたようである。いやまあ、さつきから誰かが話しかけて来ているような気がしたんだけど、敢えて無視してみたんだ。

で、見てみると、女の子が一人、尻もちをついていた。

中国っぽい感じのする民族衣装を着ていて、龍の文字が刻まれた帽子を被っている。赤く長い髪と、背の高さが特徴的かな。って、服のスリット部分から下着が覗いていますよ。

まあ、当然指摘などしませんけどね。それよりも起こしてあげた方がいいかな。俺が悪いんだし。

「あ、ごめん、驚かせちゃったみたいで」

そう言つて、手を差し出してみる。

「うー、あ、ありがとうございます」

ふむ。一応下着が見えていたことは気付かれていないようだ、とか彼女を引き上げながら思ってみる。

「俺は宇條桐嗣。君は？」

「私は紅美鈴、ほんめいりんです。この紅魔館で門番をしています。ってあれ？ 宇條桐嗣、さんですか？」

ん？ 俺の名前に何か聞き覚えでも？ いや、あつても不思議ではないか。紫さんは確実に俺をここに送るつもりだっただろうし。

「うん。紫さんから聞いてたりする？」

「私は直接聞いてませんけど、咲夜さんが言っていましたね。宇條桐嗣という人間がやってきたら、丁重におもてなしするように、と」

へえ、門番がおもてなし、ね。それってつまり、そういうことなのかな？ まあでも、目の前の少女からは全くやる気を感じられないし、大丈夫か。

「そつか。じゃあ中に入れて欲しいな。正直今寒くてしょうがないんだ。出来たら中で暖を取りたいくらいだ」

「いいですよ。でも、それ相応の実力がないと入れませんので、入

りたければ私に勝ってから……ってちょっと待ってくださいよ！」「あれ？ いいですよって言ってたから先に歩いていたのに。何だっけって言うんだ。

まあ、ちゃんと聞いてたから分かるけど。でもねえ。俺はそんな実力テストを受けるつもりはありませんよ、と。

だから、そんなに睨まないで欲しいね。それに初対面の妖怪に、そんな対応されてしまったら俺は、自分を抑えきれない気がしない。

「…… 怨むなよ」

かなり小さな声で呟いてしまったが、彼女には聞こえただろうか。いや、どうでもいいか。どうせもう勝負はすぐ着いてしまうのだから。今回ばかりは宣言させてもらおう。

「勝負は、一瞬で決着する」

「…… へ？」

俺が刀を持っているのと、彼女が闘う準備をしていないからこそ、一瞬で終わるんだけどな。

「っふ！」

少し離れた距離を、一瞬で詰める。そしてその間に鞘から引き抜いた刀身を、彼女の首筋に中ててやる。

いやあ、ページの言うところページにも満たないんじゃないかな？ 大丈夫かこんな短時間で終わって。

「ええ、と。これはもしかして私の負け？」

「駄目なら、もう一度やり直してもいいぞ？」

「…… 結構です」

そこで俺は、刀を離して鞘に納める。

「じゃあ、門開けてくれ」

「…… はい」

テンションガタ落ちだけどどうかした？

うん、ごめんなんでもない。俺が悪いのは百も承知だけど、ここで時間取られるのは、なんとなく不愉快ゆえ。

あ、そういえばまったく関係ないことを思い出してしまった。料理対決の敗者に与えられる罰ゲームって何だろう。

霊夢と鈴仙が最下位に位置するわけだけど、鈴仙は紅魔館に送られているから実質霊夢だけかな。罰ゲームを受けるのは。それとも敗者全員か。

というかここに強制送還っていうこと自体罰ゲームだと思うんだけどなあ。少なくとも早苗ちゃんと鈴仙にとってはそうだろう。神宮寺三倉に関しては……たぶん俺と一緒にならどこでもいいんだろうね。はっはっは。

まあ、それは置いて、やっぱり気になるな。罰ゲーム。紅魔館で一週間が終わるまで覚えてられたら何があったか聞いてみようかな。

そんなわけで話を戻し、俺は今扉の前。隣には美鈴（中華な感じがするから中国でも可）。

「扉でけえ」

はい。扉の前に立った瞬間に思った感想です。口に出してみました。出してみた、というか出てしまったんですけどね。

「これ、普通の人間の力で開くのか？」

「ええと、たぶん？ でも桐嗣さんは普通、ではないので問題ないですよ」

いえ、腕力とかは結構普通ですよ。俺が聞いたのはそこだったんだが、まあ、いいや。

扉を両手の平で、軽く押してみる。

……。

うん。この程度じゃビクともしないよな。やっぱりな。

よしじゃあ、本気で行くぞー。

ふん！

ギギイッと音が出た。お、開いた開いた！ 俺すげえ！ 緑色の巨人にも負ける気がしないぜ！ 嘘だ！

重々しい雰囲気だなあ、なんて気楽に思いながら、中に入る。

ああ、あと紫さんが俺を外に落とした理由が何となく分かった。たぶん、実力テストを受けさせるためだ。そこで、俺が漸く本氣の一部を見せられた。これを引き出す為に、外に落としたに違いない。というかそうじゃなかったら、本氣の出し損な気がする。

「それでは私は門番の仕事があるので、ここから先は咲夜さんの案内に従ってくださいね」

にっこり笑顔で言い残し去って行く美鈴。もう立ち直ったの？

早くない？ 俺より早いよきっと。鉄の心臓でも持っているのだから。若しくは鋼の魂^{はたけ}。ええ、何でもありません。

しかし館内も真っ赤っ赤。おっと、赤が多い。でもそれくらいに赤い。というか紅い。

まあ、そんなに目に悪いなんてことはない。血の海よりは、マシである。

「貴方が、宇條桐嗣様ですか？」

と、背後から声を掛けられ、俺は「ふおむあ！」とかつて声を出して飛び退いてしまった。またやったよ。いい加減にしたいところである。だからここは敢えて平静を装うことにしよう。

「ええっと、そうです。ってあれ？」

視界に移ったのは、メイド姿の少女。銀色の美しい髪と、凜々しい顔。本当に綺麗だとは思っけれど、それよりも、大事なことがある。

「君は、人間？」

「はい。この紅魔館でメイド長を務めている、十六夜咲夜^{こむぎや}と言います。以後お見知りおきを」

「そっか。俺は宇條桐嗣。って、名前がいいのか。えっと、以前は学生兼妖怪退治をしてた」

俺のその言葉に、彼女が一瞬、小さな反応を見せた。妖怪退治、という単語に。

「それは、あの巫女と同じような？」

ああ、そういえばそんなこと言っていたなあ。でもまあ、実際に

霊夢が妖怪退治をしている現場を見ていないから、何も言えない。

「いや、どうだろうな。霊夢は、相手の妖怪たちを殺すのか？」

「それは有り得ません。彼女がするのは、懲らしめることだけです。お嬢様や、冥界の亡霊たちも皆、あの巫女と戦って負けていますが、ただそれだけです」

霊夢、強いんだな。きつとあれだろ。また何か悪さをしでかしたら、もう一度懲らしめてやる、みたいな感じなんだろ？　なんか、その方が霊夢らしい気がする。なんとなくだけど。

「それと、今の話で思ったんですけど、もしかして幻想郷のこと自体、あまり知らないのではないのでしょうか？」

あまり、なんてもんじゃない。まったく知らない。幻想郷には人間と妖怪たちが共存していること以外、何も。

あ、そういえば紫さんに聞いてないな。俺を幻想郷に連れてきた理由。

こつちに来て二日目（三日目？）にして、かなり充実し過ぎているおかげで忘れていた。本当に駄目だな。次こそは聞こう。というか、紫さんもちゃんと教えてくれればいいのに。

おつと話がずれた。ここはとりあえず素直に首肯。俺の表情は苦笑い的な感じなはず。たぶん。

「では、お嬢様のところへ案内する間に、話せるだけのことはお話ししておきます」

そうして咲夜さんは、歩きながら幻想郷について語り出した。今ここにきて、漸く俺は知ることが出来る。と思っただけどまだ幻想郷に来て間もないんだっただ。本当に内容が濃すぎて、もう一週間はいた気になっている。

「まず、幻想郷は元から結界で隔離された世界だったわけではありません。ほんの五百年ほど前までは、自由に行き来可能でした。とは言っても、その頃のことは話に聞いたただけなので私にもよく分かりませんが」

こちらを向いて、これは全部お嬢様や紫さんに聞いた話なのだと

付け足す。

その後も幻想郷について教えてもらった。
纏めるところだ。

五百年前、人間の勢力が増して幻想郷の社会のバランスが崩れることを憂いた妖怪の賢者である八雲紫は「幻と実体の境界」を張り、妖怪の勢力を他から取り込むことでバランスを保った。

やがて明治時代になると、近代文明の発展とともに非科学的な事象は「迷信」として世の中から排除されていき、幻想郷はそこに住み着いた妖怪達や一部の人間達の末裔と共に、強力な結界の中で生きる道を進むことになり。そして幻想郷の存在は人々から忘れ去られていった。

幻想郷とは、そんな世界なのだ。つまり、

「幻想郷は、異世界っていうのとは違うんだな」

「そうですね。あと、幻想郷は元々山奥にあったものなので、海はありません」

海がない、か。つまり海水浴に皆で行って、水着姿を拝み放題、なんていう最高の展開は待っていないわけね。いや、元々期待してないし、そんな季節まで幻想郷にいるつもりないし。ホントだよ。

「それから、この幻想郷は、八雲紫のもの意外にもう一つ結界が張ってあります。それは「博麗大結界」というものです」

「博麗？ 霊夢と関係があるのか？」

「はい。博麗大結界とは、百数十年前に張られた幻想郷と外の世界との往来を遮断する結界で、博麗の巫女によって管理されています。まあしかし、私もこれに関しては詳しいことは分からないので、聞くならあの巫女にでも聞いてください」

「うん、分かった」

霊夢は、妖怪退治だけでなく、結界の管理までしているのか。凄いな。あんなに若いのだから、まだまだ遊び盛りの気もするんだけどな。

「一応私から話せるのはこれくらいですが、何か質問などあります

か？」

質問ねえ。まあ、大したことではないけど聞いておくかな。

「じゃあ、暦に関して聞いておこうかな。幻想郷でも新暦しんれきが使われてたりするの？」

「そうですね。一部の妖怪の間では、六十年掛けて一巡する「妖怪太陰暦たいいんれき」が使われていますが、基本的には新暦です。ちなみに暦関係で、幻想郷では紀年法きねんぽうが使われているのですが、まあ、これは覚えなくてもいいと思います」

「こんな感じでいいですか？　と言われたので、当然ばつちしと答える。うむ。本当に完璧だ。」

「こういう人を瀟洒せうしやうな人というのかな。うん、違うね。」

「なんて一人突っ込みして遊んでいると、咲夜さんは俺を蔑むような目で見てきた、わけではなく、一つの扉の前で立ち止まり、小さく微笑んだ。」

「ここが、お嬢様のお部屋です。一人で入らせるようにと言うことだったので、私はこれで失礼致します」

そして咲夜さんは、現れたとき同様、音もなく一瞬で姿を消してしまった。

俺は、広い廊下に一人取り残されている！　館の中で遭難した！　なんて喚いてみてもいいんか？　駄目ですよー！

さてここで俺は、ある分岐点に立たされた。

咲夜さん（そういえば何故か「さん」って呼んでるけど、あの俺より年下な気がするんだよね）の言う通りにそのまま「お嬢様」のいる部屋に入るか、それともここは指示を無視し、引き返す若しくは館内を探検するか。

まあ、引き返すつてのは正直意味わかんねえッスから。あとさっき遭難がどうこう言っていたのに探検も同じく。

うは、最初から選択できるの一つじゃないか。誰だ。選択肢用意した奴。見つけ次第フルボッコにしてやる。うん、意味分からん上に俺だ。

「早く入ってきなさいよー」

なんて部屋の中から幼さを感じさせる高めの声が聞こえてきた。

これがお嬢様かな？ そうじゃなかったら驚きだけど。お嬢様の部屋にお嬢様じゃないのがいた！ お前は誰だ！ 見たいな。

いい加減にしるとか言われそうなのでそろそろ入ろう。

ガチャリ、とか音を立てて開けてみる。

「失礼しまーす」

「本当に失礼な入り方ね」

「昔からよく言われます」

初対面でやる会話かこれ。

「まあ、それは置いといて、私がこの紅魔館の主である、レミリア・スカーレットよ。ちなみに吸血鬼だったり」

へー、なんかついでのように吸血鬼だと言いましたよー。まあいいけど。

幼い外見（見た目十歳とかそこらかな？）、青い髪、透き通るほどに白い肌の少女は、俺を見てニヤニヤしていた。って何でニヤニヤしてんだよ。てか小さい身体に相応しくないようにも見える大きな翼。まるで蝙蝠みたいなそれは、それだけで吸血鬼である証明のように見える。

だからさっさとついでのように明かしたのかな。隠す意味も、必要も、何もないから。

「うーん、貴方は私みたいなのに「おにーちゃん」とか呼ばれたい人じゃなさそうね」

何ですかその評価は。いやしかし、普通に今の発言は可愛かった。本当に可愛かった。是非ともお兄ちゃんと呼んでください。嘘と言いきれない自分が嫌になります。

「その評価はどうかと思いますが……。そういえば、後の三人はもう来てるんですか？」

「ええ。もうそれぞれの部屋で寝ているんじゃないかしら。私も今日は昼間から起きてたから、そろそろ寝るつもりよ」

昼間から起きてた？ 吸血鬼なのに？ なんて思っていたら、レミリア……さんって呼ぶか非常に迷う。もういいやレミリアで。とにかくそのレミリアは、俺のその疑問に答えてくれた。

「そりや日光を直接浴びたら駄目だけど、日傘さしてればなんの問題もないわよ？ それに、昼間じゃないと人里の甘味処かんみどころで食事も出来ないから、偶には昼間起きてるのよ」

「甘味処、ですか」

「結構美味しいところがあるのよ。今度一緒に行く？」

「お、デートのお誘いですか？」

「そうそう。デート」

何で棒読みなんだよ。乗るなら乗るで、やる気のある返事をしてくれ。

「じゃあ、行くときは声掛けてください。一週間はここにいるんだし、その間に行ければいいですね」

「そうね。あ、そのときは二人きりがいいわね。で、二人でお互いにあるのかしながら食べるのよ。そうするときと周りから、色んな目で見られるわね」

「ええ本当に」

たぶん普通にカップルとして認識されることはないだろうなあ。

レミリアは羽が生えているから、そもそも人だと勘違いされないだろうけど、見た目が幼いからね。俺個人がただのロリコン変態野郎と勘違いされかねない。

別に俺はロリコンじゃないんだけどね。レミリアのことを見て、本当に可愛いと思うけど、それはやっぱり別の感覚だと思う。というかそうであって欲しい！

「じゃあ、今日はこれくらいにして、後は咲夜に部屋まで案内してもらいなさい」

「ああ、はあ」

何だ。結構あっけなく終わったなこの挨拶。と思つたら、何か思い付いたかのように、いきなり手招きしてきた。

「ん、何ですか？」

「いいから来なさい」

自分で来ればいいのに、とか思っても言わない。それが大人つてやつだ。

そしてレミリアが、俺を見上げる形になってしまったので膝を曲げて、お互いの顔がすぐ近くにまで迫っている。

「思ったより近くまで来たのね」

「ええ、間違えたようです」

そう言っただけで少し下がろうとしたら、首に手を回され引き寄せられた。そして気付いたら……レミリアが俺の首筋に噛み付いていた。

とまあ少し驚いたような表現を試みたけど、正直どうでもいいというかなんというか。

若干痛みはあるけど、大したこともなく、そして血を吸うのも早々に止めてしまった。

あれ？ 吸血鬼って普通、失血死するくらいに吸うものじゃなかったけ？

「言っておくけど、私は人が死ぬほど吸わないわよ？ 小食だから小食ですかそうですか。」

「それにしても、何とも形容し難い味ね。初めて味わうわ」

そんなに人によって血の味は違うものですか。鉄分が足りてないかどうかの違いじゃない？ あとは血流うんたらみたいな。とかか断りもなしに吸うのはどうかと。他の一般的な人ならともかく、俺は言われたら素直に吸わせるぞ。いや、断じてレミリアが可愛くてしょうがないからとか、そういう理由じゃない。単に、食べ物を分け与える感覚。死にそうになるまでには突き飛ばすくらいには思ってたけど。

ちなみにレミリアには眼鏡が似合いそう。って何だこれ。すごいどうでもいいこと言ってるぞ。

「それじゃあ今度こそ、出ていいわ」

なんて感じに追い出され、部屋の前で待機していたのか分からない

いけど、出たらいた咲夜さんに部屋まで案内されて、実は今ベッドの中ですよと寝ているのだ！ 起きたままこうやって話が出るのだ！ 俺すごい！

御免なさい。起きてます。

まあでも、ベッドに仰向けで寝転がっている、というのは事実。そしてもうすぐ眠りに就こうとしているというのも、まあ、紛^{まが}うことなき事実であって。うむ、すやすや寝ている以外は嘘じゃなかった。

ってそんなことはどうでもいい。ただなあ。咲夜さんが部屋を出る前に言っていた一言が問題である。

それさえなければ、こんなときに考えることなど一切ない。正直今もすぐに寝てしまいたい。

でもやっぱり駄目だ。あの一言はない。有り得ない。おかしいだろう？

本当なら一週間ご宿泊、って流れだろ？

ここだって「客間です」って案内されたんだぞ。

それなのに、それなのに！ あの人はこう言った。

「明日から、執事^{しじ}として過ごして貰います」

そう、につこり笑顔で。何の悪意も感じられない、清々しいほどの爽^{さわ}やかな笑顔で。本当なら、可愛いなあ、なんて思いたいところを、その一言の所為で無駄にされた気分で本当にがっかりである。

いや、ちよつとがっかりするところが違うけど。まあそれは気にしない方向でいいとして。

結局ここでも面倒なことが起こるんだな。

なんてことを思いながら、俺を誘^{いよな}う眠気に逆らいきれず、結局すぐに眠りに就いてしまった。

ああ、そうそう。

何か俺は既に、執事以外にも厄介な事に巻き込まれているみたいです。

第十章 紅魔館、到着（後書き）

いつもあとがきまで読まれているのか、という不安は残りますが、ここでいきなりアンケート！。

一応暫くは紅魔館でのお話が続きますが、その後何処に行くのか、実はまだ何も決まっています。

あ、いや、人里には向かいます。でもそこで新たな出会いはない予定なので、その後の行き先。

一応候補としては、

・博麗神社に戻る（霊夢に会いに）

新規登場予定キャラ：幽香

・白玉楼に戻る（特に理由はない）

新規登場予定キャラ：なし

・永遠亭に優曇華と行く（紫が行って見たらと言っていたから）

新規登場予定キャラ：永琳、輝夜

・守矢神社に行く（早苗に誘われて）

新規登場予定キャラ：神奈子、諏訪子、にとり

・紅魔館で執事続行（レミリアの我が儘）

新規登場予定キャラ：パチュリー、小悪魔、チルノ、フラン

博麗神社 or 守矢神社 or 紅魔館になった場合、本来登場させる予定のなかったキャラも出てきます。

一応候補としては以上があるのですが、どれにするかが一切決まっています。

ということで、次章投稿までに感想のほうに書いてもらえると助

かります。

それでは、お待ちしております。

第十一章 激突！ 吸血鬼対巫女、紅魔館大決戦！（前書き）

君たち、喧嘩は外でやりなさい。
うはー、何やら親の気分だぜ！。

え？ 勿論当然の如く嘘ですよ？

第十一章 激突！ 吸血鬼対巫女、紅魔館大決戦！

執事をやれ、とは言われたものの、執事としての礼儀作法などは一切教えてもらえなかった。一応執事服なる黒い服も着てはみたものの、これを着た意味はあるのかと問いたい。

誰にとは言わないけれど。

いや、最初は咲夜さんが礼儀作法とかちゃんと教えてくれようとしていたのだが、食事の際レミリアが「どうせ一週間しかないんだから、そんなの教えても無駄よ」と一蹴してしまったのだ。まあ、こもつと御尤もではある。

なので食事が終わった後は、簡単な雑務を任されてそれに専念している。ちなみに早苗ちゃんたちは、鈴仙以外紅魔館に来たのが初めてらしく、館内を探検している。神宮寺三倉までそれに付き合うとは思いつかなかったけど、ずっと付き纏われるよりはマシだから、気にしないことにした。

最終的には図書館で寛くろぐらしいが、図書館なんてあるんだな。この館。あつてもおかしくないぐらいのでかさだけださ。

しかし食料などの在庫確認なんて、ここに来てやることになるとは思ってもみなかった。飲食店でのバイト経験が役に立つかな？ なんか微妙な気もするけど。

なんて思った結果、やつぱり予想通り大して役に立たなかった。寧ろ外での経験など無駄になるくらいに、最初から在庫確認がしやすいようになっていた。まあ、住宅であるのだから、当然と言えば当然だけど。

でもやつぱり、誰か自分たち以外が数える為のことも考慮しているような気がするなあ。

もしかしたら俺以外にも、無理矢理執事やらメイドやらをやらされている人もいるのかな。かな。

だけどそれなら朝食のときに顔を合わせているはずだ。ここでは

メイド長である咲夜さんも一緒に食事を摂っていたからな。主人と従者が同じ席で食事をしているのに見ないなんて有り得ない、と思う。

そうすると考えられるのは、喰われた、とか？ まあ、殺されたって考えてもいいけど、ここの住人の層からして、殺してそのままポイ捨てはないだろうしな。埋葬でも何でも構わないけど、まあとにかく、死人を有効利用しないわけがないのである。

となると、只今絶賛留守中か、ただ単純にお亡くなりになったか、あとは紅魔館を出ていったか。

うわー、全然絞り切れねえ。駄目だこれは。

って、もう一つ考えられる可能性ってのは浮かんだけれど、もういいや。これ以上考えても仕方のないことだし。結局、誰かに聞かなきゃわかりやしない。もう放置でいいよホントに。

それにしてもあれだね。こういう場所って普通、埃が積ってたりするものだと思うけど、結構綺麗なんだよな。ホント隅々まで掃除してあるようである。

そういえば、妖精メイドってのがたくさんいるんだったか。それらの協力もあれば、これぐらい訳ないのかもしれない。

「よし、終わり、と」

「それじゃあ次の仕事ね」

背後からの声。もう驚きませんよ。朝もこれやられたしね！ そのときは「ふちよるぶおあ！」って叫んだ気がする。気のせいであって欲しい現実であるが。マジ嘘にしたい。

「もうちよつと面倒なのでもいいですよ。それとこの一週間が終わったらシェフとして就職しようかな」

なんて冗談で言いながら、咲夜さんの方を向いてみる。おっと、何か驚いている様子だ。何故だろうね！。

あ、今思い出したけど、咲夜さんはここで唯一の人間らしいから、どんな気持ちでいるのか聞いてみたい。

「っと、仕事の前に、少し話したいんですけど、いいですか？」

「え？ 私とかしら」

そうそう、俺が執事として働くと決まってから、堅い口調はなくなっている。あれは来客用以外はあまり使わないらしいね。

「そうです。貴女と」

「……そうね。私も少し話があったから、丁度いいわ。どうせこれから頼む仕事も大したことはないしね」

「それじゃあ、俺から。と言っても、質問になるんですけど、咲夜さんは何故、ここで働いているんですか？」

「凄く簡単なことよ。私は、お嬢様に拾われたのよ」
「拾われた？」

「ええ、もう生きる術の残っていない私を、あの方が拾ってくれたの」

昔を思い出すように、どこか遠い目をして語り始める、瀟洒なメイド。俺と大して変わらないはずの歳の彼女は、一体どんな人生を送って来たのだろう。もしかしたら、俺の経験したことなんて比べ物にならないほどの人生を経験しているのではないだろうか。彼女の表情からは、そんなことを想像させた。

「そしてね、この十六夜咲夜という名を貰い、幻想郷まで一緒に来たのよ。……まあ、あまり詳しいことを語るには、時間が足りないから割愛するけど」

後半、不自然に感じるくらいに早口に捲し立てられた。これでの話はお終い、と言うことだろう。

「そうですか。でも、それだけが、貴女がここで働く理由ですか？
これだけ聞いていると、貴女は彼女を飼い主として信頼している、というふうに捉えられるんですけど」

「……間違っでは、いないかもしれないわね。でも私は、本当にお嬢様を慕っているのよ。それと、お嬢様の友人であり、図書館の司書でもあるパチュリー様のことも」

レミリアの友人、か。ここには人間は一人しかいないらしいから、そのパチュリーと言うのも妖怪か何かなんだろうな。

しかし今の咲夜さんの顔は、爽やかというかなんというか、晴れやかな笑顔だったな。もう少しレミリアに対して妄信的なのかと思ってもいたけど、そうでもないらしい。

杞憂、だったかな。

「分かりました。それじゃあ、咲夜さん。貴女からも話があるんですよね？」

「ええ。まあ、私からの話は、簡単なお願いだけだね」

「お願い？」

何だろう。仕事とは別に、何か頼まれるということだろうけど。

「そう、お願い。私と、付き合ってくれないかしら？」

当然本当にお付き合い、つまりカップルになるなんてことはなく、ただ単に人里までの買い物に付き合っただけのことだった。

ふふふ、俺は勘違いしてないよ。いくらなんでも、こんな見目麗しい女性から交際を申し込まれるなんてこと、あるわけないじゃないや、既に楓から申し込まれているけどさ。永遠に保留の予定だけど、今はそんなことはどうでもいい。

とにかく俺は、大丈夫。期待も何もないから。そう。俺はバトラーなのだから。

うーん、普通に執事でいいね。格好付けて英語で言ってもしょうがない。それに俺たちの世代だときつとバトラーと言ったら怪獣が浮かぶはずだし。

おっと、俺が何年生まれか特定されてしまう。

とまあ冗談はさておき、現在人里の雑貨店で何やらお探しの咲夜さん。ここでは俺の出番はないらしく、適当に見て回っていいとのこと。当然店内ね。

しかし俺が見るような物は特にないな。アクセサリー類だとかが目立つ店ではどうもね。あとこれ、どう考えても私用じゃないかな。

レミリアの物を買うにしようも大人っぽい気がする。ああ、いや。レミリアも年齢からすれば十分大人なんだろうけど。でもやっぱり幼いあの容姿に、この店のは似合わない気がする。

なんて、ファッションにはてんで疎い俺が何を言うかって話である。いい加減にしろって言われるぞ。遙か彼方で俺たちを見守ってくれているであろう何者かに。誰か分からないし、見られているかどうかも定かではないのだから気にしてもしょうがないんだけど、敢えて言ってみました。

さて、咲夜さんそろそろ終わったかなあ、とか思いながら見てみる。てか店内に人ほとんどいない。俺と咲夜さんと店員さん、以上三名。まあ、時間帯的な問題だろう、と自己解決。そうでなければ可哀想だ。博麗神社の賽銭箱並に。

っと、視線が外れすぎ。咲夜さんを見なくちゃだめでしょ！ということを見る。じーっと。凝視である。嘘である。てかまだ普通に選んでいる。しかもかなり真剣な顔で。でもその真剣な顔が、あまりにも年相応のそれだったためか、自分の頬が緩むのを感じる。やっぱり女の子だなあ、なんて思うのは失礼なのかな？ こういう場面だけ見ると、咲夜さんではなく、咲夜とか咲夜ちゃんって呼びたくなってしまう。呼ばないけどね。たぶん、呼び捨てにしても彼女は何も言わないのだろうけど。

なんて考えながら呆けていた所為か、いつの間にか咲夜さんが目の前にいたのに気付かなかった。しかも俺のことを見上げて、何やら思い悩んでいるようである。

「これは……微妙ね」とかぶつくさぶつくさ。

俺の勘違いでなければ、咲夜さんが見ているのは自分のでもレミリアのでも、ましてや早苗ちゃんや鈴仙たちのでもなく、紛れもなく俺のための物を買おうとしているのかもしれない。

新しい仲間へのプレゼント？ でも期間限定だし、それは考えにくい気がする。

「あの、咲夜さん？」

「ん、どうしたの？」

若干不機嫌そうな顔でこちらを見る。人が選んでるのに邪魔するな、みたいな感じ。

「えっと、誰にあげる物を選んでるんですか？」

なんて聞くと、溜め息を吐かれた。え、俺そんな呆れられるようなこと聞いた？

「秘密と言いたいところだけど、まあいいわ。貴方へよ。お嬢様が何かしら買ってあげなさいなんて言っていたからね」

「レミリアが？」

「ええ。何でも、昨日の御礼だとか。……貴方、昨日お嬢様と何かあったの？」

昨日？ ああ、血を吸われたことかな？ なんて言ったら咲夜さんが驚いたようだ！ 何、吸われると吸血鬼になるの？ もしそうだとして、俺が今ここにいられること自体おかしいな。

今日の空は、雲一つない晴天。太陽の光がバリバリ注いでいるのである。それでも季節のおかげで寒いわけではなるけれど、まあ兎に角、俺が吸血鬼になっていたら、陽に当たった時点で終了だ。

つまり、俺は人間。少なくとも、この幻想郷では一般的な人間の筈である。

「ええと、貴方血を吸われていたというのに、何ともないの？」

「何ともないの、と言いますと？」

「お嬢様がいくら小食とは言え、血を吸われたのよ？ どこか調子が悪いとかそういうのは無いの？」

ああ、そういうことか。今思えば、普通の人間だと数日は安静にしていた方がよさそうなほどには、吸われた気もする。うーん、やっぱり俺は普通、とは違うのかな。

「それなら、心配なさらずとも大丈夫。ある程度の失血状態なら慣れてるので」

「慣れてるって、そんなこと有り得るの？」

「普通はどうか知りませんが、俺はそうなのですよ」

うむ。そうなのである。妖怪退治をしていた時期。あの頃はよく血をドバドバ流していたのだ。どれだけ死にかけたか覚えていないほどだ。その内の一回に、楓との戦闘もあるのだけど、まあそれは気にしない方向で。今じゃあんなに俺ラブな子に育ったのだからね。寧ろ俺が彼女を労わってあげなくては。

というのは冗談にしておきたいところである。そういえばあの後どうしたのかな。また俺を探して飛び回ってる、なんてことはないか。紅魔館にいることは分かっているわけだし。いつでも会えるからいいや、みたいな感じかな。そのほうがあいつらしい。

って今は楓のことはどうでもいい。血だ血。

「というか、レミリアも俺のそういう特異なところを感じていたんじゃないですかね」

「そうなのかしら」

それはなさそうだけど、と言いたげな表情をしながら咲夜さん。俺は信じたいんだ。

信じないなんていう選択肢は、無いんだけどね。ほら、だって、そうじゃなきゃ、俺が倒れていても構わずに吸っていた、という事実が残るわけで。

それはさすがに、ねえ。

「まあいいわ。それより貴方へのプレゼント、ということになる物なんだけど」

と、まあいいわの一言で吸血話（きゆうけつはなし）（俺が作った造語）は終了である。うわー、何それー。

「自分で決めてくれる？」

おお、話を終わらせたただけじゃ飽き足らず、ここに来て職務放棄っぽいこととしていらっしやる。これこそメイド長の鑑だね。そんな筈なかるうが、とかそんな突っ込みはご所望ではありません。

さて、真面目になるうか。

「別にいいですけど」

「じゃあお願い。私は、すぐその八百屋に行ってるから」

と、俺に金を渡して去って行った。

ってマジかよおい。ホントにとんずらって。うーむ、後で年上としての威厳を見せねばならんかもしれないな。

逆に実力差を分からされる危険性もあるから、出来れば避けたいところだけど。

で、俺は何を買いえばいいのやら。

特に無いんだよねえ。欲しいのとか。あ、折角だから、執事服に似合う蝶ネクタイとか探しておこうかな。そういうの買っておいた方が、レミリアに気に入られそうだし。

ということで、決断した俺は速い。適当に目に付いた物を買って、いざ八百屋へ。

どんな物を買ったかは、後でのお楽しみ。うん、きっと忘れて描写せずに終わりそうだけどね。まあそのときはそのとき、ってことで。

そんなこんながあつて、紅魔館に帰ってまいりました。

八百屋のおじさんがとても優しい人だったのが印象的。あとは、

寺子屋の先生をやっているという女性に会ったね。

何か凄く綺麗な人だった。あ、いや、人じゃないか。あの雰囲気は。でも人間の子どもにたちに、授業が出来るほどに頭がいいわけだし、その上慕われてもいるのだから、無闇矢鱈と人を襲うようなことはないのだろうね。寧ろ、護ろうと思っているのかな。

会話の節々にそんなのを感じた。

ちなみに名前を伺ったところ、上白沢慧音かみしろさわけいねと名乗っていた。

今度彼女の授業風景とか見てみたいところである。嘘じゃないよ。まあ、人里であつたことはこれくらいかな。一応、レミリアと行く予定の甘味処は見ておいたけど。ほう、ここかあ、みたいな感想だけ抱いて、中に入ることなく終わった。当然である。レミリアとあーんし合うときまでお預けなのだ。

うーむ、俺変態チックな発言してる気がする。

気のせいになーれ。

うし、気のせいになった。決して木の精でも、樹の精でもない。
わかってる？ あ、そ。

「大人しく退治されなさい！」

「大人しく、は嫌よー」

おっと、現実逃避していたら、バトル勃発してる。じゃなくて、バトル勃発中だったから現実逃避という名の回想とかをしていたわけだけど。

一体どうしたことだろうか。早苗ちゃんがレミリアを追いかけている。食事中に何をしているのやら。

とまあ、現在夕食なわけである。俺も調理に携わり、その味を気に入ったレミリアが、食べさせてーとか強請^{ねだ}って来たので、俺はなんの躊躇いもなくあーん、とか言いながら口の中に放り込んでやって、それを見た神宮寺三倉と早苗ちゃんが、驚いて今に至る、というわけなんだけれど。

何故に早苗ちゃん？ こういうことに免疫^{めんえき}がないのだろうか。だとしたら、初心^{うぶ}だねえー、だとか言って今度からかきたい。

って、それより神宮寺三倉である。彼女は大人しく食事中。二人の暴れっぷりを気にすることなく、冷静に。ただただ俺の作ったものをひたすら喰っている、ってそういうことか。君はただ俺の作った飯を食べること優先しているわけね。おっけー把握した。

じゃあ俺も食事に……、

「止めなさいよ」

と、後ろに控えていた咲夜さん。

「いや、とは言っても俺がどうこう出来るもんじゃないじゃないですか」

「元凶は貴方よ」

それとこれとは話が別だ！ 何て嘘は通じそうもないので、素直に出るか。そして俺の挙動に反応した神宮寺三倉は「はい」とか言いながら刀を差し出してきた。テーブルを挟んで向かい側に座って

いるおかげで、簡単に受け取れるってもんだ。

本当はこの席には座りたくなかったのだけど、何者かによる陰謀でこうなっていたのである、という説明だけはさせてくれ。少しづつでも距離を縮める為の訓練とでも思ってくれればそれでいいけど、ちなみに鈴仙は探検中に何かあったらしく、部屋で寝ている。さて、止めようか。

美鈴戦での実力を出せれば、何とかなる。たぶん。

あー、しかしこれ、止めるのは早苗ちゃんだけでいいんだよな。弾幕を放つ早苗ちゃんと、それをひたすら避けるレミリア、という構図だから。少し考えれば簡単な結論。止めるのは一人。

ということで一方向的にバトルってる早苗ちゃんの方に向かう。刀は、抜かないでおこう。相手は人間だからね。

しかし早苗ちゃん。いくらなんでも俺の接近に気付かないとは、迂闊すぎるのではないかい？ もう、十メートルも無い距離だ。

俺はそこから、一気に跳んだ。飛んでる相手に、跳ばずに届くことはないからしょうがない。空中戦は苦手なんですがね！

いやー、近くに来ると音が凄いな。その所為もあるのかな。俺に気付かないのは。

まあ関係ないけどー。

刀を振り下ろせば、気付くでしょう。

「うひゃ！」

うむ。さすがである。紙一重とはこのことか、というくらいの素晴らしい避けっぷり。

「な、何をするんですか！」

「いや、寧ろ君が何をしているんだ、と」

「え、と、あれ？ 私何でこんなことしてるんですか？」

いや、それを聞かれても困るから。

「俺がレミリアに食べさせたら、君がいきなり暴れ出したんだけど？」

「あ、ああ、あああ、そうでしたか」

何その、あ三段活用。

「えと、何か、羨ましい、じゃなくて、ふしだら？　でもなくて、なんというか、そういうのっていけないんじゃないかなあ、とか思いつつ」

しどろもどろもいいところである。結局、最初の羨ましいを採用。それでいいよう。

「ああ、分かった分かった。とにかくもう落ち着いて、食事に戻ってくれ。折角俺が作ったのに冷めちまう」

「そ、そうですね！　折角作っていただいたのに、食べないなんて失礼ですしね！」

すげえ顔真つ赤ですね。紅魔館にお似合いだ！

「お疲れ様」

「あ、レミリアか。てか、俺が出てくるの待ってただろ」

「何のことかしら？」

とぼけるな、と言いたところだが、まあいいや。ニヤニヤしてるところも可愛いし。ってそれはどうでもよくて。

「ああ、そうそう」

席に戻ろうとするレミリアが、振り向いた。

「そのネクタイ、似合ってるわよ」

今度は、ニヤニヤじゃなく、見た目相応の幼く、可愛らしい笑顔で、そんなことを言い放ちやがりました。

ああ、次は神宮寺三倉が暴れる番かあ、とか思いつつ。

そこそこ楽しかった今日は、結構あっという間に終わったのでした。

だからかな。明日が幻想郷に来て最悪の一日になるなんて、そんなことは想像もしていないのでした。

第十一章 激突！ 吸血鬼対巫女、紅魔館大決戦！（後書き）

はい、前回に引き続き、次の行き先アンケート実施ちゅー。

？博麗神社に戻る（霊夢に会いに）

新規登場予定キャラ：幽香

？白玉楼に戻る（特に理由はない）

新規登場予定キャラ：なし

？永遠亭に優曇華と行く（紫が行って見たらと言っていたから）

新規登場予定キャラ：永琳、輝夜

？守矢神社に行く（早苗に誘われて）

新規登場予定キャラ：神奈子、諏訪子、にとり

？紅魔館で執事続行（レミリアの我が儘）

新規登場予定キャラ：パチュリー、小悪魔、チルノ、フラン

以上の中から選んで、感想のほうに書いてね♪

それでは、ご意見・ご感想、誤字脱字などもあつたら、そちらもお待ちしております。

ではまた次回！。

次は人里で事件が起こるそうです。

第十二章 無意味の意味（前書き）

そろそろ、俺の出番は終わりでもいいと思うんだが、どうだろうか。

あ？ ダメ？

たく、勘弁してくれ。

第十二章 無意味の意味

ほーら、朝だよー。

レミリアは朝お眠りになりました。ということで、今日は大したこともなく済みそうだなあ、なんて思っていたら、咲夜さんに人里にお遣いを頼まれてしまい、一人外出。

まあ、昨日通った道を使えばいいわけだから、別段困りはしない
しいのだけれど。

しかしなあ。

人里に着いた途端、俺は追い出されてしまったわけであつて。これはどうしたものかと考えていたりする。現在ここ。

何故かと聞いてみると、八百屋と雑貨屋の店主が昨夜の内に亡くなったらしい。そして死因は不明。どんな死に方なのかまでは聞けなかったが、二人には共通する点が一つだけあった。

それが、俺と言葉を交わしている、という点。それを知っている人が、何やらあることないことを流布して、こういうことになってしまった、というわけだ。

本当に面倒なことではあるけれど、まあよくあることだししょうがないと諦めたい。これがお遣いじゃなければ、即退散するというのにね。

ちなみにこれで心を痛めたりなんかしてるか、って聞かれると、一応、はいと答えるかな。でも慣れてるからね。そんな気にもしないさ。

あ、それと朗報、と言っているのか分からないけれど、俺、吸血鬼の仲間みたいなのはなってるらしいよ。レミリアが今朝、俺にそんなことを囁いていた。勿論、俺の部屋で。何か起きたら枕元に立っていたのだよ。正直驚いたけど、でも可愛いので許す。可愛い
は正義だと、信じておりますゆえ。

本当だったら神宮寺三倉のことだって、許せるはずなので嘘だら

！。

まあ、可愛いのに後にロリとかそういう言葉が入っていたら、嘘ではないかもしれないけれど。でもやっぱりロリコンではないのだから、俺は色々大丈夫。捕まったりしないから。

って、レミリアの実年齢を明かせば、別に結婚云々は可能だけどさ。外でそれが通用するかって言われたら、勿論否定するさ。そういうのが通じるのは、ほんの一部分であって、大部分には通用しない。分かり切っている常識だぜ。

閑話休題。

えーと、半分吸血鬼になったことに関してだな。いや、そこにすら達してなかったかもしれないけど、知ったことじゃない。とにかく半分吸血鬼となったんだよ俺は。

特徴としては、朝に弱い、太陽光で死にはしない。寧ろ大した影響はない。身体が少しだるいって言う程度。そして夜になると、若干身体能力が向上、するんじゃないかな。というレミリアの推測。俺もまだ試していないから何とも言えないけど。

後は、昨夜誰かに言われたことだけど、夜限定で目が赤くなっていたり、普通の食事だけでは若干物足りない気がするぐらい。でも別に、吸血衝動が酷いということもないわけで。

その上レミリア曰く、一ヶ月以内に元に戻るから、血は吸わなくて大丈夫とのこと。どういうことか、と聞いてみたところ、俺の身体が異常だから、だそうだ。意味分からん。もつと初心者にも分かりやすく説明して欲しいものだ。絶対俺が馬鹿なだけだなんて思わないぞ。

はてさて、レミリアはこうなることを知っていて血を吸ったのか。なんてことが気にかかるわけだけど、これは聞いても答えてくれないこと明白なので、放り投げておこうか。どこか遠くに。二度と見つからないように、と。

「えい」「何やってるんだ？」「つおい！」

人里から魔法の森に向かう途中、立ち止まって考え事をしながら、

投球練習をしていた俺に気付かれないように誰かが近付いて来ていたようだ！　てかもうこの奇声何とかしてくれ。何度目だよ。もうホント飽き飽きなんですけど！　ああ、次こそは何とかしよう。というか、俺を驚かす輩が多過ぎる気がする。気のせいだったら奇声上げたりしてない。

で、振り向いてみるとそこにいたのは、

「慧音さん、でしたっけ？」

「ああ、覚えていてもらえて何よりだ、桐嗣」

昨日ちよろつと挨拶した程度の間柄だけど、お互い名前を覚えていたようだ。よかったよかった。

「で、何をしてるんだ？」

投球ホームを解いた俺に聞くつてことは、ここで何をしているか、ということだろうか。いや冗談ですとも。

「投球練習兼考え事かな」

「かなつて……。そういえば昨日、おかしなことはなかったか？」

不自然な話の変え方である。嘘はそんなに得意ではないのかな。

俺を疑っていることは、明白だ。まあ、そりゃあそうだろうなあ。

人間の味方とは言つても、俺は外来人で新参者。そしてそいつがやって来た翌日に、そいつが関わった人間が死んだ。疑わない理由がない。寧ろ、俺以外に誰がいる、とまで言われても不思議ではない。

目の前の銀色長髪と弁髪帽、穴が六か所に開いたロングスカートが特徴的な美人さん。彼女には、冗談でも変なことは言わない方がいいかもしれないな。昼真つ只中なため、調子悪いしね。戦闘にでもなつたら、逃げることにすら叶いそうにない。

「おかしなことは、ないはず。ずっと紅魔館にいたから、館内の身の回り限定になるけどね」

「そうか。お前がずっと紅魔館にいた証拠、なんていくらでもあるだろうし、嘘を吐いている顔でもない、か」

「話が早くて助かるよ」

「まあ、な。しかしそうすると、狙われているのは里ではなく、桐

嗣。お前ということになるぞ？」

つい数秒前まで俺を疑っていた慧音が、今度は心配そうに伺ってくる。さっきの言葉だけで、俺をそこまで信用しているのか？ それはないか。ただ単に、俺を狙っているかもしれない存在のことを懸念している、というだけだろう。

「俺を、ねえ。まあ昼間に外で襲われない限りは、何の問題もないから」

言って、自分がとんでも発言をしてしまったことに気付く。おい。俺を狙っている奴がいるとして、俺をずっと付け回していたとして、俺の今の状態を知っているとしたら、襲うタイミングって言うのは、限られてくる。

そしてそいつが今も見ていて、今以上に俺を襲う絶好のタイミングがなくなってしまった場合、取る行動。それは幾つか考えられるが、最も可能性が高いのは勿論。

「結構な数がいるぞ」

「だね。まさかこんなにたくさん来るとは。俺ってば人気者――」

「馬鹿やってる場合か」

「うん、まあ、気楽に構えていて問題ないかな、と」

小声での遣り取り。一見意味はなさそうだけど。

「相手は恐らく、弾幕ごっこなんてするつもりはないぞ」

「それだけの殺気はある、よね。そもそも里で人を殺している時点で、ないのは分かり切ってる」

ああそうそう。こんなときになんだが、レミリアに早苗ちゃんに弾幕ごっこがどういうものなのか、ちゃんと詳しく教えて頂いた。何となくこういうものは、やっていてわかってはいたけど、頭は理解していなかったからね。

ええと確か、正式には「スペルカードルール」というものを用いた決闘方法で、基本的に、あらかじめ技の名前と命名しておいた名前の意味を体現した技をいくつか考えておき、それぞれの技名を契約書形式で記した契約書を任意の枚数所持しておくことになる。こ

の契約書を「スペルカード」と呼び、カードが使われることが多いが、必ずしもカードである必要はなく、技の名前が重要であり、読みより名前の字が重要とされる。

対決の際には、決闘開始前に決闘内での使用回数を提示して、技を使う際には「カード宣言」をする。宣言が必要とされるため、不意打ちによる攻撃は出来ないとされる。宣言の際に技の名前を言う必要はない。体力が尽きるかすべての技が相手に攻略された場合は負けとなる。たとえ余力が残っていても提示した全枚数を攻略されたら、負けを認めなくてはならない。技の美しさにもウェイトがおかれていて、精神的な勝負という面がある。

なんて言ってたかな。他にもいろいろ教えてもらった気がするけど、覚えていないので終了。まあとにかく、これが弾幕ごっこである、ということですね。

なんて言ったら殺気の主はどんどん近付いて来ていて、実はもう振り向いたらすぐそこにいるんじゃないかというくらいの位置。でも慧音が動かないので大丈夫だと確信している。

でもそろそろ俺も準備しようかな。いやあ、帯刀しててよかった。誰かさんが持つていけと言うから持つてきたけれど、こういう展開を予想していたのかな。それとも彼女の差し金？ だとしたら帰ったら即切り捨て御免だ。だって相手は元ラスボスさんだもの。

「来る！」

慧音は言った直後に動いた。俺も遅れないように動く。擦れ違いうように、お互い真っ直ぐ進み、魔法の森から飛んで来たモノを避ける。地面に突き刺さるそれは、細長い針のようなもの。

ん？ 何か見覚えがある。でもこれは、そんなに数多いものだったかな。

ほら、まだ飛んで来てるし！

てか俺を重点的に狙ってるね。ふざけんなこの野郎。そんなに俺を殺したいか。となると相手は俺が知っている奴で、ほぼ間違いはないわけだけど。

「お前、何で生きてるんだよ！」

森から飛び出してきたそいつに向かって、俺は叫んだ。ってまた飛ばしてきやがった！

会話しろ！

「俺様は貴様を殺す為に、地獄の底からパワーアップして甦って来たんだよ！」

とか宣いながら、また針を飛ばして来る巨大蜂。いやもう本当にでかい。

人語を理解出来る頭のいい巨大蜂は、俺が昔斬った筈なんだけだな！ てか地獄の底から甦ったって。

「地獄の底から甦っていいのは、正義の使者だけだぞ！」

「何を言っている宇條桐嗣！ 死ねえ！」

いやいやいやいや、まったく会話が噛み合っていないから！

「もういい！ 俺も反撃する！」

抜刀し、針を捌いてやるぜ！ と意気込んでみた。んだけど無理だ！ 俺の勘が告げている。今の状態じゃあそんなこと出来ないというわけで逃亡再開。

ふざけんなふざけんなふざけんな！

俺は無我夢中で走り回った。何処までも走って、それでも追ってくるような夜まで逃げ切り返り討ちにしてやる算段である。まだ昼過ぎだから、逃げ切る自信はないけどね！ そろそろ体力も限界なんだよ！

本当は十ページぐらいずっと戦闘やっていたくらいだけど、そんな余裕ねえよ。

あ、ごめん。十ページは言い過ぎだ。前に倒したところのある雑魚相手だからね。どんなにかかっても五ページが限界だろう。

あはは、何言ってるんだらうね。

てか慧音はどこ行っただらう。逃げたかな？ 本当ならそれが望ましいけどね。見た目は弱い女性なわけだし。弾幕ごっここのよなのとは別の、死と隣り合わせの闘いに巻き込むなんて俺の道に

反する。本当だけども嘘にされるけどね！

「桐嗣！ 貴様逃げてばかりだな！ こんな奴に一度殺されたのかと思うと、腹が立つ！」

「知ったことか！ しかもお前、針の装填の速度とか、有り得ないくらい早くなつて、チーと使つてんじゃねえのか！？」

俺は弱体化。相手は強化。どう考えても、おかしいだろこれ。普通相手が強くなったら主人公も強くなるんじゃないの！？ あ、あれか、俺が主人公辞めたいとかそういう発言ばかりしていた所為か！？ ならもう言わないから俺に力を！

無理か。

「いい加減殺されるお！」

「いやじゃばけえ！」

木々を、草を、茸を掻き分けて走る。いや、茸は視界に移る程度で何でもないのだけど。でもでかいなあ。何あれ。あれも妖怪の一種かと思うほどにでかいぞ。マタンゴ？ けふんけふん。何でもない。

しかし本当にもう、体力がやばい。やばいやばいやばい！ ってあれ？ 何か開けてきた？ これは俺ピンチじゃないのか？ 木の陰で隠れたりとか、そういうことが出来ないとすると、体力が限界に近付いて来ている俺はどうしようもないぞ。

あ、でも開けてきた先に、建物が見える。洋館だな。紅魔館ほど大きくはないけど、それでもやはり、一般的に見てでかい部類のもの。これを利用して戦闘？ いや、どう考えても住人に迷惑がかかる。それだけは避けたいなあ。

って、あれ？ 誰かが洋館から出てきた。黒いとんがり帽子に、
って魔理沙！

「魔理沙！ ヘルプミー！」

おっと、何故助けを求めてるんだ。あれか。以前俺が彼女に負けた経験を持つからから。それで無意識に頼ってしまったのか？ まあそついうことにしておこう。本当は巻き込むのは嫌だが、声を掛

けておいてそれはな。

俺の声に気付いた魔理沙は、俺を捉えて笑顔を浮かべやがった。なんだ、二日ぶりぐらいの再開がそんなに嬉しいかおい。俺まで嬉しくなるじゃないか、っと！

魔理沙の笑顔に見惚れてる隙に攻撃してくるんじゃないやねえよ！とかつて悪態を吐きたいところである。本当だけどとりあえず嘘にしておく。理由は特にないよ。それこそ嘘だけど。

「桐嗣、その後ろの何だ？」

「巨大喋り蜂だ！出来たらこれを一撃で灰塵かいじんと化してくれると助かる！」

「んあ？よく分からんが、そいつを木端微塵こつばみじんにすればいいのか？」その通りと頷いた直後、魔理沙が手を前に翳した。確か、ミ二八卦炉とか言っやつを持って。

「右に飛べ！」

言われて横跳びをして、すぐに轟音が耳を劈いた。俺のすぐ真横を、巨大なレーザー砲が通っていたのだ。まあ、つまり、マスタースパークだけど、なんだ。名前を言わなくても放てるんだな。

なんて思いながら、蜂がいた方向に目をやる。後ろね。するとそこには、何も残っていなかった。ああいや、それはちよつと語弊があるかな。木々を薙ぎ倒していたりはしないわけだし。直視できなかったからよく分からないけど、魔理沙は草木を破壊しないように撃つたらしいな。

しかしあの蜂、死ぬ間際に何も言い残すことなく消えやがった。本当は聞きたいことが色々あるんだけどなあ。でも灰塵にしてくれとか頼んだの俺だしなあ。しょうがないか。

「魔理沙、助かった」

「ん、まあこれくらいどうってことないぜ。というか、お前あんな相手に手古摺るほど弱い奴だったのか？」

ああ、そこを説明しなきゃならんな。

「というわけだ」

「なるほど。期間限定吸血鬼体験学習しているってわけだな」

「違うと言いたいけどそれほど違わないからそれでいいよ」

なんで体験学習なんだよ、っていう突っ込みは入れないでおく。

それと今現在、魔理沙の横には女性が一人いらっしやる。魔理沙同様金髪なのだが、長さは肩までで、カチューシャ着用。肌の色は白く、だが病的なほどというわけではない。寧ろ程よくて、その白さが彼女の美しさを際立たせている気もする。

服やスカート、羽織っているケープを見て、どこぞのご令嬢ではないのかとか、若しくは西洋人形とかを思い立たせる。

そんな彼女は、アリス・マーガトロイドと名乗っていた。何と魔法使いなのだそう。でも魔理沙とは違い、人間ではないらしい。

「その吸血鬼話はいいから、寧ろさっきの蜂だかの話の方が重要じゃないかしら？」

彼女は魔理沙がマスパ（マスタースパークだと長いので略してみた）を放った後、その轟音に驚いて出てきたのである。ちなみにこの洋館も彼女の物。それとさっきから彼女の腕に抱えられている人形が俺を見ている気がするんだけど、気のせいかな。

あ、手を振られた。普通は怖いと思うものなんだろうけど、何故だろう。その容姿からか、凄い可愛い。

そんな俺の視線に気付いたのか「この子は上海よ」と人形の名前を教えてくれた。てか上海って。まあいいや。

「よろしく上海」

言って、彼女（？）の手を握ってやった。おお、なんか嬉しそうに目を細めておる。愛いやつよのう。

「貴方、上海のこと気に入った？」

「ん、まあ」

「そう。よかったわね上海」

なんて言うか、アリスさん、上海に話しかけるその笑顔がやばいぐらい素敵です。抱きついていいですか？ ていうくらいに。本当

にもう凄いね。

まあそれはともかく話を戻そう。蜂だ蜂。ということで魔理沙とアリスも、さっきまでの気の抜けた雰囲気はなくしてもらった。

「あれは、俺がいた町にいた妖怪だ。それも、俺が一度倒しているはずの」

「……倒しているって、それは」

「当然、刀でばっさり。三分割ぐらいにはした筈だ」

アリスの言葉を遮って、そう言った。この幻想郷では、有り得ないようなことを、俺はしているはずだ。だから、アリスの表情は若干曇っている。

「俺がやっていたことが正しいとは言わないけど、俺は、やられっぱなしじゃ気が済まなかったんだ。町の人を、友人を、家族を喰われて、だから――」

何を言っているんだ俺は。自分の罪を正当化しようとしてるみたいじゃないか。

この手は血塗れで、誰が見ても汚れていることなど明白だと言うのに。永遠に消えることのないもの。そうだ。俺は、人間に怯えるような妖怪たちまで斬っているんだ。あの頃の俺は、妖怪たちを悪だと決めつけ、そいつらの命を弄んでいた。

最低だ。

楓がいなかったら、俺は今頃、どうしていただろう？ いや、楓が俺に惚れていなければ、か。そうでなければ、俺は楓の仲間たちを斬り殺す、ただの敵でしかないはずで。

なんて言うか、今更だがあいつが味方で本当によかった。俺なんかのことを好きでいてくれて、本当に。出来ることなら、あいつの気持ちに応えたいんだけどなあ。どんだけ待たせてるんだよと、本気で思う。

いくらなんでも、二年以上待たせるといふのは男として如何なものかと。まあ、会えなかったというのも、理由の一つではあるんだけど。しかし仮に彼女がずっと俺の側にいて、答えが出せていたか

と言われると、俺は首を縦に振れない。

ははは、どこまで最低最悪な男だ俺は。

「桐嗣？」

「あ？」

見ると、いつの間にか魔理沙が俺の顔を覗き込んでいた。すげえ至近距離で。だがしかし俺はそう何度も奇声を上げるわけにはいかんのだよ！

「あ、どした？」

「どしたって、お前聞いてなかったのか？」

「ああ、すまん。考え事してた」

はあ、と溜め息を吐かれた。そしてまあいいや、とも言われまして。

「今のところ、お前が倒したはずの奴は、さっきの蜂以外甦っていないのか？」

「ああ、たぶんな。さっきあいつが出てきたのが、最初だ」

もしかすると、他の奴らも甦って俺を殺しにやってくる、なんてことも有り得るわけだけど。その舞台が何でまた、この幻想郷なんだろうな！

「桐嗣は今、紅魔館に住んでいるんでしょう？　なら、外に出ない限りは問題ないんじゃないかしら？」

と、アリス。確かに、レミリアや咲夜さん、美鈴と言った、紅魔館の住人たち、その上、早苗ちゃん、鈴仙、神宮寺三倉と、俺と同等かそれ以上のメンツが揃っている。まあ、鈴仙がどれほどの戦力になるのかは知らないけれど。

それにまだ、俺の会っていない住人が、あの館にはいるらしいし、安全面では申し分なさそうではある。

「でもな。俺は客だし、そんな迷惑かけるわけにはいかないだろ。

これは俺一人の問題なわけだし」

うむ。里の人間や、慧音、魔理沙を巻き込んではいけるけれど、まだそれほど深い関わりを持っていないしね。最悪の場合、俺が死ぬ

ば万事解決だ。俺は自分の町を護りたかっただけで、自分のことまで護ろうとは、それほど思っちゃいない。

いや、昔は生きたいと思っていたけど、今はね。本当はもう、誰も斬りたくないわけで。それならいつそ、死んでしまえばいいと思うのだよ。

というか、以前のように何の抵抗もなく斬れる状態であるなら、俺はとつくに神宮寺三倉を斬っているし、紫さんたちにも斬りかかっている。

本当は分かっているんだ。神宮寺三倉を、普通に三倉と呼んでもいいと思っていることを。寧ろ、呼べるはずなんだ。

俺は認めたくないだけだ。彼女を赦してしまったら、俺は自分の過ちを認めてしまいそうで。それが嫌で仕方なくて。

「そんなわけだから、暫く一人でぶらぶらしてるよ。夜になれば、負けることはないだろうし、何とかなる」

「私に助けを求めてきたお前が？」

間髪入れずに、冷めた目で俺を見て来る。当然相手は、魔理沙なわけだけど、アリスも俺を責めるような視線を向けている。上海だけが、事態を理解していないようだな。

「いきなりだったから驚いただけで、もう大丈夫だ。それに、俺みたいな新参加者が、一人野垂れ死んだところで、魔理沙たちには何の関係もないだろ？」

と言うのは本心ではない。しかし、こうでも言わないと、ね。

「そうか。おーけー分かった。お前が、そういう奴だって言うことがな」

うむ。これでいい。二人とも、機嫌を悪くしている。だがそれも一時的なものだ。アリスは出会ったばかりで、魔理沙だってまだ数日だ。そんな付き合いの人間が一人消えたところで、この世界にはなんの影響もない。

この幻想郷に、俺がいなくなることを悲しむようなのは、二人しかないはずだ。ああでも、妖夢はどうなんだろうな。何気に幻想

郷の住人の中で、一番付き合いが長い。というか、彼女との思い出が一番濃いかもしれない。

まあ、でも、そんなことを考えてもしょうがないだろ。

「うん、じゃあな。……いやあ、あの蜂以外甦っていないといいなあ」

二人に背を向けて歩き出す。ずっとほぼまっすぐ走って来たのだから、迷うことなく外に出れるだろう。

これで俺が生き伸びたりしたら、二人に謝ろうと。

第十二章 無意味の意味（後書き）

さーて、慧音先生はどこにいったのやら。
まあその辺は、次回以降で。

それでは、ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいで
す。

誤字脱字などのご指摘もあつたらお願いいたします。

今回は、神宮寺三倉が頑張る予定。

第十三章 たった一度の恋（前書き）

私には、貴方を愛する資格なんてなかったみたい――。

第十三章 たった一度の恋

その日、桐嗣は帰ってこなかった。

私を残して、どこかへと消えてしまった。

「あと、二日」

紅魔館での生活も、残すところあと二日。これを過ぎれば、私は早苗、優曇華の二人とともにここを出ることになっている。

咲夜やレミリアも、彼が戻ってくる見込みはないと思っているらしい。昨日は私たち客人以外で探しに行ってくれたのだが、見つからなかったから。

何故、帰って来てくれないのだろう。私と一緒にいるのが、嫌になった？ それならそうと、言ってくればいいのに。私は彼の居場所を奪うつもりなんてない。

だから、私が邪魔なら言っただけいい。そうすれば、私は消えるから。貴方のために。

「桐嗣……」

敵だった相手が、こんなに恋しくなるなんて。こんな時が来るなんて、思いもしなかった。彼の顔を見るだけで幸せな気持ちになって、彼がいなくなると沈んで。そんなことが、実際に起きている。今でも、正直信じ難いこと。

彼は私を憎んでいるけれど、それでも相手をしてくれる。それが嬉しくてたまらない。私を無視しないでいてくれる。私を決して嫌わないでいてくれる。

だから私は、彼を好きでいられる。

それなのに、彼はいなくなった。私の前から姿を消してしまった。胸の真ん中に、ぽっかり穴が開いてしまったように、空虚だ。彼に見捨てられたことが、辛くて、悲しくて、もう、嫌になる。

そんなふうに思っていた私に、レミリアが声を掛けてきた。

「いつまで閉じ籠っているつもり？」

部屋に籠つてはいたけれど、鍵は閉めていなかったから自由に入り出来る。部屋に入られて困ることはないから。

「今、早苗たちがまた探しに行ってるわ。一応私も、今夜また探しに行くつもりよ。そのとき、一緒にどう？」

「一緒、に？」

「ええ」

ベッドの上で蹲る私と、視線の高さがほとんど変わらない彼女と目が合った。彼女は、微笑んでいる。でもそれは、楽しんでいるわけではなく、憂いでいるような顔。

「私も、彼のことは心配なのよ。折角デートの約束だったのに、それを反故にされるのが嫌だ、というのもあるけれど」

デート？ 桐嗣が？

「とは言つても、二人きりで話をするための口実だから安心していいわよ？ 彼を取ろうなんて気はないわ」

「……そう」

一瞬驚いたけど、そういうことならと、思えた。でもやはり、デートを承諾されたことが羨ましくもある。私からの誘いなら、二の句を告ぐことも出来ずに断られそうだから。

「それじゃあ、夜まで休んでなさい。私も少し寝るわ」

そう言つて、部屋を出ていこうとする少女は、扉に手を掛けたところで振り返る。今度は、見た目相応の子どものらしい笑みを浮かべて。

「次に彼と会つたとき、貴女の想いは届くはずよ」

あの顔からして、冗談かと思つてしまう。というより、信じられない。私を置いて行つてしまったというのに、彼は私を受け入れてくれるのだろうか。逆に斬りかかってくるのではと、思う。

「それでも、いい。避けられるよりは、ずっと」

レミリアが出て行つてから、そう呟いていた。

何故、こんなに好きになつてしまつたんだろう。この想いは決して届くはずがないのに。届いてはいけないのに。そんな想いなら、

最初から抱かなければよかったのに。

「……ふう、駄目ね。閉じ籠っていると、こんなことばかり考えて」
折角搜索側に誘われたのだから、それに備えておこう。

もし見つけられたら、私はその瞬間から二度と離れないようにしよう。当然、距離はそれなりに保って。彼に拒まれない距離を。

ただ、以前よりも近くでいることを認めてもらう努力も怠らないようにしてはいけない。レミリアを羨み、内心嫉妬もしているのだから。これ以上今の距離で満足してはいけない。

少しでも距離を縮めて、彼に見てもらおうのだ。

よし、これを当分の楽しみとでもしておこう。

で、それから夜までは特筆するようなことなく、結局レミリアが来るまで部屋に閉じ籠っていた。

というより、彼との今後について色々考えたら、いつの間にか時間が過ぎていたのだ。レミリアにそれを言ったら「幸せな子ね」なんて笑って返されたけど、どういうことかしら？

まあ、確かに彼といることを考えたら幸せな気分にはなるけれど、肝心の相手が行方不明なのだから、幸せでも何でもない。

それなのにレミリアはニコニコと笑顔を絶やさないでいるし。寧ろニヤニヤって感じね。頭叩こうかしら、と思っていながら歩いていたら、途中で咲夜とも合流し、結局実行することなく外に出た。

ずっと赤一色の場所にいたから、夜暗の中でも特に嫌な気分にはならないわね。それどころか、この色のほうが落ち着く。町の夜を統べていた時代の所為かも知れない。

あの頃のことは、出来れば忘れたいと言うのに。いえ、違うわね。どちらかと言えば、無かったことにしたい。彼との出会いもなかったことになってしまっただろうけれど、憎まれも怨まれもせずいられたはずだから。

彼に好意を抱くようになったけれど憎まれている今と、どちらのほうに幸せなのかと聞かれたら、それはさすがに答えられないけれ

ど。タラレバの話なんて、し始めたら切りがないし止めておこう。
うん。

あと僅か一時間ほど前に起きたことを回想していてもしょうがない。今は、目の前に広がる現実を見なくては。

レミリアと咲夜の二人と別行動を取り始めてから十分ほどしか経っていないのだけど、一応桐嗣を見つけることが出来た。場所は、人里に程近い所にある大きめの平屋。正面には寺子屋の文字があったのだけど、中から人の気配を感じて中に侵入してみたというわけ。

そこで見たのは、銀色の髪が印象的な、美しい女性。女の私から見ても、本当に綺麗だと思う。もし欠点を挙げるとするならば、少しばかり背が低いところか。美しい顔立ちと若干不釣り合いな気もするけれど、それほど違和感はないからやはり欠点にもならない。そんな彼女が、壁に寄り掛かって座っている桐嗣に対して抱擁していたのだ。

窓から差し込む月の光に照らされて、その髪が美しく輝いているのに見惚れたりするのかなあ、なんて考えている場合じゃない。いい加減現実を直視しろ、私。

よく見たら、桐嗣の腕が彼女の腰に回されている。

本当は声を上げたいくらいに、私の心は乱れている。けれど必死に抑え込む。私は、彼に迷惑を掛けることはしない。だから、大人しく去らなくてはいけない。それまでは、我慢だ。

「待つんだ」

折角、出ようと思っていたところで声を掛けられてしまった。

「君は、私と彼との関係を誤解しているんじゃないか？」

女性と桐嗣、二人の視線が私へと向けられている。女性は少し困ったような表情で、桐嗣は僅かに驚いているようだった。私の接近に気付かなかったから、だと思っ。

「私は上白沢慧音。この寺子屋で教師をしている。君は、神宮寺三倉、だろ？」

どうやら、桐嗣から話は聞いているよう、ね。一応、顎を引いて見せた。

「丁度いい所に来てくれた。彼から、君に聞きたいことがあるそうだ」

「私、に？」

桐嗣に視線を向けると、真剣な表情に変わっていた。あれ、少し頬が痩せこけている？ どうしてだろう。

「ああ、俺から、お前に」

「……何？」

「お前は、俺のことが好き、か？」

「……………え？」

何を言っているのか分からない。そんなこと、確認するまでもない。何を今更、そんなことを言っているの？

「いや、ただ確認しておきたいだけなんだ。お前が、俺のことを好きなのかどうかを」

「そ、それは……好きに決まってるじゃない」

そう、私は、貴方のことが好きなのよ。揺らぐことなどあり得ないほどに。何故ここまで想えるのか、自分でも分からないけれど、好きになってしまったのだからしょうがない。

「じゃあ、お前は関係ないと思っていいんだな？」

「？ 何のこと？」

一体何と関係がないというのだろうか。さっぱり分からない。彼がやつれ切っていることと、何か関係があるの？

「三日目、俺は一人で人里まで行っただろ？」

「ええ」紅魔館に来て三日目のこと、よね。

それなら、知っている。私はそれを見送りまでしたのだから。

「あの日、俺は蜂に襲われた。お前もよく知っているはずの、な」
蜂？ 私が知っている蜂と言ったら、神宮町にいた妖怪のことしかない。それに、桐嗣が襲われた？

「ちよっと待って。あれは貴方に殺されたはず。仮に生きてたとし

て、貴方の敵でも何でもないでしょう？」

「俺はほら、今は昼間だと弱いから。その上相手は、強力になっていた。だから逃げ惑って、魔理沙に助けてもらった。まあその後、俺は一人で行動していたんだが、それから続々と、休む間もなく襲われ続けたんだ。昔、殺したはずの相手にな。」

そいつらは一様に“あのお方”とやらのおかげで甦り、俺への復讐のチャンスを得たそうだ。

そして俺に挑んで来ては、再び敗れ去るというのを繰り返している。倒した順序は、前回とは別で、そこには規則性だとかそう言うのではない。徐々に強くなっていたかと思えば、急に弱いのが現れたりして、もしかしたらそうやって俺を動揺させる作戦かと思いきや、そういうわけでもない、というところでお手上げ状態だった俺は、疲労困憊、満身創痍な状態で闘い続けていたら、いつの間にか慧音に助けられていた、と言うわけだ。

あとは二人でいろいろ話していた結果、お前が一枚噛んでるんじゃないか、と疑ったわけだけど、その顔からしてそれはないうだな」

嘘だ、と言ってやりたい。本当は、まだ私のことを疑っているはずだ。彼の目は、そういう目をしている。でも言えない。言ってしまえば、私はもう、彼の傍にいらなくなってしまふ。

私は、二度と離れないと誓ったのに、そんなことをしてしまつたら駄目だ。だから唇を噛んで、耐え忍ぶ。何が何でも、言うてはいけない。どんなに悲しくても、どんなに苦しくても、その一言を言うてはいけない。

今以上に辛くなるから。

それなのに、私の口は紡いでしまふ。自分を絶望の淵から突き飛ばす言葉を。

「そんなこと言って、どうせまだ信じていないんでしょう？ 私が彼らを甦らせ、貴方を殺そうとしたと、まだ疑っているんでしょう？」

声が震えている。他人事のように、そんなことを思える自分がいて、それに驚いてしまう。

「なら最初からそう言えばいいじゃない！　そして、もう二度と俺の前に姿を見せるなと言えがいい！　いなくなるだけじゃ不安ならその刀で斬ればそれで済む話でしょう？　ほらさつさとやりなさいよ！　貴方にとって私は、そういう存在なんだから！」

叫んだ。震える声で、瞳から雫が零れるのを抑えようとせず、思い切り。ほら、柄にもないことをしてしまったから、彼が驚愕している。そしてきつと、内心では私に落胆している。そうに違いはない。だから、早く斬って。私を、死なせて！

何で刀も持たずに近付いて来るの？　何で微笑んでいられるの？　私を侮蔑しなさい！　そして息の根を止めて！　結局私は、希望なんて見てはいけなかったのだから。レミリアの言葉を、鵜呑みにしてしまった自分が恨めしい。

あんなの、私を元氣付けようとして言った出まかせに決まってるのに。

本当に私は愚鈍で、醜悪な存在だ。こんな女が彼の目の前にいていい筈がない。傍にることすら赦されるはずがない。

だから、近付かないで。今までだって、こんなに近くに寄ったことなんてなかったのに。何で近くにいて欲しいときにはいないのに、遠ざかりたいときに限って、手を伸ばせば届く距離にいるの？　そんなに私を苦しめるのが楽しいの？

「……三倉」

名前も、それだけで呼ぶ。普段ならフルネームで呼ぶのに。

「三倉、まだ泣いてる」
また。

泣いてるから何だと言うの。貴方には、関係ない。私のことなんて、気に掛ける理由がないでしょう。

もう、見上げなければ、彼の顔が見えない距離にまで来ている。

「……お願いだから、私を殺して」

胸が潰れてしまいそんなほどの思いをして生き永らえるなんて、出来ないから。

もう、貴方に付き纏ったりしないから。だから。

「私を、消してよ」

涙が、止まらない。頬に伝う雫の跡は、渴くことを知らないようだ。

「消してよ!」

そう叫んだ直後、私の顔を、温かい何かが包み込んだ。

温かい何か。それを得た代わりに、私は視界を奪われている。何も見えない。少し硬く、しかし心地良いそれが、桐嗣の胸だと気付いたのは、彼が私の髪を撫でたときだった。

慈しむように、愛でるように、優しく、丁寧に、慣れていない不器用な手付きで。

「嘘だなんて、思っ
てない。思っ
てないよ。俺は、お前を信じてる。
だから、そんなふうに泣かないでくれ」

何故? 何故私に、優しくするの?

本当は、彼を突き飛ばして飛び出したい気持ちで一杯なのに。私は、彼の腕に身を委ね、ただ瞳から落ちる雫が止まるのを待っていた。

第十三章 たった一度の恋（後書き）

三倉は本当は良い子なんです。

まあ、その辺もここから徐々に！。

それでは、ご意見・ご感想、気軽に書いていただけると嬉しいですよ。

誤字脱字などのご指摘もあつたらお願いいたします。

次回は桐嗣、告白？

第十四章 偽らない気持ち（前書き）

今日の俺の言葉はお休みです。

いや、嘘^{うそ}だけど。

第十四章 偽らない気持ち

俺の膝の上に頭を乗せ、彼女は寝ている。

泣き止むようと抱き締めていたら、余計に泣かせてしまい、結局泣き疲れて眠るまで、俺は何も出来なかった。

そんな俺を非難するような目で、先生が見ている。当然、慧音のことであるのだが、しかしなんていうか、恥ずかしいところを見られたなあ。場所も弁えずに抱き付いた俺の姿は、滑稽でしかなかったろう。

「桐嗣」

「はいなんでしょう」

「お前、その子がそんなになるまで追い詰めていたのか？」

「みたい、ですね」

「最低、だな」

仰る通りで。

俺は、彼女に対する負の気持ちだけで、彼女のことなんて何も考えていなかった。彼女の想いを利用して、少しずつ傷を深くして、気付いたときには手遅れ。そういう最低な行為を、俺はしていたんだ。

あの頃と今の彼女は、違うのに。俺は知っている。あの町でしてきたことを悔いていることを。

それなのに。それなのに俺は！

辛そうな顔で眠る少女の横顔を、優しく撫でてやることしか出来ない。今の彼女に、好きだと言っても、受け入れられるはずがない。「今日はもう遅いから、ゆっくりして行くといい。紅魔館の連中には私から話しておくから」

「……ああ、頼む。それと、ありがとな」

「礼には及ばないさ。私はこういうことをするのが性に合っているし、協力者もいる」

協力者？ ああ、前に何か教えてもらった気がする。覚えてないけれど。初めて会ったときにちよろつと聞いた気がする程度だから、しょうがないか。

「その協力者で行ってくるのか？」

「まさか。彼女にここの周囲を見張らせて、私だけで紅魔館に行くんだ」

それは正直、心配である。俺の表情で察したのか、柔らかい笑みを浮かべて、俺を安心させるように言う。

「安心しろ。私はそれほど弱くない。最悪危なくなれば逃げる程度のことは出来るからな」

絶対にやられはしないと言い切らない。だがそれだからこそ、彼女は信頼に足るのだと思う。身の危険を感じれば逃げ切って見せるだけの自信ぐらいはあるのだと。

そこまで言われてしまったら、俺は引き留めることは出来ない。ただでさえ世話になっているのに、ここで彼女を足止めするなんて出来っこないから。

「分かった。じゃあ、後は頼んだ」

「ああ、一応布団なら用意してあるから、と言っても私が寝るのに使おうと思っていたのだが、とにかく寝るならそれを使うといい。まあ、言わなくても分かると思うが、一つしかない布団の中で、そういう行為に励むのは遠慮してもらえると助かる」

なんて言いながら、子どもっぽい笑みを浮かべて去って行った。

いやあ、いくらなんでもそれは有り得ませんから。

そりゃあ、俺はもう彼女の気持ちを受け入れるつもりでいるし、俺からもこれからもっと近付けていけたらと思うけれど、まだ早いだろ。

しかし三倉って、よく見ると凄く可愛いというかなんというか。憎しみ補正無しで見ると、やばいんですけど。

整った顔立ち。長い睫毛。黒く綺麗な長髪。白い肌。首から上だけ見ても、いいところしかない。首から下は、まあ人の好みにもよ

るが、薄いんだよな。どこがとは言わないけれど。

レミリアといい勝負。いや、どこがとは言わないってば。

うむ。少し落ち着いた。寧ろ大分落ち着いた。三倉の肢体を嘗めるように見ていたら落ち着いた。噓だーよ。

そういえば、布団か。どうするかなあ。あいつ部屋の場所までは教えていなかったから、布団で寝かすにしてもまず部屋を探す所から始めなくてはならない。まあ、広い面積のほとんどが、寺子屋として使われているから、部屋数は多くないし探せばすぐ見つかるんだろうけれど。

探している間、三倉をどうしたものか。ここに置いて行くか、抱くかなんかして探すか。どちらもデメリットが存在して、どちらのほうがりきつかということを考えると、すぐに答えが出ない。

まあでも、あれか。起きたときに俺が傍にいないなんてことになったら、本当に絶望しかねないしな。うむ。後者に決定か。

というわけで三倉の膝裏と背中の手をやって運んでいるのだけれど、これはあれか。所謂お姫様だつこというやつか？ まさか俺がこんなことをする機会が訪れるとは思ひもしなかった。しかも相手が、かつての敵というのだから驚き倍増だー。

して、部屋は見つかってあとは下ろすだけなのに、俺は一体何を躊躇っているんだ？

うわ言のように俺のことを呼んでいるからって、下ろすのに問題ないだろうに。確かに可愛くて、愛おしくてしょうがない状態ではあるけれど、だからってさ。

彼女に触れていると、かつての憎しみだとかそういうのが、どんどん引いて行くのが分かる。

「お兄様、赦し、て」

唐突に、俺の名前ではなく、別の男を呼ばれた。一瞬嫉妬しそうになるが、その必要はないよな。お兄様だし。しかし赦して？ どういうことだ。

三倉が他に何か言いかと期待していたが、後に続いたのは少し不

定期的な寝息だけだった。

翌朝、目覚めると目の前に三倉の顔があった。

勘違いして欲しくないのと言っておくと、別に首が転がっていてと言っわけではない。単に壁に寄り掛かって寝ていた俺の顔を覗いていたというだけのこと。

「ん、おはよう、三倉」

「おはよ」

む。避けられるかと思っていたが、そうでもないか？　なら。

「ふきゅっ！」

思い切り抱きしめてやったら、可愛い声で鳴かれた。惚れるぞ！

「いつから見てた？」

「さ、さっき。私も起きたばかりだから」

「そっか。じゃあ別にキスしようとしてたわけではないんだな」

「……えっと、それは」

言い淀むのかよ。それは肯定として受け取るしかないじゃないか。しかしやっぱり、もうこいつを敵だとは思えないな。あの頃の禍々しさなんて、どこにも見えない。ただ俺への感情が表立っていて、寧ろ眩しいくらいに純粋な女の子だ。

「あ、そういえば慧音帰って来てるわ」

うわ、話し逸らされた。

「そっか。後でお礼言わないとな。あと紅魔館に帰ったら謝ろう。」

いや、その前に魔法の森で魔理沙とアリスにも謝るのが先か？」

結局、死を覚悟していた俺は死ななかったわけで。どちらかというと、死ねなかったかな？　昼間は誰かしらに遭遇して、助けてもらっていたからなあ。魔法の森を出たあとに出会った彼女たちにも、まだどこかで会うことがあったらお礼言っておこう。

夜は夜で、以前より俺の身体能力が増してる所為で、一人で十分だったし。やっぱり俺が死ぬ可能性は、陽が出てる時間帯にしかなかった。

まあしかし、俺が昔倒した奴らは、まだ二割ほど出て来ていないから、油断は出来ない。

なら魔理沙たちへの謝罪等は、そいつらを片付けたあとで、かな。それにしても、何故あのときの俺はあんなにネガティブ思考だったんだろうなあ。自分でも理由がさっぱりだ。

三倉に裏切られたと思って、それがショックだったのか？ となると俺は、かなり前から三倉に惹かれていたということになるのでは？

……。

やばい。恥ずかし過ぎる。今まで興味がないように振る舞って、憎んでもいたはずなのに。これじゃあただ好きな人を避けているだけの馬鹿野郎じゃないか。

「いつから俺は好きだったんだ？」

「ふえ？」

ああ、声に出してしまった！ 三倉がビクツと驚いて俺を見てるよ。

「いや、なんでもない」

「う、うん……」

小さく頷いて前を向く三倉。っておい。三倉？ 君はいつからそんな所に座っているんだい？

ちなみにそんなところと言うのは、俺の足の上。俺が胡坐を掻いているのをいいことに、そこにちょこんと座っている。しかもその彼女を、俺は抱きかかえるようにして手を前に回しているのである。何だ。考えている隙にこんなことになっているとはどういうことだ？

あ、髪からいい匂いが。昨日の夜は風呂に入っていないはずなのに！ もしかして実は起きたばかりって言うのは嘘かな。どう考えても風呂に入っていない人の匂いじゃない。もうふがふがしたい。すんすんのほうがよさそうだけど、ふがふがと遠慮なく豪快に行くのが男である。嘘である。

そもそもそんなことしませんでば。俺はそんなフェチズムの持ち主じゃありませんぞ。

でもこの距離だと、嗅ごうと思わなくても匂いがしてしまうんだよなあ。別に甘い匂いがするわけでもないけれど、彼女特有の匂い？ 違うか。甘ったるくなく、気持ちいを落ち着かせてくれる匂いがして、心地いい。

いやー、このままずっといたら、本当に匂い好きになりそう。

もういつから三倉のことを気に掛けていたかなんて、そんなこと考える余裕もないぞ。

本当なら憎むべき相手だったはずなのに、なんてことももう思えない。

「さて、そろそろ行くか」

寝起きだからってのんびりしてるのもね。

「朝食はいらないのか？」

というのが三倉の声でないのは、聞いている俺だけじゃなく読者にも分かるだろう。読者って何の事だかさっぱりだが。

「えと、出来てたりするの？」

音もなく開けられている襖から、慧音が入って来ていたわけで。

三倉は恥ずかしそうだなあ。あはは、きゃっわいー。

「一応、な。だから食べてから行ってもらえると、食材が無駄にならないで済むんだが」

「なら頂こうかな」

そうしてくれ、なんて言い残してさっさと部屋を出ていくのを見届けて、俺たちも立ち上がる。

三倉の顔は、熟れた林檎のように真っ赤のままだけど、気にしない気にしない。

「行くぞ」

「……うん」

よし、それでは。

手を握って、俺が先に歩く。

ちっちゃい手だなー、なんて思いながら。

俺たちの先に待ち受ける不幸なんて、知る由もなく、ただ今の幸せを噛み締めながら。

結局、復活したあいつらの主は誰なんだろうね。

そんなことを考えながら、食卓へと向かった。

第十四章 偽らない気持ち（後書き）

前章より短いんじゃないかね？　ってくらいに短かった今回。次回からまたながったるいお話になりそうです。

そろそろ敵も活発になるんじゃないかな、と。

それでは次回、「レッツ！　コンバイン！」をお楽しみに。

あ、嘘です。

第十五章 デート to デート

紅魔館お泊まり企画最終日。

結局俺は、紅魔館の住人全員と会うことが出来ないまま終わりそうである。理由は、昼間からお嬢様とのデートということで外に出ているから。

三倉と咲夜さんに見送られてきて、現在レミリアと二人きりで甘味処にいる。

ちなみに人里とのいざこざは慧音が解消してくれたので、問題なしだ。この辺のことは、レミリア達は知らないだろうから黙っておく。

「さて、散々私たちを困らしたのだから、今日は貴方の奢りよね？」

「まあそれで気が済むのであれば。一応咲夜さんからのお遣いのおつりがあるし」

「それ、足りるの？」

「さあ」

実際は、今回のことで別に咲夜さんからお金を預かっているのだが、デートなんだし俺が全額出すつもりで行こうぜ、的な。本来デートの相手を務めるはずのあの人は、この光景を見たらどうするだろうな、なんて考えながら注文した物が来るのを待つ。

「それにしても、大事に至らなくて安心したわ」

昼間が危険一杯だったのは誰の所為だろうね、とは言わないでおう。そんなことして永久に戻れなくしてやるなんて言われたらどうしようもないからね。

そういえば俺のこの状態も、今日で最後か。うーん、感慨深くもなんともないね。早く戻りたい。そうすれば昼間に襲われても返り討ちにしてやれる、はず。

俺だって昔よりは強く、なってないか。寧ろ弱くなってる。ある程度調子を取り戻したけれど、完全復活と言うわけではないからね。

あれ、もしかして戻るイコール勝てなくなる可能性が出てきたか？ いやいや、吸血鬼パワー体験中の戦闘で勘は完全に取り戻したし、心配いらないだろう。それにこれからは常に、三倉が傍にいるはずだからな。よし、問題解決。

てなわけで話を戻そう。

「心配してくれていたわけだ？」

「もちろん。もし死なれでもしたら、デートが出来なかったわけだしね」

嘘仰い、とは口にしない。

「まあ、そういうことにしといてやる」

「そうして頂戴」

そんなところで、まるでタイミングを見計らっていたかのように、餡蜜が運ばれてきた。正確には、白玉クリーム餡蜜だったはず。ちなみに二人とも同じものを注文している。

最初は「えー、二人で別の頼んで、味見し合う形であーん、ってしようよー」なんて言われていたのだけれど「レミリアが好きなのを俺も食べたい」と言ったら一瞬で了承された。一体何が起きたのかさっぱりだ。

「ほらあーん」

とか言いながら口を開けているのはおかしいだろう。まあいいけどね。てかまだ黒蜜掛けてないんだけどいい？ あ、駄目。分かったよ。

「んじゃ、ほい」

ガツと突っ込むのもまた一興かと思っただけけど、女の子相手にそれはマズイだろう、という俺の脳内首脳会議の結果が出たので、仕方なく優しく食べさせてやる。

あーもう、美味しそうに食べてる顔も可愛いなおい。妹に欲しいぞ。でも彼女の方が年上なんだよね。じゃあ姉？ ないわー。

「今失礼な想像しなかったかしら？」

「いや全然。レミリアを妹にしたいなあ、とかかなり健全な想像し

かしてないから」

「妹？ あれ、やっぱりお兄ちゃんって言われたい人だった？」

そういえばそんなことも言ってたなあ。誰か覚えてる？ こんな台詞。俺は今の今まで忘れてたよ。

「違う違う。単にとても可愛いからそう思っただけ。別にそう呼ばれたいとかっていうことはないぞ」

「……ふーん、そう」

頬を朱に染めて、小さく笑むレミリア。可愛いと言われて嬉しかったのか？ 彼女なら、もう言われ慣れている気もするんだが。嬉しいものは嬉しい、ということにしておくかな。

さて、ここまで周りの描写を一切してこなかったけれど、理由は簡単。何か視線がね。突き刺さるように俺とレミリアに向けられているんだ。まあ、レミリアは背中に見えるものの所為で、吸血鬼だと言うことはモロバレだし、それで見られるのは分かるんだが、何故俺まで注目されるのか。

いや、先日の事件が原因なら分かるんだけど、明らかに違う。というか、さっきカップルで来ていた客が「あの人殺人犯じゃなかったけど、もしかしてロリコン？」とか言ってたなあ。

ちなみにこの発言は、レミリアに食べさせた直後にありました。敢えて聞いてないよう装っておいたけど。

溜め息でも吐いてしまいたい状況だな。ああほら、また横切る客が俺たちを見てるし。俺はどうしたらいいんでしょう。とりあえずレミリアの幸せそうなチャーミングフェイスで和んでいたらいいのかな。秘技^{ひき}、現実逃避！ てな感じで。

「うー、そんなに見られたら恥ずかしいじゃない」

なんて言われるくらい凝視している俺。そして彼女のその言葉も無視して見る見る見る。

「そんな見ないでっば」じー。「止めなさい！」じー。「うー」じー（俺）。じー（レミリア）。じー（俺）。

っは。お互い見つめ合う状況になってしまった。しかもレミリア

は頬を赤らめながら上目遣いで見て来る。これがあの有名な見つめ返し！ いやそんなもん知らんけど。しかしここで退いたら負けを意味する。こんな所でこんな勝負をして何になるんだ、という突っ込みをあらゆる場所から頂けそうな気もするけれど、俺はこの一言でそれらを一蹴しよう。

どんな勝負だろうと手を抜かない。それが男って奴だ！

とまあ、普段から全力投球をしていない俺が言えたことじゃないけどさ。でも、妖怪退治をしていた頃の俺なら、この言葉もありだろう。というわけで、勝負続行。

しかしこれ、周りから見たらどう映ってるんだろうね。やっぱりカップルには見えないだろうし、一応執事の格好で来てるから、主従関係？ でもフランクな関係を見ていると、主従にも見えないよ。うな気もする。少なくとも俺だったら……幼女好きな男が幼女と戯れているという図しか浮かばないんだけどこれヤバくない？

まあ、レミリアと二人きりで来るなんてことは、もう二度と無いだろうし大丈夫かな。大丈夫であると信じたい。

「で、桐嗣」

「ん？ はいなんでしよう？」

いつの間にか真顔に戻っているから、俺も真面目に行こうか。何が何やらさっぱりだが。

「見られてるわよ」

「そりゃあまあ」

「違う。遠くから、誰かが見てるわ。私たちを、殺気に満ち満ちた目で」

遠くから、と言われても俺は感じないんだが。でも彼女が嘘を吐いているはずがないと思う。うーん、そんな殺気むんむんなら俺でも気付けるはずなのになあ。まさか人里の外から見られているとかいうことは……ないか。いや、あつて欲しくないんだけど。

相手はもちろん、目の前の少女も、かなりのハイスペックということ。どちらともぶつかりたくないな、と。

「ここから出たほうがいい感じ？」

「……そうね。いつ襲ってくるか分かったもんじゃないし、さつさと引き上げましよう。それから、いつ来てもいいように、帰りは出来るだけ日蔭の多いところを通って行きましよう」

了解、と。

しかしあまり危機感がないな。いや、レミリアではなく俺が。レミリアは自分たちに向けられていると言っていた殺気だが、本当に俺は一切感じないわけで。それはつまり、レミリアのみに向けられていると言ってもいい。

そして今、俺たちのこの状況を見て怒れる相手と言ったら、俺は一人しか知らない。

神宮寺三倉。恐らく彼女だろうな。

昨夜も「え、私を置いて行くの？」とまるで捨てられた子犬のようを目を潤ませていた。きっと俺があーん、とかやってるのを見たんだろうな。

どこから見てるのかまではさっぱり分からないけれど、確実に見てる。

というわけだから、あとで謝っておこう。一応大事にしてやりたいという気持ちに嘘も偽りも一切ないからな。いや、一応じゃなくて。

まあ、もちろん紅魔館に戻った後、こっ酷く説教を受けたのは言うまでもないので割愛。

「一応、博麗神社に行ってみようか」

と提案してみたのは、日付も変わって紅魔館を後にし、レミリアと来た甘味処に三倉と二人きりで来て、その上食事も終了した頃だった。

結局鈴仙とはほとんど会話らしい会話をせずに別れてしまったのは、非常に遺憾である。てか何か話した？ 少なくとも描写するよな会話は一切なかった気がする。空気になりかねないぞ、とは思

ったけれど、きつとどこかで何かしらの活躍をしてくれていたであ
ろうと予想。

まあ、早苗ちゃんもあの暴走以外は対して出番なかったしなあ。
やっぱり料理対決の結果がいけなかった気がする。

でも過ぎたことを言ってもしょうがないので忘れよう。一応二人
とはある程度の親睦を深めることが出来た、ということだけでも収
穫だろう。

いつどちらかの場所に訪れることになるか分からないし。

「霊夢に挨拶？」

何のだよ。

「え、えと、二人が」

「オッケー、ストップ」

「あ、うん」

三倉が何を言い出そうとしてるのか察してしまったぜ。これが二
ユーなんちゃらの力か。月は出ているか、みたいだね。

それはさておき、顔を茹で蛸のように真っ赤にするほど恥ずかし
いなら言わなきゃいいのに。いや、俺が言わせただけでも。

「まあ、それは別として、三倉が他に行きたいところがなければ、
と思ってるんだけど」

少し首を横に傾けて、考える素振り。三倉は考えるときには首を
傾げ、その方向に視線を向ける癖があると見た。うん、今見て気付
いただけなんだけどね。

そういえば店員さんは俺を見てどう思うだろう。昨日カップルで
来たっぽい男が、別の女を連れて来ている、ということに気付いた
りしてたら変な噂立ちそう。

ちなみにここに来た理由は、レミリアが三倉も連れて行けと言っ
たのと、三倉からも頼まれたから。ああ、違う。かなり強制力のあ
る威圧的な表情で言われたから、頼まれた、というのとは違う。気
がする。

「特に、ないかな」

「そつか。じゃあ、そろそろ向かうか。二日以上幻想郷を放浪してたから、ある程度地理は把握してるぜ」

と、自信満々に行ってみるけれど、あの話はあまり詳しくしたくないので、聞かれたらはぐらかさなくては。三倉を疑う原因となる奴らの発言とか、そういうのも全部伏せよう。あとは俺を助けてくれた妖怪たちのことも今はまだ。

実はそこに鈴仙が含まれているのだけれど、まあ機会があったら話そうと思う。

「で、何で博麗神社なの？」

ああ、それをまだ話してなかった。

「本当は魔理沙とその友人に用があるんだけど、今から行くと夜になるから危険だろ。で、その二人が頻繁に訪れる博麗神社にいれば、もしかしたら今日中に安全な場所で会える、というわけだ。あとは料理対決での罰ゲームが何だったのか聞くのも目的の一つだ」

まあ、霊夢は鈴仙とのペアだったから、これから罰ゲーム執行、ということも考えられるけどね。だとすると鈴仙ハードスケジュールだなあ。紅魔館ではあまりゆっくりしていなかったみたいだし、そこに罰ゲームと言う追い討ちがあったりしたらと思うと、同情するしかないな。うん。

「罰ゲーム？ あ、あれなら何やるか知ってるわよ」

「へ？」

「昨日の夜、紫が来て教えてくれたから」

うわー、唐突。その上昨日ってことは、やっぱり鈴仙もやらされるんだろうな。

「でも桐嗣に教えちゃ駄目って、言われてるんだけど」

「あー、それならいいよ。どうせ神社に行けば分かるだろうし」

申し訳なさそうに頂垂れる三倉の頭を撫でてやる。何にも悪いことしてないのにそんな顔しないでいいっての。

それにしても、三倉を受け入れるようになった途端、有り得ないくらい可愛く見えるから困る。拳動の一つ一つに可愛らしさを感じ

てしまうのだ。

負の感情と言うファインダーを通して見ているのといないのでは、これほどまでに差が出るとはね。

いや、まだ一切そういう感情がないとは言い切れないか。でも今は、俺も三倉に対して大好き光線発射中なのだ。これが一時的なものだろうと知ったこっちゃない。

「じゃあ、出ようか」

「ええ」

ぱぱっと会計を済まして、外に出る。店員と顔を合わせるのも嫌だからね！ 描写も一切なしだ！ 見てないから！

なんてことをして暖簾を潜って出た瞬間、顔が急接近してきた。

見事に唇同士が合体、みたいな高さだったけれど、瞬時に三倉が俺を突き飛ばしてくれたおかげで、大事には至らなかった。あれ、日本語おかしくない？ まあいいや。精神的な意味で、言うことにしておこう。ぶつかりそうになった相手と俺、お互いに。

「危ないわね！ ちゃんと前を見て歩きなさいよ！」

とか暖簾が邪魔でそんなこと出来るかい、と叫びそうになって気付く。

緑色の癖のある髪。真紅の瞳。白のカッターシャツに赤いチエツク柄のベストと、それと同じ柄のロングスカート。そして特徴的なのが、日傘。幻想郷では日傘を持ち歩く人など見たことがないからな。

まあ、ともかくこの見た目で、俺は一度会ったことのある相手だと認識した。

「すいません幽香さん^{ゆづか}」

「って、桐嗣じゃない。奇遇ね」

「ですね」

とまあ、お互い知り合いなのは、お察しの通り（だと思う）彼女は俺を助けてくれた妖怪その一だからである。

ちなみに苗字は風見^{かざみ}。美しい容貌の持ち主で、尋常ではない空気

を持ち合わせている彼女は、列記とした妖怪で、それも幻想郷では古参の一人だそう。紫さん同様、見た目じゃわからないよね！

あ、共通点は傘か。まさか強い妖怪は傘を持つ、だなんてことはないだろうね。これは偶然だということ。ていうか幽香さんの場合、単に日差しが苦手ってただけかもしれないし。

しかしその日傘も今は畳まれている。ここの店に来た、ということでもいいのかな。

「桐嗣、この人は？」

と、三倉と幽香さんがお互いを指差して言う。おお、何気にシユールな光景。携帯カメラがあつたら撮りたいね。

「えっと、とりあえずお互い自己紹介したほうが手っ取り早いと思うんだけど」

と言うことで二人が名乗り合う。そして何故かそのまま店の中にええ、三人で。店員が「また別の女かよ。あ、もしかして修羅場？」みたいな表情で見て来てるけど無視無視。実際はそんなじゃないし。

「で、この子があの神宮寺三倉なのね」

まるで、品定めをするかのような目で三倉を見る幽香さん。そういえば助けてくれたときにある程度のことは教えたんだっとなあ、と。

三倉が何で知ってるの？ という顔でこちらを見てるので、事情説明してあげる。微妙に納得がいていないような表情だけれど、理解はしてくれたようで助かった。一番納得がいていない点は、幽香さんの強さ、かな。

まあ、そりゃあ見た目は一美少女だけれど、それはこの幻想郷の妖怪たちの共通項、ということでもいいんじゃないでしょうか。幽香子さん、紫さん、文さん。この辺は俺じゃあ太刀打ちできそうもない。気がする。少なくとも本気で殺し合いをしたら勝てないだろうなあ。あ、あとレミリアもかな。たぶん。

そしてそれを打ち負かしたという霊夢にも、俺は勝てないだろう。

で、その俺じゃあ勝てない相手リストにこの幽香さんも追加されているわけで。

さてそろそろ世間話スタート。

「幽香さんは、デザートか何か食べに？」

「まあね。ここはお気に入りのよ。特にあんみつが」

なんて言いながら店員に注文する幽香さん。

わー、俺と好みが一緒ですねー、なんて言ったら、三倉が「私も！」と子どもっぽく言い出しかねないので自重しよう。見てみたいとは思うけど、他の人に見せたくないのだよ。

「それで、貴方たちはこれからどこに行こうとしたのかしら？」

紅魔館お泊まり企画が終了している、ということまで分かっているような言い方だな。一応大まかに説明したとはいえ、そこまで覚えていたらすごいぜ。俺なら確実に忘れてる。まあ、自信満々に言うことじゃないけどねー。

「とりあえず博麗神社に行こうかと。そこなら俺が会いたい人は大体会えるだろうし」

「そうね。その勘は当たってるわよ。ちなみにそこによく入り浸る連中の中に、私もいるのでよろしく」

何がよろしくなのだろうか。まあ、また会えるというのは嬉しいと思うけど。幽香さんいい人だしね。

「あ、じゃあどんなのがよく来るのかって分かれば教えてもらえます？」

「ええ、いいわよ。と言っても、結構な数がいるから、そうね。宴会以外でもよく来るのにときましようか」

「お願いします」

「面倒だから名前だけどんどん挙げてくわね。霧雨魔理沙、アリス・マーガトロイド、八雲紫、伊吹萃香、魂魄妖夢、射命丸文、レミリア・スカーレット、十六夜咲夜、チルノ、火焰猫燐、星熊勇儀、比那名居天子、東風谷早苗。それと私、風見幽香くらいかしら」

幽香さんを含め十四人。意外というなあ。知ってる人も結構。

「ありがとうございます。伊吹萃香、チルノ、火焰猫燐、星熊勇儀、比那名居天子。この五人はまだ会ったことないですね」

「あら、萃香に会ったことがないの？ 貴方最初は神社にいたんでしょう？」

「え？ そうですけど、おかしいですか？」

伊吹さんとやらに会ったことがない、というのが不思議なご様子。一体どういうことだろう。とか思いながら何となく三倉を見てみると、彼女もまた驚いているようで。って、なんでやねん。

あ、餡蜜来た。

「私は会ったことあるから」

と普通に返された。え、俺だけ会ってないってこと？

「だって彼女、あの神社に住んでいるのよ？」と幽香さん。

「は？」

あそこに住んでいる？ おいおい。意識のない時間も含めても一日ちよいしじゃないとはいえ、それでもあそこの住人に会っていないなんてそんなことあるのか？ しかも俺より後で来たはずの三倉はもう会っていると。

「桐嗣が呪いを解いて貰っている間に、彼女が部屋に来たのよ」

「ああ、あのときか」

しかし、そんなに時間がかかった覚えもないので、伊吹さんは意図的に俺に会っていないとは思えない。

「寝顔が可愛かった、とか言ってたわよ」

「ぶほっ！」

俺は飲みかけていたお茶を、何とか誰もいない方向に吹き出すことが出来た。よし、俺頑張った！

「ちよっと、汚ないわよ」

スプーンを頬張りながら言う台詞ですか、とは言わないぜ。美味しそうに食べてるなあ、こんちくしょうめー。

「ああ、すいません。今の発言に驚いてしまっただけ」

驚いたなんてもんじゃないけど。てか恥ずかしい。色んな意味

で。

「でも、神社に行くならそろそろ出たほうがいいんじゃないかしら？」

うーん、ここに帰ることになった原因に何か言われてる気がするけど、気のせいかな。

「そうですね。それじゃあ、お先に失礼しま」「私も行くわ」「はい？」

あれ、餡蜜がもうないんですけど。おかしいな。食べ始めてからまだ数分しか経っていないはずなのに。

ちゃんと見てればよかった。後悔先に立たずとはこのことだね！こんなことで後悔してどうするって感じだけど。

なんて思ってる間に幽香さんは先に会計を済ませていた。まあ、俺たちは何も頼んでないしね！。

そんな俺を、幽香さんは満面の笑みを浮かべて見ている。何でしようか。

「折角だからお土産にたい焼きでも買って行きましょうか」
当然、お代は俺持ちでした。

第十五章 デート to デート（後書き）

長くなるとか言いながら、それほど長くないという。
ホントにサーセン。

とりあえずゆうかりん登場です。我らがゆうかりん。俺の中では
ドSじゃないのです。どちらかというと淑女なイメージ。
むやみやたらと争いごとをしないのが彼女。
そんなゆうかりんが大好きです！

というわけで次回もゆうかりん登場。
そして話の流れから、あの妖怪も！？

ではまた次回！。

第十六章 物語は始まったばかり／再会と出会い編（前書き）

遅くなって申し訳ないと作者が言っているので許してやってください。

第十六章 物語は始まったばかり／再会と出会い編

さて、お送りしております東方桜桐記。

今現在なんと、博麗神社に来ております。

って、別に驚くことでも何でもないけどね。うん。

ただ、俺と三倉の二人で来たわけではなく、幽香さんがおまけで付いて来た、と言うだけの話であって。

今の幻想郷は物騒だから（俺の周辺限定で）というのも、幽香さんが来た理由でもあるらしい。その報酬としてのたい焼きなら、安いものだと思う。

ちなみに話をしながらゆっくり来たため、辺りはすっかり朱色に染まっているどころではなく、もうすぐ日も完全に沈む時間である。そしてその博麗神社の鳥居前（実は人里のある方角とは反対方向に位置する）で、まるで俺たちが来るのを知っていたかのように、腕を組んで仁王立ちして待ち構えている……幼女（？）が一人。

気付いたのは石段の中腹まで差し当たった所で、それまでその小ささに気付かなかったのだ。たぶん、それが原因だと思う。

ということまで至近距離まで近付いて、ようやくそれが何か分かった。幼女のように小さい身体。しかしその外見に不釣り合いなほど長い二本の角。腰に付いている瓢箪。正直、角がなければ彼女が何者が気付けないだろう。

だが彼女には角がある。そして抑えきれない力がある。それは、まさしく。

こんな幼い身体で、大の大人を委縮させてしまえるほどの威圧感を持つ彼女は——“鬼”だ。

「よく来たね、桐嗣」

俺のことを知っている。そして、神社にいる。きっと、彼女はここに住んでいる。つまり、そういうことだ。

「君が、伊吹萃香、だね」

「うん。そっちからしたら初めまして、かな」

ニヤリと笑うその顔は、とても子どもっぽく見える。

「ああ、初めまして、だ」

「ふうん、私を見てビビらないなんて、流石元妖怪退治屋」

「知ってるんだ。というか、もう妖怪とかそういう存在相手にビビってもいられないわけで」

紫さんのスキマとかいうのにはビビったけれど、まあ、それはなかったことにしておこう。今は関係ないぜー。

しかし何だかなあ。目の前の鬼は、今にも飛びかかってきそうな勢いなんだが。いくらハイスpekな人じゃない方が二人いるとはいえ、鬼に敵うとは思えない。特に三倉は、幽香さんにも劣るはずで。

やはりここは、戦っている場合じゃないんだよな。

「えっと、萃香？」

「何？」

「俺と勝負、したいんだと思うんだけど、それは無しに出来ない？」

「常識的に考えて無理」

常識的に考えたら無理じゃないと思うんだけど。この際その手の突っ込みはしないで、言葉で打ち勝て俺。

「いやでも、俺もここまで来るのに疲れたから、休みたいんだよ。

鬼相手に、そんな状態じゃあ、秒殺どころじゃない。瞬殺だ。だから、そうだな。せめて一時間休ませてくれ」

「一時間ねえ。……うん、いいよ。その代わり、ちゃんと楽しませてよ？」

保証は出来ないけれど、ここは首肯しておかなくては。疲れてるのは本当だから、少しでも休みたい。俺の中では、この博麗神社が幻想郷のホームだからな。

滞在時間は一番短いけれど、最初にいた場所なわけで。

あと、この主が一番気軽に話せる、と言うのもあるか。白玉楼

も紅魔館も、一癖あるなんてもんじゃないのが主なもので、やたら疲れる。それに比べて霊夢は、面倒臭がりでとことん人間らしい人間だ。

ああ、霊夢に会いたい。一週間会わないだけで、こんなにも恋しくなるだなんて。まさか恋！？ うん、冗談も程々にしておこう。今の俺には三倉がいるんだからね！

「あら、久しぶりね」

てかいるし。萃香の横に並んで、神社を見ていたら普通にいたし。いつ見ても奇抜な、肩と腋が見える巫女服の少女が、賽銭箱の前で、萃香がしていたように腕を組んで仁王立ち。萃香、もしかして霊夢の真似していたんじゃないのか？

そして霊夢は、賽銭客が来ないかとああやって待ち構えていた、といったところか。

「つて、幽香までいるの？ 珍しい組み合わせね」

「私は桐嗣とは旧知の仲なのよ」

嘘仰い。につこりスマイルはいいけど、萃香に次いで最近ですよ出会ったの。

「あ、そ。で、桐嗣は何の用？」

「いやー、暫く泊めて貰えたらなーと思って来たんだけど」

「は？ それなら白玉楼に行けばよかったじゃない。あっちのが広くて、ご飯も出て便利よ？」

仁王立ちを解いて、スタスタとこちらに向かってくる霊夢は、怪訝な表情で俺を見ている。まあ、その通りなんだけどね。

「霊夢に会いたかったわけですよ。俺としては。はい」

嘘ではないのでそんな感じで。疲れてるから適当に言っつて、気が付いた。この発言、色々危険だということに。霊夢と三倉は勿論、幽香さんと萃香まで固まっている。

いやーはっは。壮観ですな。なんて言ってる場合じゃない。

「あー、違う。霊夢たち、だな。魔理沙とかアリスにもここなら会えるだろうし、というわけだ」

と、ちゃんと三倉と霊夢を視界に入れて言ってみた。

「紛らわしいんじゃないボケエ！」

「この浮気者！」

二人はまるで打ち合わせでもしていたかのように完璧なタイミングで拳を握り、俺の両頬を正確に穿っていた。

という冷静な解説をしているのは、まあ、俺がぶっ倒れた後だというのは、言うまでもないだろう。がくり。

目覚めたとき、目の前には見知らぬ天井が――嘘である。

別に見慣れているわけでもないけれど、気を失う前の記憶を振り返ってみれば、ここが博麗神社だというのは言うまでもない。

うーむ。外は明らかに暗い。一時間どころじゃないだろこれ。萃香、ごめんな。あの二人の所為で……。いや、俺があんな発言したのが原因なんだが、まあ仕方あるまい。わざとじゃないんだよ。わざとじゃ。

それにしたって、打たれ弱いにも程があるぞ俺。女の子のダブルパンチでのされるとは。萃香もそんな俺を見てがっかりしたんじゃないだろうか。だから、寝てる俺を起こすこともしないのだ。

ん、起こしに来ようとしてるのを誰かに止められた、ということは考えていないわけではないけどね。

っと、起き上がってみました。何か頬つぺたが痛い。触れるとものと痛い。ビリッと来る。こういう怪我はし慣れてないので、勘弁願いたいんだけど。致死性のある猛毒とか、軽く触れるだけで斬れる刃とか、そう言うのならある程度慣れているからいいんだけどさ。せめてビンタぐらいにしてくれば、俺も倒れずに済んだだろうに。霊夢は兎も角、三倉にはお仕置きが必要だな。

軽くセクハラ染みた行為に出てもよさそうなことはされたわけかどうか。あのスベスベの肌を。スラリと伸びた美しい足を。うっすいあれを。

げふんげふん。今失礼な発言をしたのは誰だ。慎ましくたってい

いじゃない！ 完璧すぎるのも問題なのだよ。

萃香といい勝負？ 知ったことかってんですよ。そう、大きな
ど関係ない！ 愛があればそれでいいのだ！

まあ、ここまで言っただけ、どことは口にしませんぜ。

別にそこじゃないという可能性を孕んでいるわけではなく、単に
言わなくても分かるだろ？ 的な意味なので誤解はしないでいた
きたい。

さて、セクハラ談義はこれくらいにして、そろそろ外に出てみ
うか。見たところ、前に俺が寝たのと同じ部屋っぽいし、勝手は
理解出来ているつもりである。これは俺が目覚めたときの配慮、か
な。

霊夢ってば実はとても優しい女の子だからね。これくらいしてく
れても不思議ではない。と、よく知りもせず言ってみた。

出来るだけ音を立てないように、襖を開ける。空には欠けた月と
たくさん星。俺の住む町でもこれほど綺麗な夜空は見られない。

うーむ、今何時だろう。腕時計も度重なる戦闘やらでおじゃんに
なっているし、携帯はそもそも持って来っていない。

明りはまったく見られないし、皆寝てるのかな。妖怪はこれから
が本領発揮だと思うのだけど、萃香や幽香さんたちは例外な気もす
るし。

さてどうしたものか。

あ、てか今気付いたけど、俺着替えてるぞ。白玉楼で着ていたあ
れに似てる。誰かが着替えさせてくれた？ 普通に考えて三倉だけ
ど、あいつやたらと初心だからな。異性の裸見て大丈夫とは思えな
い。

となると、霊夢、萃香、幽香さんの誰かということになりそうだ
けれど。うーん、霊夢も年頃の女の子なんだから、その辺は自重し
ていると思いたい。じゃあ、萃香？ 一番男の裸とかに興味なさそ
うだし。ほら、見た目からも。

「こら、失礼な考えをしているのはお前か」

なんて言いながら尻を叩いて来た輩が一人。痛くもなんともないし、別に驚いてもいないんだけど、人の思考を容易く読んで欲しくはない。そして背が俺と大差ない相手であれば、叩くのは尻ではなく頭だろうなあ、とか思いつつ、そいつに目を遣る。

いつの間にか横に立っていたのは、二本の角を持つ少女。

「萃香、俺がそんな考えをしている男に見える？」

「見えるから言ってるんだけど」

「あつそ」

まあ、嘘ではないので否定はしないさ。ははは。

「で、予定より長く寝てたわけだけど、準備はいい？」

「ああ、やっぱりやるんだ」

萃香が現れた時点で、そんな予感はしていたけれど。刀は取って来ていいのかな。部屋に置きっぱなしなんだけど。

「もつちろん」

語尾に音符マークでも付いてしまいそうな程明るく言い放つ少女、もとい幼女。うむ、見た目相応の可愛らしい笑顔である。

さて。寝ていたおかげで体力は有り余ってるし、やるかな。結果は見え見えだけど、元に戻ってから初の戦闘としては、いい相手かもしれない。

「ここじゃあ皆起きちゃうといけないし、下でやろう」

何も考えていなさそうな顔（失礼にもほどがある）で、にこやかに提案してきた。

「そうだな」

というわけで先行く萃香に付いて行く俺。当然、刀は部屋から回収したけど。

ちなみに下、というのは神社の鳥居を抜け、階段を下りたところだ。と思う。流石に地下闘技場なんてないだろう。どこかの最強の生物の息子が出てきたりしないよな。だってここは東京じゃないもの！

てなわけで、長い階段をてこてこ歩いている間に、何故俺が萃香

を呼び捨てにしているのか。敬語を使わないのか。というところを説明しようと思う。別にいらんとは思うけれど、とりあえずね。

それに、一言で終わるから。

子どもみたいだから！　これだけだ。どんなに強そうな相手でも、こんなに幼女幼女してたらなあ。

じゃあレミリアはどうなんだ、ということになるわけだが、ここも簡単。館の主であるレミリアは、歳相応の雰囲気などほとんど持ち合わせていないのに対して、萃香は鬼としての威圧感はあるけど、人の家に住み、常に陽気であるように見える。そこが、言葉遣いを使い分けるポイントなのだ。

うーん、語ってみて思ったけど、やっぱりいらんなこの説明。バツクスペース押しっぱにしたい。

パソコンはないのかー。幻想郷にあつたら驚きだけだな。ああ、いや、あつても別におかしくはないだろうけど、インターネットとか無理な気がする。というか無理だ。

そして思い出した。俺はパソコンを使えない。使えないこともないけれど、確実に人並み以下なのである。

ああ、思い出ただけでも恥ずかしい記憶が甦るー。デリート！「よし、それじゃ始めようか」

最後の一步は一段抜かしで。そう言うところも可愛い。幼女って、一々愛でたくなるよね。

「ああ」

とは言っても、これから始まるのは、鬼と人間との闘いなわけで、手は抜けない。抜いてたまるか。そんなことをしたら、俺が俺を許さないし、彼女も俺を許すまい。折角楽しもうというのに、相手が手加減なんてしたら、台無しだ。

遊びでも、生死に関わらなくても、本気で。それが、彼女が満足する条件だと俺は思うから。

刀身を、外気に晒す。

そういえば、俺の負の感情はもうそれほどないはずだ。もしかし

たら、ほとんどの力が発揮されることはないのかもしれない。

だが、それはそれでいいんじゃないかと思う。俺は、強くなることなど考えていないのだから。誰かを護れる人でいられれば、それだけでいい。

まあ、妖夢には勝ちたいけれどー。

さーて、久しぶりの弾幕ごっこの始まりだ。

第十六章 物語は始まったばかり／再会と出会い編（後書き）

サブタイトルをちょっといつもと違う感じにしてみました。

そんなの考えてる間に本編書け、って言われそうだけど気にしない！。

次回はもちろん、戦闘です。

第十七章 物語は始まったばかり／決着と邂逅編

はい、ボロ負けでした。本当に手も足も出ませんでした。そりゃあそうですよー！

「でも避けるに徹してるときはよかったと思うよ？ まあ、それでも反撃できないんじゃないかな、時間稼ぎにしかないけど」

というフォローと言つか慰めと言つかを入られて、余計に凹むわ。しかも最後に結局駄目なんだと言われてる気がする。萃香、君は一体どうしたいんだ。

「なあ、俺とこんなことして楽しかったか？」

「ん、それなりに。手を抜かれたら嫌だけど、そうじゃないしね」
うーむ、よくわからん。強者になればわかるのだろうか。まあ、萃香を超えられるほどの強者には、なろうと思っただけなれるものじゃないだろうけど。

萃香だけじゃない。幽香さん、紫さん、文さん、レミリア。彼女たちにも、俺は到底及ばない。あ、幽々子さんも、たぶん。この五人は、俺の中では規格外だ。神宮町で出会った妖怪たちとは、格が違う。

妖怪だけじゃない。魔理沙、咲夜さん、霊夢。彼女たちも人間とは思えないほどの力を持っている。中でも霊夢は、幻想郷最強を誇る実力の持ち主とのことだし。見た目からはそんな凄い相手とは思えないけれど、俺にかかっている呪いをあっさり解いてしまったところからも、やはり只者ではないのだとわかる。

ああ、あとついでに楓。あいつも強い。文さんとのやりとりを見ても、楓の方が上だろう。

他にも紅魔館を離れている間に会った妖怪たちの中に強いのはいたけれど、彼女たちは俺とそこまで大差なかったかな。

で、幽々子さん含め会ってはいけるけれど、実力がまったく未知数という存在なのが、アリス、慧音、鈴仙、てゐ、早苗ちゃん。この

辺かな。本当はここに紫さんも入るんだけど、あの人は既に有り得ないほどの力を有してるのが分かり切っているからなあ。あのスキマだけでも、相手にしたら厄介な敵となる。

うん？　もしかして、幻想郷で出会った人たちの中で、俺でも相手に出来るのってそんなにいない？　実は美鈴ともまともに闘っていないから、彼女もまた実力不明者リスト（今作った）に載ってたりするし。

そもそも紅魔館の住人に勝てるのか？　あと二人だか三人いるらしいけど、その人たちが弱いとは思えないんだよなあ。

あれ、本当に俺が主役張ってていいの？　どう考えても俺弱いじゃん。弾幕ごっこだけじゃない。普通に闘って普通に負ける自信がある。

ああ、駄目駄目だ俺。

「ねえ、大丈夫？」

「え、って、お、近っ！」

超至近距離に萃香の顔。とても無垢で純粹そうな顔で覗き込んできていらっしやる。

「うーん、可愛い」

「ふえ！？」

おっといかん。つい声に出してしまった。

「ば、馬鹿！　子ども扱いするな！　鬼だぞ！」

いやもうそういうところが可愛いんですが。少し距離を取って顔を真っ赤にさせてアタフタして。ああもう抱き締めたい。俺と三倉の子どももこんなに可愛くなるのかな。

っと、いかんいかん。遥か未来の話をしてしまった。まだ子ども云々と言う話をするところですからないぞ。

「いやいや、別に子ども扱いなんかしてないぞ」

とか言いつつ勝手に手が頭に伸びるー。そして撫で撫で。

「あー」

おお、目がとろんと蕩けて本当に可愛いぞ。お持ち帰りー！　と

叫んでしまいたい。まあ、俺がそれをやったら犯罪だけだな。大石さんに捕まっちゃう。

ちなみに大石さんとは、神宮町の名物お巡りさんである。決してあれとは関係ないよ。そもそもあれが何なのかわかってないけれど、電波を受信したから何となく言ってみただけなんだぜ。いや、嘘じゃないから。信じてくれよ。

嘘だ！　なんて言わないでさ、どこまでネタをふんだんに混ぜ込みながらお送りしてきたわけだけでも。

「それ、私にもやって欲しい」

なんて言ってくる輩がいるわけで。いつからいたんだろうねー。まあいいけど。

「よしよし、流石俺の彼女。大胆であるな」

とかわけのわからない褒め方で撫でるんるん。

ほらもうにへらーって顔ですよ。

あ、当然相手は三倉。霊夢だったりしないぜ。ましてや幽香さんだなんていう事実はない。あつたら逆にホラーだ。とは口が裂けても言わない。

それにしてもいつからいたのか。俺が気配を感じられなかったというのもなあ。実は気配を消すなんて造作もないなんてことは……ありそうだ。

「おやおや、おアツいねー。んじゃ、お邪魔虫は退散しようかな」

目を細めてそんなことを言う萃香。別にラブラブしてるわけでもないのだから、いいんだけど、三倉のことも考えて去ってくれた方がいいかもね。てなわけで。

「うむ、その通りなので消えてくれたまへ」

「うわー、そこまで言われると腹立つけど、まあいいや。それじゃまたね」

とか言い残して消えた。うん、文字通り消えました。ドロンって感じじゃなく、ぼわわわーって感じ。分かる人だけ分かってくれるといい。じゃなくて、霧散したと言った方がいいかな。

いやー、吃驚したぜ。

「ねえ桐嗣」

おっと、萃香のいたところを見てる場合じゃない。俺の可愛いスイートハニートーストが俺を待っているのだ。

「ん、何？」

「離れちゃ嫌だ」と、上目遣いで。

ちくしょう可愛いなこんにやるめー。

「うん、そうだな。ずっと傍にいたいような」

顎を引いて、そこから言葉はなかった。三倉が抱きついて来て、俺がぎゅっと抱きしめてやって。ちよつと強過ぎたらしくて、痛いと言われて少し緩めて。

うーむ、ちよつと甘えん坊すぎやしませんか？　と思うわけですが。

さて、ここで俺を狙う輩が襲ってきたら、対処できるのだろうか。まあ、一応注意は怠っていないつもりだし、何とかなるとは思っけれど。刀は弾かれて地面に刺さってるし、俺の両腕は三倉の腰に回されているしで、結構危ない状態ではあるんだよねあ。

でもそういう危機感がある半面、先程まで萃香と一緒にいたのもあって、その効果で安全かもしれないとも思う。彼女の力を目の当たりにして、平気でいられる奴なんてそうそういるもんじゃない。そんなわけで、俺は三倉の感触を堪能するのに集中しようかと思う次第であります。俺の正面に当たってる部位の感触が、いまいち感じ取れないのが残念ではあるけれど。

おかしいなあ。身長だとかは、別に低いわけでもないのに、ここだけでも小さい気がしてならない。別にいいけどさ。浴衣パワーですか？　んなわけあるかい。

うわー謎だー！

てか今までどこのこと言ってるのか言及しなかったけれど、そろそろ言ってもいい気がする。え？　駄目？　はいはい分かりましたよ。

とにかく、今の態勢で抱き合ってるなら、本来むにむにとかいう擬音が入ってもいい所だと思うんだけど、それが出来そうもないから俺が自ら発生させようと思う。ええ、腰に回してる手を少し下に持って行つてですね。さわさわーっと。

「んっ」

……。

「したい、の？」

……。

「桐嗣？ いいわよ、しても」

……。

俺は、何をつていう質問をするべきなのか。それとも逃げるべきなのか。いやまさかここでもう一つの選択肢を選ぶわけにはいかないだろ！？ 全年齢対象ですからね！ むしろ正直に言えばいいんじゃないね！？ あ、でもそれだと命の危険が。それはちよつと勘弁だからやつぱり何を作戦。

「あつと、いや、何を？」

「！ それ、言わせたいわけ？」

あはは、そう取られますよね！。

「いや違う違う。冗談だから！」

と捲し立てるしかない。本当にこれしかない。

「もう三倉があまりにも魅力的だったから、つい手が伸びてしまっただけで、別にしたいとかいうわけではなくてだな」

「魅力的なのに、したくない、の？」

俺が手を離して、身振り手振りで何かわけのわからないことを言っている、不安げな顔で見つめて来るし、もうどうしたらいいの！？

「いや、したくないとか言うわけでもなくてですね。えつと、とにかく今はするべきときじゃないと思うわけですよ！」

「そう、なんだ」

「そう、なんです」

無理矢理押し切ってみました。ただ、これじゃあいけないと思う。結局、彼女が不安になってそれで終わりじゃないか。それも俺の所為で。俺が余計な事をした所為で。

だから、もう一度彼女に近付いて、俯く顔を上げさせた。

そして――。

「今は、これで赦してくれ」

小さな頷きだけが、返って来た。

翌朝、そいつは現れた。

「やつほー！ 私が来てやったわよ！」

朝っぱらから大声。寝るのが遅かった俺には大迷惑だ。いや、俺だけじゃないだろう。博麗神社にいた者にとって、大迷惑。

その元凶足る人物は、女の子だった。

腰まで届くほどの、青い長髪。凜とした真紅の瞳。桃の実と葉が付いた丸い帽子を被っていて、エプロンのような半袖の白い服に、青のロングスカートを着て、足にはブーツを履いている。

ちなみに彼女が立っているのは、神社の裏手。まあ、参拝目的でもなければ、そちらから来るのが楽なんだろうけれど。寝ているこつちからしたら、表から来られるより辛い。

で、その場に集まったのは、俺、三倉（一緒に寝てたのは内緒）、幽香さん、萃香、霊夢の五人。

その顔触れを見た少女は、明らかに俺を見ていた。何故三倉を見ない。

「あれ、人間がいる」

「いや私も人間だから」

即霊夢からの突っ込み。

「えー、だって霊夢の実力化物級じゃない。人間扱いなんか出来ないってば」

ということだそうです。

「あっそ。じゃあとりあえず名乗ってあげたら？ 彼も貴女のこと

知らないんだし」

「それもそうね」

霊夢から俺に視線をリターン。間違ってないよね。で、近付いて来る。

「私は比那名居天子。天人よ」

「宇條桐嗣。ただの、人間だ」

と言いながら思う。天人まで出てくるとは、と。本当にすごいな幻想郷。

「で、何の用？」

お互い名乗った直後に、霊夢が天子にクエスチョン。間違ってるね。

「ああ、そうそう。暫くここに泊めてもらおうと思って」

「……は？」

霊夢啞然。

「えーと、とりあえず聞いわ。何で？」

「いやー、最近衣玖が五月蠅くてしょうがなくて。暫くこっちにいたいなーなんて思ったり」えへへー、と片手を頭に当てて、ちよつと可愛い。衣玖って誰やねん。

「帰れ」

「即答!？」

とかいうやり取りがあつて、今居間。駄洒落じゃないよ。

「ふふーん、やっぱり霊夢に頼って成解ねー」

とても上機嫌な天子。

しかしそこに、霊夢の姿はない。ついでに萃香も。二人はまだ眠いと言つて、部屋に戻ったのだ。

そして俺は今、朝食を作っている。うむ、何の脈絡もないが、作っているのだから仕方ない。

本当にもう、あんなこと言わなければよかった。「泊めてやれよ」とかね。後先考えずにそんな発言するものだから、俺が彼女の世話をしろと命じられ、ついでに朝食も作つとけと。

料理は嫌いじゃないからいいけど、世話はない。三倉といちゃいちゃ出来ない。

これは結構重大な事だと思っただけど、どうしたものかなあ。なんて、そんなことを思っていた俺は、後で本当に後悔した。天子を泊めてしまったことを。

この日の夜に、その事件は起きたのだ。

第十七章 物語は始まったばかり／決着と邂逅編（後書き）

次回はもちろん戦闘です発言は撤回させて頂こう！

ついでにかなり遅くなつてすいませんでした腹切ります。くらいの勢いで謝ります。

次こそは、そこそこ早い更新をー！

というわけで天子登場。天子可愛いよ天子。
てなわけで次回から大活躍な予感。

第十八章 物語は始まったばかり／発生編

天子を泊めることになった日。

いきなりとんでもない事件が起こった。

それも、ほんの些細な出来事から始まったのだ。

あれは夕飯の支度をしているときのこと。結局この日は、朝昼晩とすべて俺が用意する破目になっていた。

ただ、全部一人でやらせるのは可哀想だと言って、幽香さんに手伝ってもらえることになった。

まるでカップルのようだなあ、なんて思ったりもしたけれど、それを口にしたら傍で見ている三倉が悪鬼と化すのが目に見えていたので自重することに。

って、そんなところはどうでもいい。

問題は、幽香さんが手伝った、という点にあった。

前もって言うておくが、彼女の料理が下手だったわけではない。

それどころか妖怪だろうと、一人で生活しているだけあって、その腕前は中々のもの。

じゃあ何だと言われたら、こう答えるに限る。

味付けが薄過ぎた。

まあ、普通ならそんなことで騒ぐ必要はないんだ。薄くするのは困難でも、濃くするのは容易だから。でもこの日は天子がいた。そして萃香もいた。子どもが二人いた！ いや、口が裂けてもそんなこと言えませんがね。

天子は自分のことを棚に上げて、幽香さんを年増だとかババアだとかと罵倒し始め、それに萃香も悪乗りしてしまったのだ。

ああ、勿論萃香は酔っていたわけで。そういうキャラだということに、このとき初めて気付いたのだけれど、多くの人は酔いどれキヤラだと知っていると思うので勿論と言ってみたのだ。ふはは、俺って偉いだろ。

とまあ、それは兎も角として、天子の発言だけなら軽くあしらうだけに止めていた幽香さんも、二人からそんなことを言われてしまったのは我慢も限界に達してしまったよう。二人を表に連れ出し、バトル勃発。当然弾幕ごっこ。

天子＆萃香VS幽香さんで始まったそれは、最初は一方的なものだった。幽香さんが禍々しい気を発しながら、二人に怒涛の攻撃。一步も動かず、ただ閉じた傘を相手に向けているだけだが、彼女の周囲から放たれる光弾こうだんは、正確に二人を痛めつけていた。

しかしそれも、ほんの僅かな間だけだ。萃香は霧散し、天子は剣を振るい、幽香さんの攻撃を凌ぐことに成功。

そしてそこから、二人はまるで打ち合わせでもしていたかのように、息の合ったコンビネーション攻撃を始めた。

萃香は巨大化し、天子は剣を地に突き刺し、次々と攻撃を繰り出した。

この辺りから、俺にはもう何が起きているのかさっぱりだった。これが、幻想郷の妖怪たちの闘いなのだと、そのときになって漸く理解し、霊夢にこれを収めるように言おうとしたのだが、まあ、当然無理でした。

とは言っても、食事が終わるまで待て、と言われただけなんだけどね。

結局、その騒動は食事を終えた霊夢が、食後の運動と題してさくっと終わらせてしまったのだけど、そのとき俺は悟ったね。

霊夢には、何があっても絶対に逆らってはいけないと。

ちなみに罰ゲームの内容は、教えてもらえていない。さて。

切りのいいところで明日になーれ、と思っていたのだけれど、事件はまだ他にも発生していた。寧ろこっちの方が重要。正直、さっきのことは一切言わなくてもよかった気がする。

でもどうしても文字数稼ぎたいと、天のお告げが聞こえた気がしたからとりあえず言ってみたまでであって。うん、俺嘔吐いてない。

ホントホント。

では一体、どんな事件が起きたのか。今度こそ、身の毛も弥立つような内容の筈。

まあ、事件というよりも、怪談に近いかもしれない。一緒に妖怪も住んでいるのに何を言うか、という感じもするけれどね。

そう。それは俺が今にも夢の中に落ちてしまふかというときのこと。意識が俺の手元から離れていこうとしていたのに、それを思い切り引き戻すほどの大きな音が聞こえてきたのだ。

例えるなら、車が家屋に突っ込んだような音。それもただの車じゃない。小さくても軽トラ程度の大きさのものがぶつからなくてはならないような爆音だ。若しくは、ドカーン！ という音。正直前者の方が迫力あると思うので、後者は切り捨て御免だが。

それを聞いた、というか聞こえてしまった俺は当然跳び起きた。眠気なんて明後日の方に消えてしまい、すぐに部屋を出て音のした方へと走り始めた。

音がしたのは神社の正面。恐らく、賽銭箱の近くだろう。

そう思った俺は、一直線にそこを目指した。

しかし、そこに着いても何も見当たらない。何かが壊れているわけでもなく、ただ普通に中身の無い賽銭箱が、いつも通りの場所に置いてあるだけ。部屋まで聞こえるほどの音が出るようなものは、一切見当たらなかったのだ。

「桐嗣！」

そこに駆けつけて来たのは、三倉と天子の二人。寝間着の俺とは違って、二人とも普段の服装だ。まさか、あの音があつたのに着替えて来た、ということはないはず。起きていたのかな。あ、三倉が俺の刀を持ってる。

「二人も、あの音が聞こえたのか？」

「当り前よ。あんなの聞こえない方がどうかしてるわ」

天子は言いながら、視線を隣に向ける。三倉もそれに頷いていることから、やはりあれは幻聴なんかではないと確信が持てるはずだ。

しかしその音の発生源となるものが、何もない。その旨を伝えると、二人からも報告があると返された。

うーむ、三倉はまだしも、天子、君の頭も中々弱いな。まあ、言わないけどな。てか見た目からして、頭の回転がいい子には見えな
いしね。うん。しょうがない。

なんて思いながら、石段を登り切った。

ここで言うのがいいかな。

「なあ、二人とも」

「ん？ 何よ」「うん？」

二人揃って別の言葉を口にしながら振り返る。折角安心しきつて
いるところ悪いが、これからまた面倒なことになるんだ。たぶん、
俺の所為で。

「俺たちは閉じ込められていない。けれど、二人は霊夢たちを見つ
けられなかったんだろ？」

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「どうかしまくりだ。ならば、逆に考えればいい。俺たちが閉じ込
められたんじゃない。霊夢たちが閉じ込められたんだと」

そして、これが俺を狙う奴の仕組んだ罠だということは、敢えて
伏せておこう。天子が、俺を殺せば万事解決、なんていう思考をし
ないとも限らないから。

出会って間もない俺を助けようなんて、そんなことを考える奴ら
ばかりとは思っていないから。

だから、霊夢たちを閉じ込めた奴を見つけたら、さっさと片付け
てしまおう。面倒なことにならないうちに。

それにしても、何だってこのタイミングで襲ってくるかな。俺が
最も警戒していた相手の内の一人。

神宮町で闘った相手の中でも、最も狡猾で、残忍な存在。最後の
最後まで姿を現さない、そんな相手。

結界などの術に長けていたあいつは、精神的にも強い三人を閉じ
込めた、と考えるべきだろう。天子はどう見ても揺らぎやすい。三
倉だって俺のことを信じ切ってくれるのかわからない。

ましてや今のような状況だ。何が起こるか分かったものじゃない。

最悪の場合、二人が敵に回ることも想定して動こう。

「なんてことはしませんけどね」

「ふえ？」

おっと、口に出してしまったようだ。二人してアホな声を上げてらっしゃる。まあ、そんなアホなところも可愛いのが三倉なんだが、まあついでに天子も可愛いぞ。

「何でもない何でもない。とにかく、術者を探して取っちめるぞ」「そうね」

二人が敵に回ったときのことを想定して動くだ？ それこそ真の敵の思う壺だ。俺は出会ったばかりの天子だって信じるさ。そして俺が狙われていることもすべて話して、信じてもらう。

そして、万全の状態で奴を斃す。

もう二度と、俺は屈さない。友を、母を、そして愛する人を奪った奴にだけは、負けるわけにはいかない。

鉦女命^{うづめ}、俺はお前を赦しはしないぞ。

第十八章 物語は始まったばかり／発生編（後書き）

敢えて日付変わった後に投稿しようと思視眈々と狙っていたらこのありさまだよ！

見事に十分近く遅れました。まあ、よくあることさね。

というわけで、結構早く書けました発生編。

あと二回くらいで今回の件は終了となるはず。たぶん。

今度こそ、戦闘シーンあるよ！

第十九章 物語は始まったばかり／混迷編

「そうね。本当にその通りなら、貴方を殺して万事解決よね」

俺はすべてを話した。それに対しての、天子の言葉がこれだ。だが、これにはまだ続きがある。

「でも、本当に貴方が死ねば元通りになる保証はないじゃない。なら、ここで殺すのは戦力の低下にも繋がるわけだし、遠慮しておくわ」

と言うことで事無きを得たわけだ。だが、それはつまり、殺して元通りになると確信出来たのなら、俺はすぐにでも切り捨てられるということだ。

そうなる前に済ませたいね。

さて、ここから敵との遭遇まで大した出来事はないので、彼女に関する情報を提示しておこう。これは天子にも伝えた内容とまったく同じものでもある。

鈿女命とは、知る人ぞ知る芸能の神、天鈿女命あめのつずめのことだ。

芸能の神と聞いて、それが何故残忍な性格になるのかと思う人もいるだろう。だが彼女には、裏の顔があったのだ。

周りを楽しませるのを生甲斐と感じているのはただの見せかけ。実際にはただ自分を敵ではないと、信じさせるためにしていたらしい。

まあ、らしいと言うのは、鈿女命本人から聞いたことで嘘かも知れないというだけのことなんだが。

ちなみに彼女の容姿はと言うと、踊り子であったこともあってか、かなりの美貌の持ち主だったりする。性格は悪いけどな。

三倉と同じくらいに長く美しい赤髪と碧の瞳。透き通るほどに白い肌。小さな顔。彼女を見たのはほんの僅かだというのに、鮮明に思い出せる。それも、毎日会っている相手と変わらないほどに。そして、俺に向けられた憎悪の表情も、忘れたくても忘れられない。

あれは、俺のことを殺したいほどに憎んでいた。

本当なら、俺がその表情を彼女に向けるべきなのに、それが出来なかった。きつとあれも、彼女の能力か何かだと思いうことにしてきたが、実際はどうなのか。

それを確かめるためにも、俺は勝たなくてはいけない。

圧倒的に勝って、聞き出してやる。

俺は負けない。

誰も死なせない。

一滴の血すら流させたりしない。

そう思っていた時期が俺にもありました。

いやまあ、三倉たちには一切危害がないわけだけど、俺の脇腹辺りを斬られてしまいました。

だってほら、いきなり敵が出て来るんですもの。仕方ありませんこと？ とお嬢様っぽく話してみたけれどそれで状況がよくなる可能性は一割にも満たない。というかきっぱり言って零だ。

というわけでさくつと終わらせよう。

雑魚相手に手古摺っている場合じゃないからな！

「つち、殺り損ねたか。折角、本来の標的を見つけたと言うのに。こうなったら裏切り者を先に殺すか？」

などとぶつくさ言っているのは、馬の頭をした妖怪。名前を聞いたわけでもないけれど、見た目からして馬頭で間違いないだろう。

こいつも当然、昔倒したはずの相手なんだが、何かおかしい。それが何なのか、分かりそうで分からない。

「馬頭、相方はどうしたの？」

ああ、そうそう。相方。牛の頭をした人型妖怪。てか名前馬頭で合ってるんだ。なら相方は牛頭こずだな。

「あん？ って元主じゃねえか。相方がどうしたって？ あいつは、牛頭は」

あれ、何か目を潤ませている。しかし馬頭なので可愛さの欠片もない。と言つか気持ち悪い。そもそも身体も声も男だし。

「殺されちまつたんだよー！」

「そうなのか？ 一体誰に」

「んなことはどうでもいいんだよ！ お前らまとめて殺してや」

「出来ると思ってるの？」そこで天子乱入。

最後まで言わせないと、流石である。

「つぐ！」

まあ、いくら強くなったとは言っても、こちらは三人。特に天子の力が未知数である以上、下手に攻撃することは出来ないはず。

だからこそ、先程の隙を突いて襲って来たんだろうけれど、それも致命傷を避けられてしまったことによって、失敗。馬頭からしたら、もうどうしようもないんだろうな。

「畜生。裏切り者も、仲間たちの仇も討てずに、おめおめと帰るしかないのか？ 何のために力を貰ったんだ！」

とまあ、熱血してるけれどやっぱり馬頭つまあたまなんだ。とてもシユールな光景である。怪我をしているというのに、その痛みが気にならないくらい面白い。こら天子、腹抱えてんじゃねえ。

「馬頭、お前を召喚したのは私よ。そのお前は今、別の主に仕えていると言っの？」

「……そうだよ。契約不履行のまま消えた俺は、本来二度と現界げんかい出来ねはずだったんだがよ。どうやったのか知らねえが、今の主が召喚してくれたのよ。しかも、新たな力を授けてくれてな」

そうだ。いつもこいつも、新たな力を身につけていた。それは召喚された存在ですら同じだと、ついさっき知った。

ちなみに、現界とは、現代に実体を持って出て来ることだ。と、クラスの黒魔術オタクが言ってた気がする。大分前のことなので、記憶があやふやだぜー。

しかしやっぱりシユール過ぎてやばい。天子なんかもう、俺たちから距離置いて大爆笑してるし。あいつ笑い死ぬんじゃないか？

ってそんなことはどうでもいい。俺っち気になることがあるのだ。三倉の用が済んだら俺が聞こう。

「そう。では、もう一度私のところに来る気はない？」

「あ？ 冗談じゃねえ。敵だった相手にべつたりしてる奴を主になんて出来るか。そもそも、今の主に逆らうような行為は出来ねえしな」

「なら、消える？」

おい。何かカリスマオーラが噴出して来てるんだけど。あれか。俺を傷付けたことで結構怒ってらっしゃるんじゃないかな。だがしかしここで馬頭を殺させるわけにはいかない。俺は奴に聞きたいことがあるからな！

「てなわけで三倉、ストップ」

「……何で？ 桐嗣を傷付けたのよ。掠り傷程度だから、そうね。最低でも磔刑クラスの罰は与えないと気が済まないわ」

「はいはい、軽く病んでる発言は止めてねー。そういうの俺苦手だから。で、馬頭君に質問だ」

苦手発言されて凍りついてる三倉を、今だけ放置して馬頭と向き合う。うーむ、正面から見るとホント凄いな。だがここは真面目な場面だ。例え横で凍ってる彼女がいても、後方で笑い転げてる女の子がいても関係ない。

そう、今このシーンに描かれているのは俺と馬頭の二人だけ。男と男。とても真面目な場面だ。ほら、笑いの入る要素なんてどこにもない。カメラが回っていたら、映っているのは馬頭の後ろ姿と俺の顔だろう。

ふふふ、完璧じゃないか。

「質問？ 見逃してくれるっていうなら、応えてやってもいいぜ」

「ああ、それで構わないから、本当のことを話せよ？」

「……分かった。お前は嘘を吐いているようには見えないしな。で、何を聞きたい」

「裏切り者、と言うのは誰のことだ？ そいつを探してここに来たという時点で、ある程度の予想は出来ているんだけどさ。確信が持てないんだ」

もし俺の予想通りなら、敵の数は変わらない。しかし違うのであれば、敵はもう一人いることになる。ただでさえ厄介なのが相手だと言っのに、これ以上増えたら面倒だ。

「ん？ ああ、お前はもう気付いてるのか。ここに、あの女がいることに」

その馬頭の言葉で確信した。

「……裏切り者は、鈿女命か」

馬の頭が首肯する。御免。真面目なところで何だけど、その動作が面白い。ホントに無理。シリアスなシーンでも、面白いものは面白い。まあ、だからと言って笑いはしないけどな。精々心の中で大爆笑するだけさ。ぎやはははは、と。

しかし分らないな。鈿女命が裏切ったのなら、彼女がここに来た目的は何だ？ そして何故霊夢たちを隔離する必要があるんだ？

「あの女は、お前の味方をするつもりでいる」

「……………は？」

やばいやばい。一瞬思考停止してた。今なんて言った？ あの女が俺の味方？ 何を馬鹿な。

「だから、あの女はお前の味方になるつもりなんだ。そもそも裏切る理由なんて、それ以外にないだろうが」

まあ確かに、他の理由があるとは思えないけどな。ただ、今の仲間が嫌いとか、そういう理由で裏切った可能性も考えられないわけでもないし。てかあいつの容姿は覚えていけるけれど、言葉を交わしたのはほんの僅かで、彼女の本質までは知らない。

「なあ、馬頭」

「何だ」

「鈿女命は、一体何者なんだ？」

「……さあな」

だよな。

本当にわけがわからない。

「もう、いいか？」

いやいや、いいわけがない。もう一つ、どうしても聞きたいことがある。

「あと一つだけ聞きたい。お前の今の主は、何者だ？」

そこで漸く、天子は笑いを止め、三倉は俺たちの会話に耳を傾けた。これは、馬頭の頭がどうか言って適当に聞き流せることじゃない。それは、事情を知った天子だって同じだ。

「……何だ。まだ気付いてなかったのか。いや、主が誰なのか知っている奴が、話してないんだろ？」

「知ってる奴？ それは、俺の身近にいると言うことなのか？」

「その通りだ。それと、逃がしてもらった代わりに、もう一つヒントだ。主は、あるとき神宮町にいたぞ」

神宮町にいた？ また意味のわからないことを言っている。何だ。これは俺を貶める為の罠か？ そう思いながら、三倉を見る。すると彼女は、俺から目を逸らした。

知っているのか？ 三倉はそいつを庇っている？ 何故だ。理由が分からない。

「じゃあ、俺は帰るぜ」

その言葉で、俺は我に帰ることが出来た。いや、帰らされた、と言うべきか。

俺は三倉を疑うことに気を取られ過ぎていた。

振り向いたときには、もう馬頭の姿はないのは明らか。問題は、追うかどうか。そして、三倉のことだ。

結局お前は、俺の敵なのか？ 俺を愛していると言うのは、偽りなのか？

そんなことはないと思いたい。

そうでなかったら、俺は……。

いや、最悪の方向にばかり考えるな。

相手が三倉にとって大事な相手なのかもしれない。それか、俺と関わりのある相手に、それを知らせたくなかったという可能性だってある。

まだ、三倉が敵だと決まったわけじゃない。

そもそも馬頭が言ってたじゃないか。三倉の側に付くことは、今の主を裏切る行為になると。

これが演技だったとは思えない。

馬頭だって、あいつ自身は悪い奴ではないと思う。境遇さえ違えば、仲良くなることだって出来たかもしれない。そんなふうに思えるほどの相手だ。

信じる。三倉を、馬頭を。疑ってばかりいたら、どんどん深みに嵌って行っただけだ。

三倉は俺を信じている。馬頭だって俺の言葉を信じた。だから俺も信じる。

「変わったのね。桐嗣」

その声は唐突に聞こえてきた。だが、それでも誰のものか考えるまでもない。何があるかと忘れることなど出来ない声。

彼女が、現れたのだ。

「ねえねえ鈿女命、もっと外の話教えてよ」

なんてフレンドリーにその彼女に語りかける声も聞こえるが、この際それは無視しよう。幼女なんかに興味ねえ。それにきつと、酒か何かで懷柔されたに違いない。

だが声の主の方を見ると、俺は目を疑った。ああ、三倉たちは信じるが、自分の目は疑いたい。本当に。

だってしょうがないだろ。鈿女命と一緒に萃香がいるのは声で分かった。だが、その横に霊夢と幽香さんもいたのだ。

一体なんだって言うんだこれは。

くそ。俺の足りない脳味噌じゃ無理がある。余裕でキャパオーバーだ。

次章、俺の脳パンクの巻、とか言っておこうか。や、意味分らないけど。

え、ていうかも次章に続く？ 早くね？ いや別にいいけどさ！。

第十九章 物語は始まったばかり／混迷編（後書き）

はい、今度こそ戦闘シーンあるとかほぎながらありません。
次こそは、本当に、嘘偽りなく、120%の確率で戦闘です！！
相手がだれかは秘密ですが！。

ではまた次回。

第二十章 物語は始まったばかり／解答編

鈿女命との再会から二時間は経過している。

その二時間で分かったこと。それは、霊夢たち三人は確実に、鈿女命に掌握されたということ。それと鈿女命は俺と闘う気などないということだけだ。

だからと言って安心してはいるわけではない。俺は当然だが、彼女もまた俺を憎んでいるはずなのだから。

俺は、あのときの顔を忘れられない。初めて対峙した、あのときの顔を。

世界の三大美女だつて裸足で逃げ出すと本気で思えるほどの美貌を持った鈿女命。彼女は俺に、負の感情だけをぶつけて来た。

俺を殺すことだけを考え、そのためならあらゆる手を使ってきた。友や仲間。そして家族さえも。利用できるものは何でも利用してきたはずなのに、何故俺は、彼女の要求を飲んだのだろう。

彼女の美しさにやられた？ いや違う。それだったら最初に闘った時点でやられているはず。

なら、何故だ。

何故俺は、二人きりで話したいと言う、彼女の要求を受け入れてしまったんだ？

そう。俺は今、鈿女命と二人きりにいる。

場所は寶銭箱の前。見晴らしがよく、誰かが近付いて来てもすぐにわかるからという理由でここを選んだ。あとは、時間も時間だし人が訪れることなどないだろうしね。

そして俺と鈿女命は、お互い向き合っているわけだが、どうしても気になってしまう。

なんていうか、露出度的に？ 前からこんなだったとは思つが、やはり際どすぎる。主に胸。

彼女の服装を分かりやすく説明すると、サイズの合っていない霊

夢の物に極めて似ている巫女服を着用していると思っただけは助かる。

当然サイズが合っていないと言うことは、小さ過ぎるわけで。けれど霊夢のよりも腋の部分の隙間が大きい^{したちち}ため、下乳と横乳^{よこちち}が見えるという寸法なのでありますよ。霊夢は横からしか見えない。その見えている範囲だつて、元々小さいのだから範囲だつて同様だ。なんて言ったら絶対に殺されるので他言無用でお願いします。

てか何？ 大事なところが見えてなければそれでいいの？ ふざけんな！ と怒鳴つてやりたい気分。まあでも、それはしないほうがいいんじゃないかな。読者のために。つて、またどこから電波を受信してしまった。

「……さつきから何ぶつぶつ言ってるの？」

「ああ、いや、なんでもない」

おつと、白い目で見られてしまった。

今は細女命の話を聞くときだというのに、俺は余計な事を考えていたようである。

「それじゃあまず、貴方の誤解を解くところから始めなくてはいいじゃないわね」

「誤解？」

顎を軽く引いて、目を細められた。それだけで、彼女の言おうとしていることがなんとなくわかる。そもそも、俺が誤解するような出来事と言えば、一つしかない。

だが、それが誤解だと言われて、信じることなど出来るはずがない。彼女は、そんな俺の心中を察し、それを覆せるような話をするのだろうか。いや、たとえ納得のいく話をされたところで、今度は俺の想いはどこに持って行けばいい。

それすらも解決してくれる言葉を、彼女が持っているとは到底思えない。

それでも俺は、彼女の言葉に耳を傾けようとしている。本当なら、今にでも斬り捨ててしまいたい相手の筈なのに。

きつと、あのときの表情を見ていなければ、躊躇うことなく斬れただろうな。

「私は、貴方の周りの人間を殺していないし、そんな指示も出してない。まるで私がやったかのように振る舞えと、命じられただけなの」

「誰に？」

「主に」

主。それは当時のものなら、三倉と言うことになる。だがこれには、三倉は一切関与していないと俺が証明できる。まあ、それにについてはいつか話すとして。

しかしそうすると、当時神宮町を襲っていた妖怪たちの主は、二人いたということになるのか？ て、ちよつと待て。いきなり信じ込み過ぎだろ俺。もっと疑え。相手はどんな卑怯な手でも平気な顔で使ってくるような奴だぞ。

「言っておくけれどこれは事実よ。ただ、貴方のことを殺そうとしたのは、自分の意志だけれど」

「……だろうね」

そうでなければ、あんな顔は出来ない。でも今の彼女は、笑顔でそれを言っただけだ。もう当時のような感情は無いのかな。これは確認しておかなくちゃいけない気がする。というか、命に関わることですしね。

「今は、どうなわけ？ 俺を殺したいと思ってるの？」

「……正直、分からないわ。貴方の顔を見て、声を聴いて、何とも無いとは言えない。けれど、あの頃みたいに衝動に駆られることは無いかもしれないわ」

「無いかも、ですか」

すっげー命の危険を感じました。

「でもね。それだけじゃないの。貴方のことを、憎らしいと想っているのに、愛おしいとも想っているの」

「それは、何？ 昔の想い人の影を俺に重ねているとかそんなん？」

ふふふ、もう俺はそんなことぐらいじゃ戸惑ったりしないぜ。

「そう、ね。貴方は、私が愛した人に似ているのよ」

愛した人、か。神話通りなら、猿田彦命さるたひこだったかな。

「貴方が今想像しているのは、猿田彦命かしら」

おっと、当てられてしまった。って、普通か。しかしだからと言って嘲笑するかのような顔で言われると、若干不愉快。まあいいけどね。てかこの言い方からして、猿田彦命は間違っているのか。いや、猿田彦命の妻ではあったけれど、本当に想っている相手は違ったという可能性もある。

そう思ったとき、一つの名前が浮かんだ。

「……天照あまてらす」

鈿女命あめのいわとは天岩戸に隠れてしまった天照を引っ張り出す為に、色々なことをしたという話だ。裸になって踊った、なんていう話もあるくらいだし、きつととても恥ずかしい思いをしているはずだ。

それだけのことをするのに躊躇いを見せなかった理由は、羞恥心が無いからでは無い。

彼女が、鈿女命が天照を愛していたから。

そう考えることだって可能はずだ。

しかし、天照は女神というのが今の日本での主流だし、天照と卑弥呼みこを同一視する見方だってある。

本当に鈿女命が愛した相手が天照なら、その考えを真っ向から否定していることになる。だって、俺に似てるんだぞ。それが女なわけあるか。

「……天照様」

って、考えていたらそんな呟きを耳にしてみましたよ。しかもどこか遠くを見るような目で。何、これはもう確定か？

けれどまだ一つ、どうしても解せない点がある。

何故殺したいほど憎むのか。

これがさっぱり分かんない。日本の神話に関しては結構調べたけれど、こればかりは推測しようがない。だってそもそも俺は、天照を

女神だと思っていたのだから。

「ねえ、桐嗣」

「ん？」

「貴方は、天照様の生まれ変わりだったりするの？」

唐突に何を言い出すのかね。というかいつの間にか距離が近くなつてません？

「違うよ」

「……そう」

とても残念そうな顔をして項垂れていても画になる。本当に美しいよな。でも見惚れている場合じゃない。俺は聞かなくちゃいけない。俺を、いや、天照を憎むわけを。

「鈿女命、君は何故、天照を殺したいと思うんだ？」

「それは、言わなくてはならないこと？」

「言ってもらわないと、信用できない、とまでは言わないけれど、その方が信じられる」

それから暫く、沈黙が続いた。考えているのだ。俺に話しているのか。どれだけ話していいのか。きっと全部は語られないだろう。それでもいい。少しでも話してくれるのなら、その理由で俺が納得できるのなら、俺は彼女を信じてみようと思えるはずだ。

今の俺は、相手を憎むだけの男じゃないから。

だから、話してくれ。

「……いいわ。けれど先に一つだけ教えて」

「何？」

「貴方は今、神宮寺三倉を愛しているの？」

質問の意図が、まったく読み取れない。天照には一切関わりがないような気がする。だが、それに答えれば彼女も教えてくれるのだ。なら、

「そうだな。愛しているよ。神宮寺三倉を」

そう口にしたときだ。一瞬だが、確かに見た。彼女の目に、何かが浮かんだのを。すぐに顔を伏せたため、それが流れる瞬間は見え

なかったが、それは確かに涙だった。

俺は、どうしたらいいのだろう。彼女を慰める？ いや、そんなことを望んでいるとは思えない。そもそも今の俺たちの関係からして、有り得ない。敵ではないにしても、仲間でもないのだ。

だから、彼女が顔を上げるまで続く静寂を、守り通すことにした。こんな季節だから、虫の音も聞こえない。

本当に、無音だ。自分の心臓の音だつて聞こえやしない。そういえば、俺は死んでいるかもしれないと疑ったことがあったな。あの件ってどうなったんだっけ？ 誰かに聞いた？ そして答えを得た？ 覚えてない。やはり俺の記憶力の無さは異常だ。もしかしたら他にも大事な事を忘れているかもしれない。

例えば、本当は黒幕の存在を知っているはずなのに、忘れていただけとか。

やばい。有り得そうで困る。

……いや、知っている（、、、、）。間違いなく。だが思い出せない。とても身近な存在な気もするし、まったく関わりの無い相手だった気もする。

なんだこれは。本当に俺の頭はどうなっているんだ？

そう思ったとき、頭の中に一つの言葉が過ぎった。

『って桐ちゃんボロボロじゃん！ どしたの！？ 誰にやられたのか言ってみて！ あたしが死なすから！』

これは楓が俺に言ったことだ。それも最近。白玉楼で。俺の上で。しかしこれと同じ、若しくは似たような言葉をどこかで聞いた気がする。それがさっきまで考えていたこととどんな関係があるのか分からないけれど、思い出さなくてはいけないことな気がする。

「彼を困らせる奴は皆死なす」

その言葉に、俺はハッと顔を上げた。自分が俯いていたことにすら気付いていなかったが、まあ、考え事をしていると自然とこうなるか。

それよりも今のは、鈿女命が言ったのか？ 俺の視線だけで察し

たのか、静かに頷き、そして続けた。

「これは、私の主が言っていた言葉よ。殺すではなく死なすっていのが、彼女独特の言葉遣いね」

思い出した。もう、天照を憎む理由なんてどうでもいい。そんなものは、あとでいい。鈿女命が近付いていることだって。

よく考えれば分かったことじゃないか。あいつの能力を思い出せば。あいつの言葉を思い出せば。

あいつはどうやって幻想郷に来た？ あいつはどうして俺が白玉楼にいたのに気付いた？俺は近くにいる幽々子さんが人間でないことすら察することが出来なかったというのに。

いや、そんなことを考えるまでもない。甦ったかつての敵を知っている者は、幻想郷に俺を含めて三人しかいないことを思い出せばいい。当然そこから俺は外れ、実行者は二人しか考えられない。

それでは、奴らが俺を襲い始めたのは何時からだ？あいつに会った翌々日だ。いや、里の人間を襲ったのを考えれば、翌日か。

とまあ、ここまでは俺の周りの人間を殺してきた。だがそこらが違う。俺を標的にし始めた。その理由だって、もう分かっている。俺の心が三倉に向いていたから。

今なら自信を持って言える。俺は、紅魔館にいるときからすでに彼女に惹かれていたのだ。彼女が傍にいないときに気に掛けて。それだけで十分じゃないか。敵として捉えているのなら、近くにいるときも気にしてるだろう。

本当ならそこで矛先が向くのは三倉だ。だが彼女は、単独で動くことなどほとんどなかった。その上彼女の能力は、あいつに、いや、不死身の存在以外すべてに対して有利だ。だから殺すことは出来ない。

でもなあ。だからって俺を狙うか？死体でも俺が欲しいってか？やっぱり、頭はよくないんだな。出会ったときからずっと思っていたことだが。

俺のことだけが本気で好きだったのは、分かったが。どんだけ病

んでるんだよ。そういうのは、苦手なんだよ。人の親を、友を殺してまで、俺を一人占めしたいか。八百屋のおっちゃんたちなんて、まったく関係ないじゃないかよ。あれで嫌われた俺は、お前を頼ると思つたのか？ そんなに弱つちい人間だと思つてたのか？ ふざけるな。俺は其処まで弱くない。自分が強いなんて思わない。だが、自分の底辺が見えるくらいには強いつもりだよ。お前は、本当に馬鹿だ。大馬鹿野郎だ。そんなに俺を振り向かせたいなら、最初からその為だけに能力を使えばよかったじゃないか。

触れた相手の記憶を操る能力を。幻想郷風に言うと、記憶を操る程度の能力か？ 触れた相手だけと限定はされるが、本当に優れた能力だ。それを使えば一瞬で俺の心はあいつに向けられたのに。

何故、目の前にいた女を殺すような真似をするんだよ。

折角信じようと思つたのに。近付けると思つたのに。そんなに俺に近づく女が赦せないか？

「なあ、楓」

今、俺の目の前にいるのは、立っているのは、崇徳楓だ。そして俺と彼女の間にいるのは、鈿女命だったもの。首と手足が、胴体から切り離されている。血肉が飛び散つて、俺の顔や、豊、天井にまで飛び散っている。

これだけのことをしたのに、彼女は無表情を崩さない。いつもの明るい笑顔なんて、どこにもない。

いや、それは俺も同じか。俺の頭の中は、楓のことだけで一杯だ。かつての仲間に裏切られたなんて思つちやいない。けれど、赦せないことだけは確かだ。今まで俺の所為で殺されてきた者のためにも、このまま赦すわけにはいかない。

刀を取る。それだけの動作が、酷く長く感じた。なのに楓は動かない。薙刀のような武器を片手で軽々と持つて、ただ俺を見ている。そういえば、いつの間に襖を開けんだろう。突き破ったわけではなく、ちゃんと開け放たれている。全然気付かなかった。

って、そんなことはどうでもいいじゃないか。

今は一つのこと集中すればいい。そして、今回の件はお終いだ。だが、俺の物語はこれから始まる。なんとなくだが、そんな気がする。

なんかね。色々と穴だらけで、現実味を帯びていないんだ。これまでのことは、夢ではないにしろ、現実でもない。そんな感覚。これからリアルに戻されて、そして動き出す。

だからそう、これは始まりに過ぎない。

俺より優れた力を持つ相手との闘いが、だ。

何故って、それは――。

刀身を鞘から引き抜いた直後、俺の視界は真白に覆われた。

やっぱり、そういうことなんだよなあ。

今現在、俺の目の前で正座している人たちがいる。

場所は博麗神社。正座しているのは三倉、楓、鈿女命、馬頭、牛頭とオリジナルキャラオールスターズってわけのわからないワードが浮かんだけれどそれは無視して、それに加えて紫さん、幽香さん、咲夜さん、魔理沙、霊夢、鈴仙、てゐ、慧音。以上十三人が背筋をぴんと伸ばして正座しているのだ。

ははは、実に愉快じゃ。なんて言っている場合じゃない。

「今までのことはすべて俺が三倉を好きになるために仕向けた。それは分かった。おっちゃんたちも死んでないことも理解した。んでもってついでに俺の母親たちを殺した真犯人も打ち明けたつても分かった。そしてまあ、もうそれに関してももうどうでもよく思えて来た。全部お前らの迷惑通りだって言うのも、よく分かった」

普通ならこの状況ですら楽しむであろう紫さんもガクブルしているんだが、これには理由がある。

俺の刀だ。今、俺の刀はこれまでの比ではない能力を発揮している。どんな能力かと言うと――いや、それはその能力が発現したときにでも話そう。今話してもしょうがないことだし、当分振るわれない能力だから、それまでに読者の方々は忘れてしまっただろう。と、

最近よく受信する怪電波を言ってみる。

てかさー、ホントは三倉は嫌がってたらしいから正座させたくないんだけど、止めきれなかったのね。これもけじめと言う奴じゃ。嘘じゃ。

「しかしな、誰かが死ぬなんて言うのは嘘でも気持ちのいいもんじやないんだ。二度とこういうことはするな！　しかも鈿女命なんて目の前で殺されて、一瞬本気で楓を生かすことが出来ないと思ったぐらいだ！」

「あうー」

楓が可愛く唸っているが、赦すつもりはない。てか赦せるものか。結局、主犯が楓であることに変わりはないのだから。すべては楓が言い出したこと。それは全員がそう言ったので間違いないだろう。あー苛々する。

完全に俺が三倉を想うようになるまで、ずっと続いたドツキリ。

楓、鈿女命、牛頭、紫さん、鈴仙、慧音が持てる力を駆使して、幻覚を見せるだとか色んなことをしたという事実が本当に腹立たしい。

この際だから、鈿女命、馬頭、牛頭的能力を紹介しよう。楓はすでに言った通りなので割愛。

鈿女命は幻覚を見せる程度能力。

馬頭は姿を見せる程度能力。

牛頭は姿を消せる程度能力。

鈿女命の能力に関してはそのままだから省略するとして、馬頭と牛頭的能力について話そう。

まあ、簡単な事なんだけどな。馬頭の姿を見ている者には、牛頭の姿が見えない。ただそれだけのことだ。ちなみにこの能力への対処法は、牛頭を見ていればいい。

だがあのときは馬頭だけで俺の前に現れたからな。牛頭の姿は見えなかったわけだ。その間に何かしたのは分らないけれど、まあ、そんなことはどうでもいいか。ここに正座しているということ

は、牛頭も何かしら今回の件に携わっているはずだし。

ちなみに頭は牛です。首から下は人です。馬頭と並んでかなり面白いことになっています。

それと鈿女命は、博麗神社以前にも幾度か接触していたらしい。変装して、みたいだけど。例えば、里の住人Aさんとか、甘味処の店員とか。さすが芸能の神。演技力は本当にすごい。

ってそんなことは置いといて、そういえば一つ気になることがあったのだ。

「なあ、鈿女命がここに来たときのことだけれど、あの賽銭箱付近で大きな音を立てたのは誰なんだ？」

……。

おい、何この沈黙。俺は何となく牛頭だと思ってただけど。俺らを外へ連れて来て、霊夢たちと離れ離れにするためにやったんじゃないの？

あ、実は俺の隣に天子がいるんだが、彼女も何か頬が引き攣っている。うむ、俺も同じ顔をしていることだろう。

「そうだ！ 三倉、お前は聞いただろ？」

「う、うん。でも私も誰がやったかまでは知らないし」

「というか、そんなことを実行したのなんていないわよ？」と横から紫さん。

紫さんは一部始終を監視していたらしいから、本当なのだと思う。刀を恐れている彼女が、今ここで嘘を言うとは思えないし。

「ちなみに私はそんな音を聞いていないわ」

なんてご丁寧に付け足してくれている。

えっと、何それ。

幻想郷でそんな怪談めいたことが起きるのかよ。そんなことを想っていたら、霊夢と目が合った。って、何か冷たい視線。

「アンタ、変なのが憑いてるっばいわよ？」

そんな目で言う言葉か！

てか何だよこの落ちは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5547j/>

東方桜桐記

2010年10月8日23時21分発行